東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 16

東京大学本郷構内の遺跡

薬学部南館地点
薬学部資料館地点

2021

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 16

東京大学本郷構内の遺跡

薬学部南館地点
薬学部資料館地点

2021

東京大学埋蔵文化財調査室

巻頭図版　1

薬学部南館地点　SE10

薬学部南館地点

巻頭図版　2

薬学部資料館地点　北壁土層堆積状況

薬学部南館地点出土かわらけ

例　　言

1. 本報告は、東京大学本郷構内、薬学部南館、薬学部資料館新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 薬学部南館地点（埋蔵文化財調査室管理番号「本 15」）は、調査、整理時に「薬学部新館（略称「YS」と称していた地点であり、既出の年報、論文等には「薬学部新館地点」と記載されている。本報告の作成にあたり、現在の施設名称である「薬学部南館地点（略称「YS」）」に改称した。
　薬学部資料館地点（埋蔵文化財調査室管理番号「本 28」）の略称は、「FPS」である。
　出土遺物に行った注記は、それぞれ「YS」、「FPS」である。

3. 両地点は、隣接しており、東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷構内（東経 139 度 45 分 48 秒、北緯 35 度 42 分 36 秒、世界測地系 9 系 X 座標－ 32145 ～－ 32202、Y 座標－ 6477 ～－ 6425）に所在している。

4. 両地点は、東京都遺跡地図「文京区 47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平] 住居・[近] 礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣 [旧][縄][弥][古][平][近])」内に位置している。

5. 各地点の調査面積は、薬学部南館地点 1,300㎡、薬学資料館地点 540㎡である。

6. 各地点の調査期間・整理期間は以下の通りである。
　薬学部南館地点
　　試掘調査　　1988 年 8 月 3 ～ 5 日
　　事前調査　　1992 年 10 月 21 日～ 12 月 18 日
　　整理作業　　2016 年 4 月 1 日～ 7 月 27 日、9 月 26 日～ 10 月 13 日
　　報告書編集　2021 年 1 月 5 日～ 1 月 31 日
　薬学部資料館地点
　　事前調査　　1995 年 7 月 24 日～ 9 月 1 日
　　整理作業　　2016 年 7 月 28 日～ 8 月 31 日、9 月 26 日～ 10 月 13 日
　　報告書編集　2021 年 1 月 5 日～ 1 月 31 日

7. 本地点の試掘調査・事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、試掘調査は寺島孝一、事前調査は寺島孝一・堀内秀樹（薬学部南館地点）、武藤康弘（現、奈良女子大学）（薬学部資料館地点）が担当した。

8. 本報告の編集は、堀内秀樹、香取祐一、小林照子が行った。

9. 執筆分担は以下の通りである
　Ⅰ　堀内秀樹
　Ⅱ　第Ⅰ章、第Ⅱ章　堀内秀樹
　　第Ⅲ章　第 1 節　香取祐一、第 2 節　大貫浩子、第 3 節　阿部常樹
　Ⅲ　第Ⅰ章　堀内秀樹
　　第Ⅱ章　第 1 節　小池聡、第 2 節　香取祐一
　　第Ⅲ章　堀内秀樹
　　第Ⅳ章第 1 節　大貫浩子、第 2 節　阿部常樹
　Ⅳ　堀内秀樹、大貫浩子

10. 伊藤恒彦氏、小池聡氏には、旧石器時代の実測・分析を依頼し、玉稿をいただいた。

11. 阿部常樹氏には、動物遺体の鑑定・分析を依頼し、玉稿をいただいた。

12. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅰキャンパス、駒場Ⅱリサーチキャンパス、茨城県石岡市八郷町柿岡 414 東京大学工学部・工学系研究科附属柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。

凡　　例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。
SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SP：ピット　SU：地下室　SX：性格不明の遺構

2. 本文中に記載した遺構番号は、各地点ごとに 1 から番号を付与した。

3. 本報告の遺物実測図の縮尺は、基本的に旧石器時代の遺物は 1/1、近世の遺物は 1/3 であるが、これと異なる場合には倍率表記を行った。

4. 出土遺物の写真は、基本的に添付した CD-ROM に JPEG 形式で圧縮して記録した。

5. 本文、挿図、観察表、CD-ROM の写真で使用した遺物番号は、共通の番号を使用した。

6. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
・－ －は、断面を表している。
・擂鉢の↓――↓は、体部擂目の範囲を表している。
・口唇部の＼←→／は、敲打痕を表している。

7. 本文中に記載した陶磁器・土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、および「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」（安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012）に準拠している。
　両地点からは、コンテナ箱にして 70 箱ほどの遺物が出土している。これは調査時に必要と判断された出土状況などの記録以外に、遺物として取り上げを行わなかった瓦の細片、礎石や組石などに使用された石やその後込めに使用された割石、壁土、漆喰、炭化物、火山灰、あるいは取り上げる際に崩壊するような一部の遺物を除外した出土遺物の総量である。この中には、胎質別に陶磁器・土器類、人形・ミニチュア、瓦、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、動物遺体等が含まれる。本報告では動物遺体については人工遺物と分けて記述を行った。人工遺物については遺構別に遺構番号順に記載した。
　遺物実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを代表すると判断される遺物を中心に、完形率、希少性などを踏まえて図化選択を行った。
　遺物観察表は、全て添付の CD-ROM に xls ファイルにて、保存・記録している。
　遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを 1280 × 850 ピクセルで jpeg 形式に圧縮し、添付の CD-ROM に保存・記録している。

8. 本地点の調査では、調査区の形状に適した任意のグリッドを設定して行ったが、その後に作成した東京大学構内遺跡グリッド（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）を用いて表記した。

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ
- A9　福建・広東系
- A10 西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－薩摩系
R－三田系
S－飯能系
Z－不明

○器種

1. 碗	2. 皿･平鉢	3. 大皿･大平鉢	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉･火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺･甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 溲瓶	29. 擂鉢	30. 餌入れ
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	
63. あんか	64. 煙硝擂鉢	65. 乳棒	66. 硯屏	67. 釜

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類

コード表記

○○_○○○○_○○○

- 技法コード
- 器種コード
- 産地コード
- 胎質コード

器種コード

○○○○

- 連番
- 1：ひと形
  2：動物形
  3：1・2以外
- 1：人形
  2：器物
  3：建造物
  4：遊具
  9：不明
  0：その他

胎質コード

J：磁器（磁質）
T：陶器（陶質）
D：土器（土師質）
R：瓦　（瓦質）

産地コード

A：輸入陶磁
B：肥前系
C：瀬戸･美濃系
D：京都･信楽系
E：備前系
Q：江戸在地系
Z：不明

技法コード

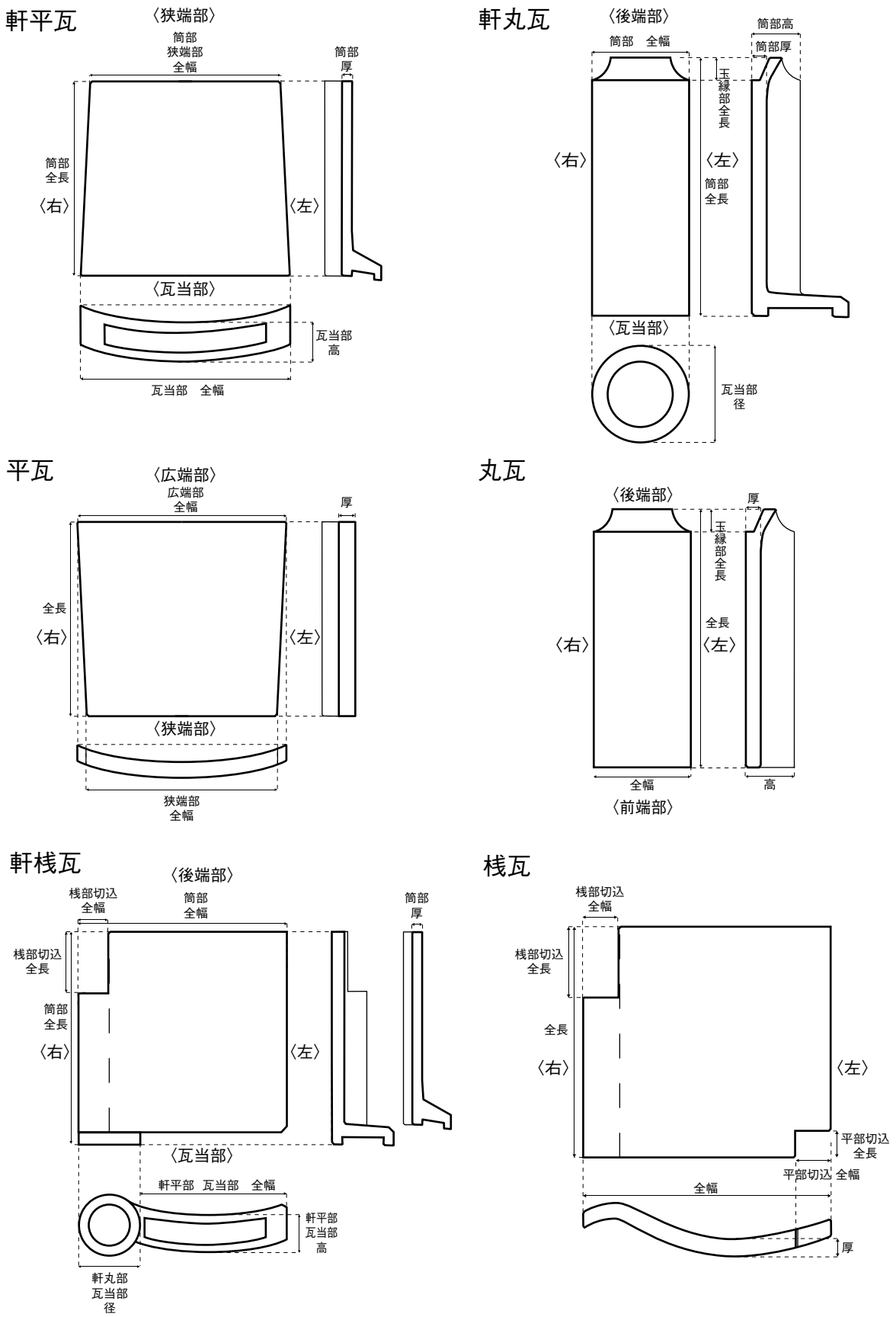
○○○

- f：中実
  o：底部開口
  e：中空
- 1：1枚型
  2：複数枚型
- H：手びねり
  M：型作り
  W：ろくろ
  B：板作り
  A：加撃

器種コード(詳細)

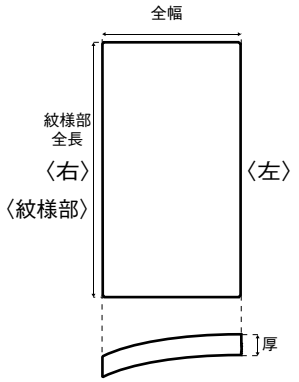
1000	人形								
1100	ひと形								
1101	天神	1102	恵比寿	1103	大黒	1104	福禄寿・寿老人	1105	布袋
1106	不動明王	1107	地蔵菩薩	1108	猩々	1109	西行	1110	裃人形
1111	力士	1112	朝鮮通信使	1113	蹴鞠人形	1114	坊主人形	1115	虚無僧
1116	猟師	1117	猿曳き	1118	福助	1119	笛吹き	1120	若衆
1121	姉様	1122	太夫（花魁）	1123	お多福	1124	三味線弾き	1125	裸婦
1126	おぼこ・禿	1127	唐子	1128	ぶら人形	1129	這子	1130	狆抱き童子
1131	亀乗り童子	1132	狆乗り童子	1133	面持ち童子	1134	金太郎	1135	桃持ち童子
1136	獅子舞	1137	鯛抱き童子						
1200	動物形								
1201	狛犬	1202	獅子	1203	猿	1204	犬	1205	馬
1206	狐	1207	牛	1208	猫	1209	兎	1210	鼠
1211	狸	1212	虎	1213	象	1214	鳩	1215	鶏
1216	鴛鴦	1217	木菟	1218	亀	1219	蛙	1220	鯉
1221	鯛・鯛車	1222	金魚	1223	蟬				
1300	その他（1100･1200以外）								
1301	達磨	1302	首人形	1303	獅子頭	1304	面	1305	陽物
2000	器物								
2001	碗	2002	皿	2003	鉢	2004	銚子	2005	瓶
2006	壺	2007	片口鉢	2008	急須	2009	土瓶	2010	鍋
2011	釜･茶釜	2012	擂鉢	2013	蓋	2014	七厘・焜炉	2015	石臼
2016	竈	2017	器台	2018	硯	2019	水滴	2020	銭貨
2021	五鈷鈴	2022	柚でんぼ	2023	香炉・風炉				
3000	建造物								
3001	祠	3002	塔	3003	城郭	3004	橋	3005	塀・袖垣・石段
3006	民家・庵	3007	灯籠	3008	鳥居	3009	御輿	3010	舟
3011	庭園・背景	3012	仕切り盤						
4000	遊具								
4001	土鈴	4002	独楽	4003	笛	4004	碁石状製品	4005	面模
4006	泥面子・芥子面	4007	土玉	4008	円盤状製品	4009	車輪状製品		
9000	不明								
0000	その他								

人形・玩具分類コード

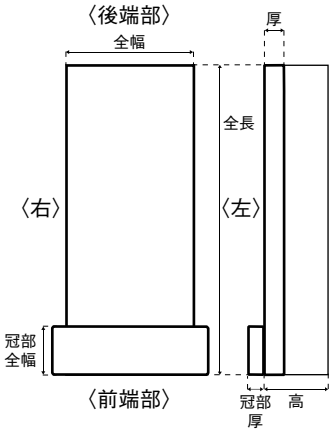


瓦凡例(1)　軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒桟瓦、桟瓦

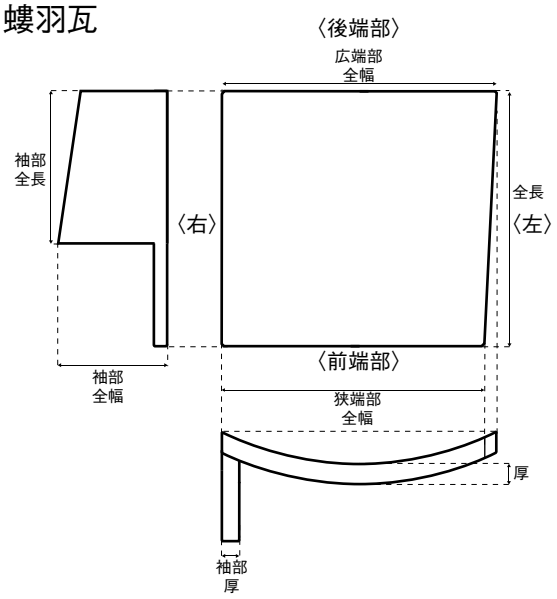
熨斗瓦



冠瓦



螻羽瓦



瓦凡例(2)　熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

東京大学本郷構内の遺跡

薬学部南館地点、薬学部資料館地点
発掘調査報告書

目　　次

例　　言

凡　　例

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置 …… 3

第２節　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3

Ⅱ　薬学部南館地点

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に到る経緯 …… 13

第２節　調査の方法と経過 …… 13

第３節　調査の概要 …… 13

第４節　基本層序 …… 14

第Ⅱ章　遺構 …… 18

第Ⅲ章　遺物

第１節　縄文時代の遺物 …… 37

第２節　江戸時代の遺物 …… 37

第３節　動物遺体 …… 59

Ⅲ　薬学部資料館地点

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に到る経緯 …… 65

第２節　調査の方法と経過 …… 65

第３節　調査の概要 …… 65

第４節　基本層序 …… 66

第Ⅱ章　旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物

第１節　旧石器時代 …… 67

第２節　縄文時代 …… 69

第Ⅲ章　江戸時代の遺構 …… 78

第Ⅳ章　江戸時代の遺物

第１節　人工遺物 …… 85

第２節　動物遺体 …… 93

Ⅳ　考察
　薬学部南館地点・薬学部資料館地点の成果と藩邸初期の景観
堀内　秀樹 …… 97
　薬学部南館地点における 17 世紀初頭のかわらけ
大貫　浩子 …… 108
参考文献
報告書抄録

Ⅰ　遺跡の位置と環境

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置

調査を行った 15 薬学部南館地点（以下、「南館地点」と略す）、28 薬学部資料館地点（以下、「資料館地点」と略す）は、東京都文京区本郷 7-3-1、東京大学本郷キャンパス南側にある薬学部本館、薬学部総合研究棟、医学部附属動物実験施設との間に位置している。

東京大学本郷構内は、全域を「文京区 No.47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 No.28 弥生町遺跡群」として周知の遺跡として登録されている。埋蔵文化財調査室では 1984 年以降、事前調査、試掘調査、立会調査など含め、継続的に埋蔵文化財調査を行っている。本地点が位置する本郷キャンパス南側周辺では、22 山上会館龍岡門別館（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）、24 医学部教育研究棟（同 2019・2020）、43 医学部附属病院基幹整備共同溝等（同 2016）、54 総合研究棟（文・経・教・社研）（同 2002）、66 薬学系総合研究棟（同 2004、同 2006）、68 インキュベーション施設（同 2004）、76 ベンチャープラザ（同 2008）、115 図書館前クスノキ移植に伴う事前調査、クリニカルリサーチセンターＢ棟（同 2019）などの調査が行われ、江戸時代加賀藩本郷邸南域の状況が次第に明らかになっている（Ⅰ－１図）。これらについての詳細は上記の報告書、年報を参考にされたい。

調査区は、東京大学本郷構内全域を対象としたグリッド（以降、「東大グリッド」と記す）（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）の東西 Ee ～ Ep 区、南北 210 ～ 221 区内（Ee212 ～ 214 区、Ef210 ～ 220 区、Eg210 ～ 220 区、Eh210 ～ 220 区、Ei210 ～ 220 区、Ej210 ～ 220 区、Ek210 ～ 220 区、El215 ～ 220 区、Em215 ～ 221 区、En216 ～ 221 区、Eo216 ～ 221 区、Ep219 ～ 220）に位置している（Ⅰ－９図）。東大グリッドは世界測地系 9 系に準拠して設定しており、調査区内に位置する Eh217 杭は、世界測地系 9 系 X= － 32180m、Y= － 6365m に、En219 杭は同 X= － 32190 m、Y = － 6335 mに該当する。調査区の経度は、東経 139 度 45 分 48 秒、北緯 35 度 42 分 36 秒に位置する。

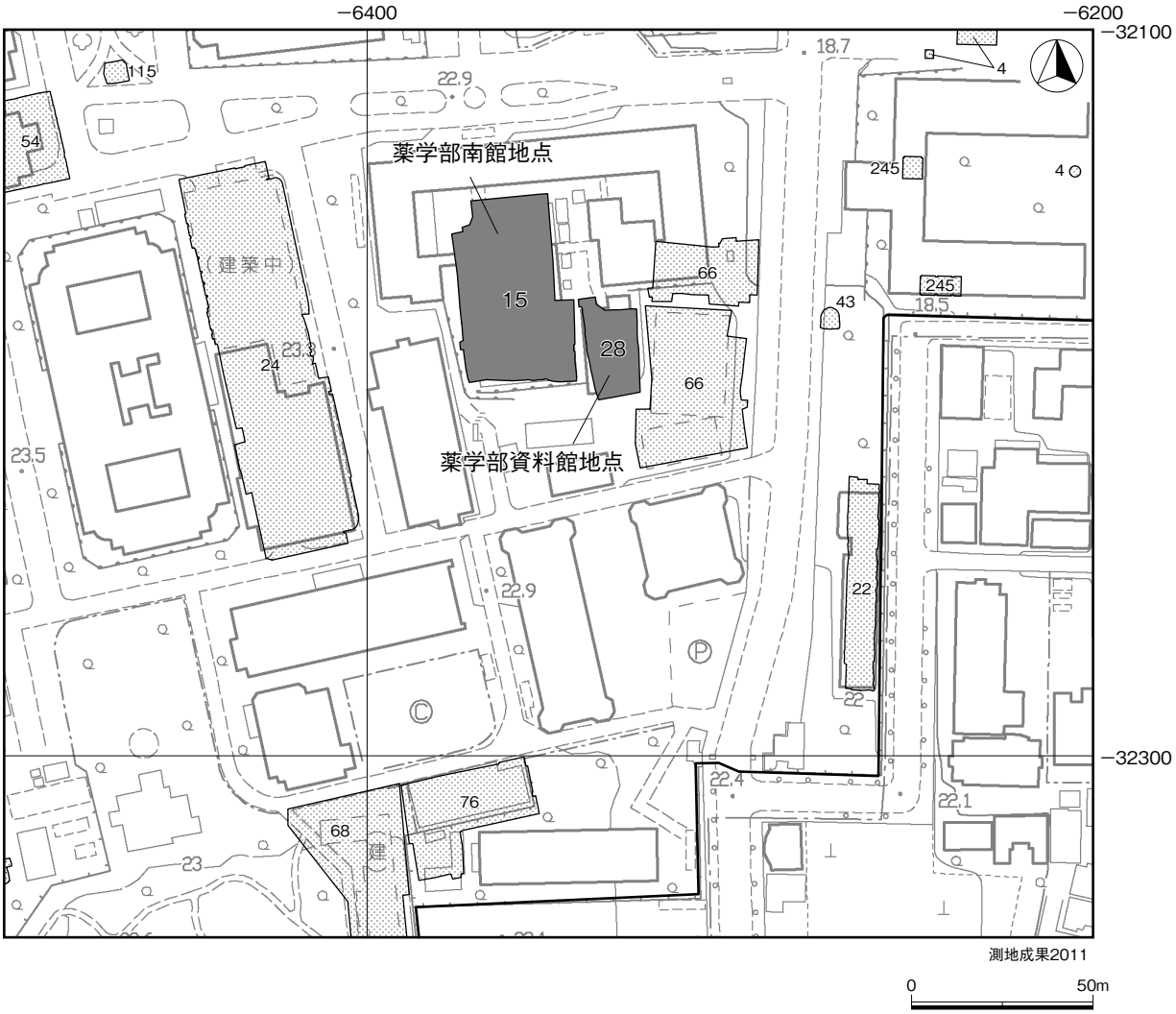
第２節　遺跡の地理的・歴史的環境

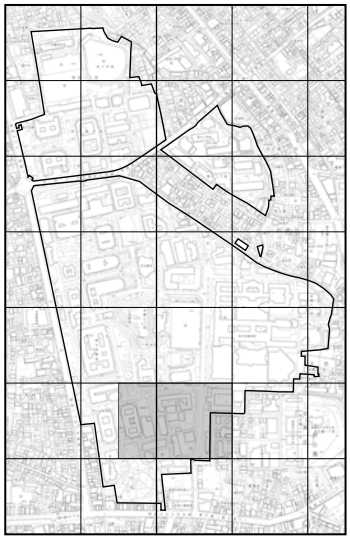
（１）地理的環境

本郷キャンパスの地理的環境については、これまで理学部 7 号館地点の報告（鈴木 1989）、浅野地区Ⅰの報告（橋本 2009）、香取論考（香取 2018）などに触れられており、詳細は参照されたい。本郷キャンパス内は武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台地（神田台）上の M2 面上に存在する。このうち標高約 20 ～ 22 mの上位面と 15 ～ 17 mの下位面とが存在するが、このうち本地点は上位面に位置する。調査区周辺は、現表での状況においても医学部教育研究棟地点から東へと緩やかに下る斜面地である。本郷台地の東は上野台地を挟んで、滝野川、千駄木、根津、湯島と南流する旧石神井川によって開折された根津谷が存在する。旧石神井川は、従来不忍池からさらに南流して江戸湾に注ぐものであったが、江戸幕府の水利政策により加賀藩下屋敷のある滝野川付近より人為的に東流させ、隅田川に流入するように改変されている。

調査区が位置する本郷キャンパス南域は、3 つの谷の谷頭付近にあたっている（Ⅰ－５図）。一つ目は、台地東へ流下する小河川によるもの（谷 1）で、この谷の状況は成瀬論考によって詳細に触れられている（成瀬 2016）（Ⅰ－２図）が、概要だけ記すと、この谷は本郷台地の東を南流する旧石神井川へと続く支谷で、その頂部が南館地点から確認され（Ⅰ－３図）、調査区付近では資料館地点北側→薬学系総合研究棟地点→第 2 中央診療棟地点から東にむかって開析される。二つ目は、本地点北側に位置する三四郎池湧水を源とするもの（谷 2）で、池より北方に流下し、工学部 3 号館地点中央を抜け、現在の弥生門から東流、根津谷に至る谷である。三つ目は、現在の大学南端の本郷台遺跡群第 1 地点（大成エンジニアリング 2008）付近を谷頭とする埋没谷（谷 3）で、学内南縁を西流し、現在の総合博物館南側から菊坂を抜けて、小石川谷へ至る谷である。

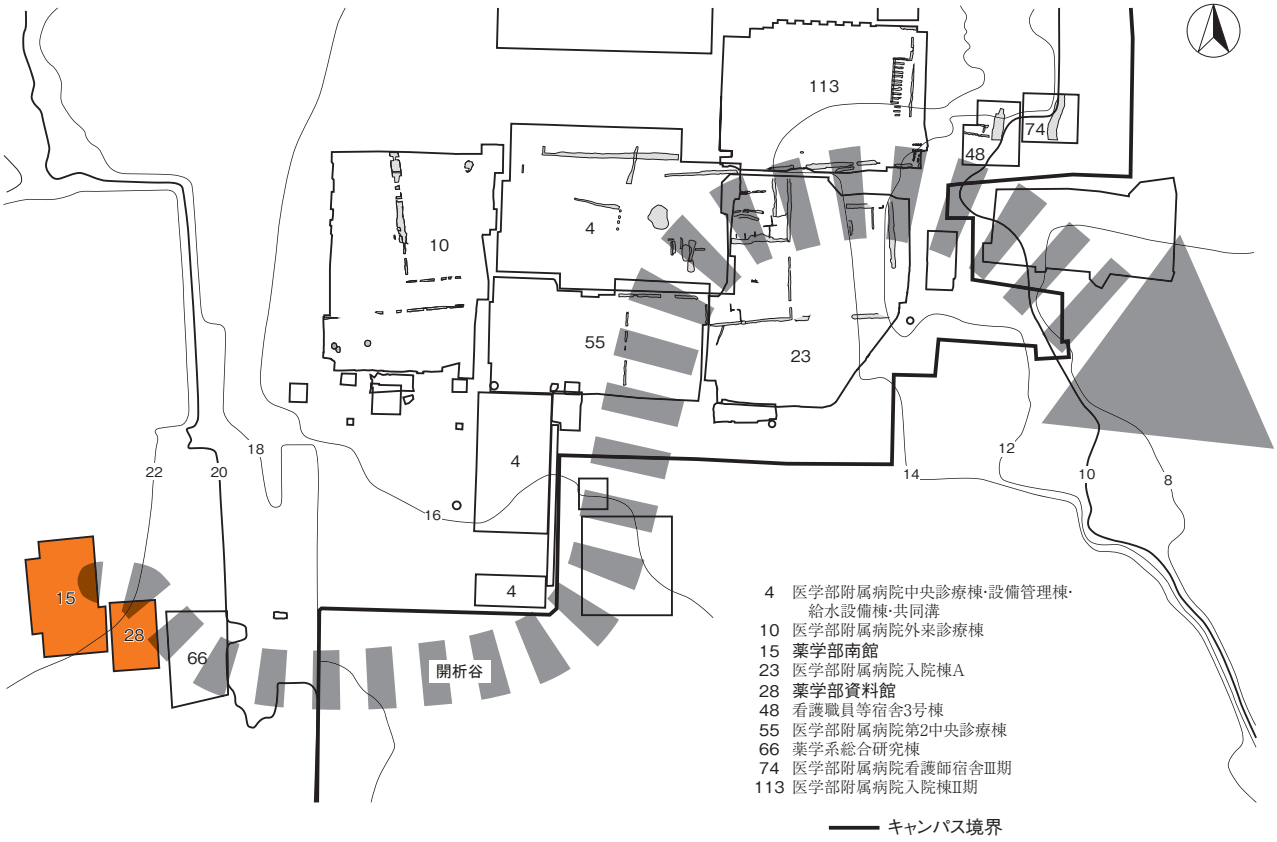
調査地点付近をフォーカスすると、南館地点内では調査区北東 214 ライン付近の東壁が最も低く、その南北側は緩やかに上っている（Ⅰ－３図）。武蔵野標準層位Ⅲ層上面の標高は、19m 程度であるが、北端で 20.2m、南端で 21.4m である。資料館地点では地形の転換点にあたり、西壁である Em ～ En ラインあたりから東、あるいは谷が入る北側に落ち込んでいる。旧石器時代の礫群が確認された T.P.7 は、上記谷 1 の開析谷を望む南斜面に位置している。





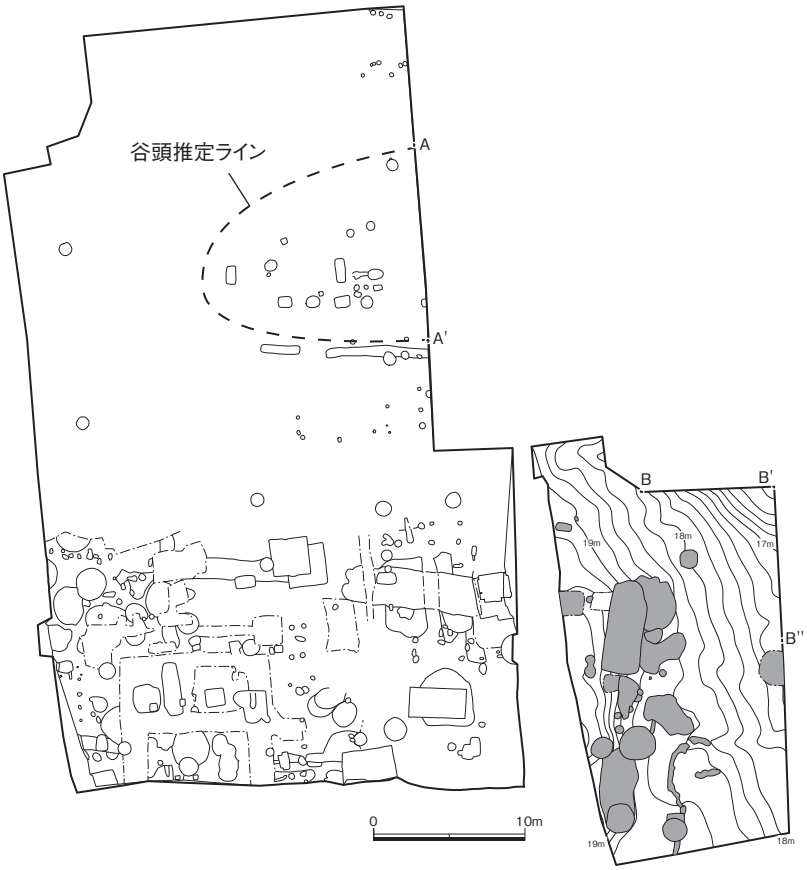
4　医学部附属病院中央診療棟･設備管理棟･給水設備棟･共同溝
22　山上会館龍岡門別館
24　医学部教育研究棟
43　医学部附属病院基幹整備共同溝等
54　総合研究棟［文･経･教･社研］
66　薬学系総合研究棟
68　インキュベーション施設
76　ベンチャープラザ
115　図書館前クスノキ移植に伴う事前調査
245　クリニカルリサーチセンターB棟

Ⅰ-1図　調査地点の位置

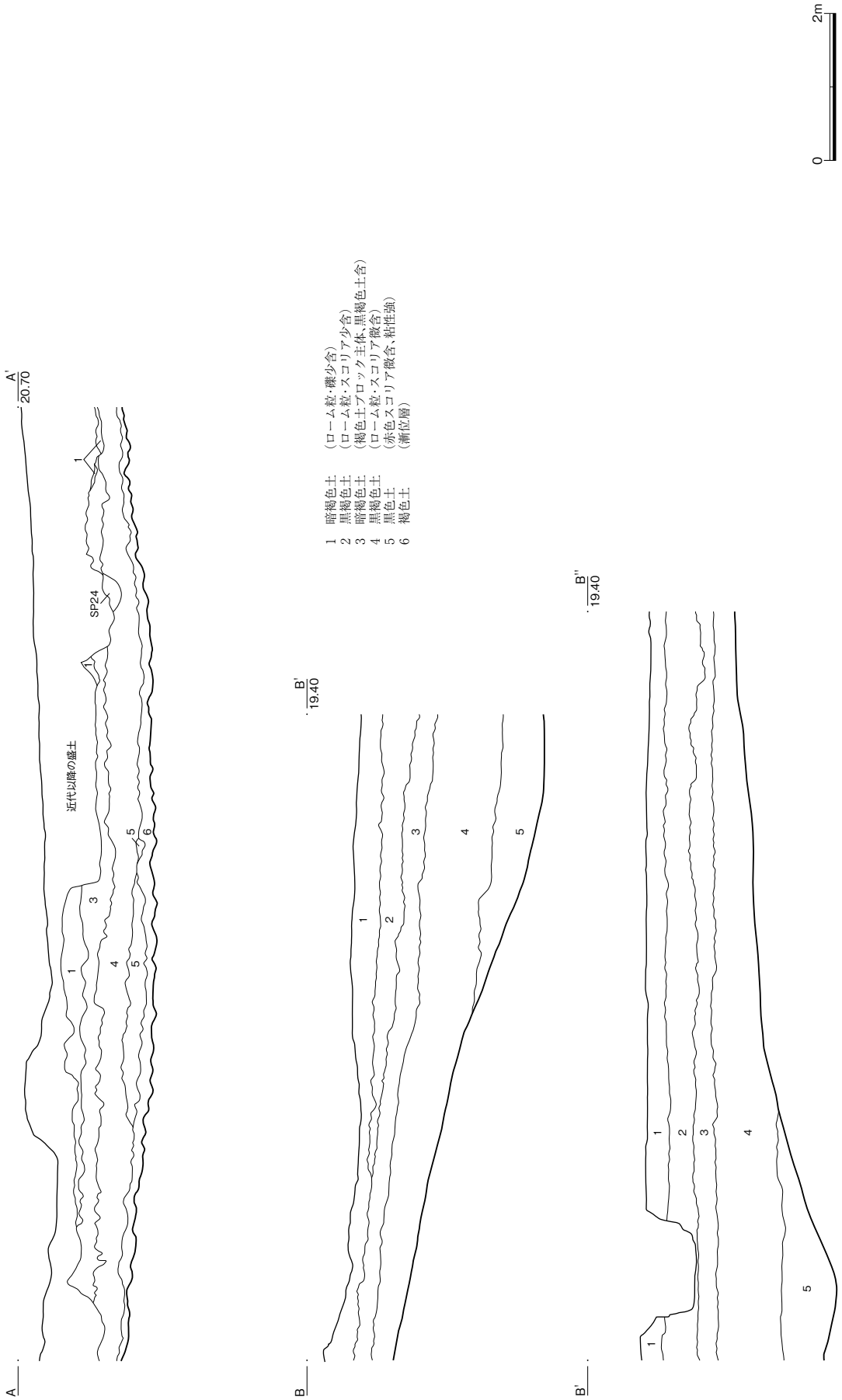


Ⅰ-2図 開析谷推定ライン　(1/2000)

等高線は、明治16年『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』よりトレース



Ⅰ-3図　調査地点の地形　(S=1/500)



Ⅰ-4図　調査区壁面セクション

（2）歴史的環境

両地点からは、旧石器時代、縄文時代、近世、近代の遺構・遺物が確認された。

旧石器時代

旧石器時代は、資料館地点から武蔵野標準層位Ⅲ層下部からⅣ層にかけて石器ブロックと礫群が出土している。前節地理的環境で触れた谷１の両岸の 74 看護師宿舎Ⅲ期地点、101 ドナルド・マクドナルド東大地点、113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点、4 設備管理棟地点ではⅢ層からⅦ層中から石器、剥片、礫群などが出土している。また、谷２三四郎池西岸の２文学部３号館地点では、Ⅲ～Ⅳ層中から石器集中区３ブロック、礫群１ブロックが確認されている。谷３では現在の菊坂南岸の真砂遺跡第１地点や第５地点などから確認されており、特に濃密に出土した第１地点では、Ⅳ層～Ⅵ層の文化層（5 遺物集中区、20 礫群）とⅥ層～Ⅸ層の文化層（2 遺物集中区）とが確認されている。

縄文時代

縄文時代では、遺構は確認されなかったものの、南館地点から中期後半、資料館地点から晩期の遺物が出土した。学内東南域からは、4 法学部４号館地点から中期後半、後期後半および晩期の土器、23 医学部附属病院入院棟 A 地点および 55 同第２中央診療棟地点から晩期前半の土器がまとまって出土している。遺構では、24 医学部教育研究棟地点、68 インキュベーション施設地点、66 薬学系総合研究棟地点から早期後半と推定される陥穴、19 医学部附属病院看護職員等宿舎１号棟地点、74 同看護師宿舎Ⅲ期地点、113 同入院棟Ⅱ期地点から早期末の炉穴、48 医学部附属病院看護職員等宿舎３号棟地点、74 同看護師宿舎Ⅲ期地点、25 同看護師宿舎ゴミ置き場地点から前期中葉の竪穴住居が出土している。

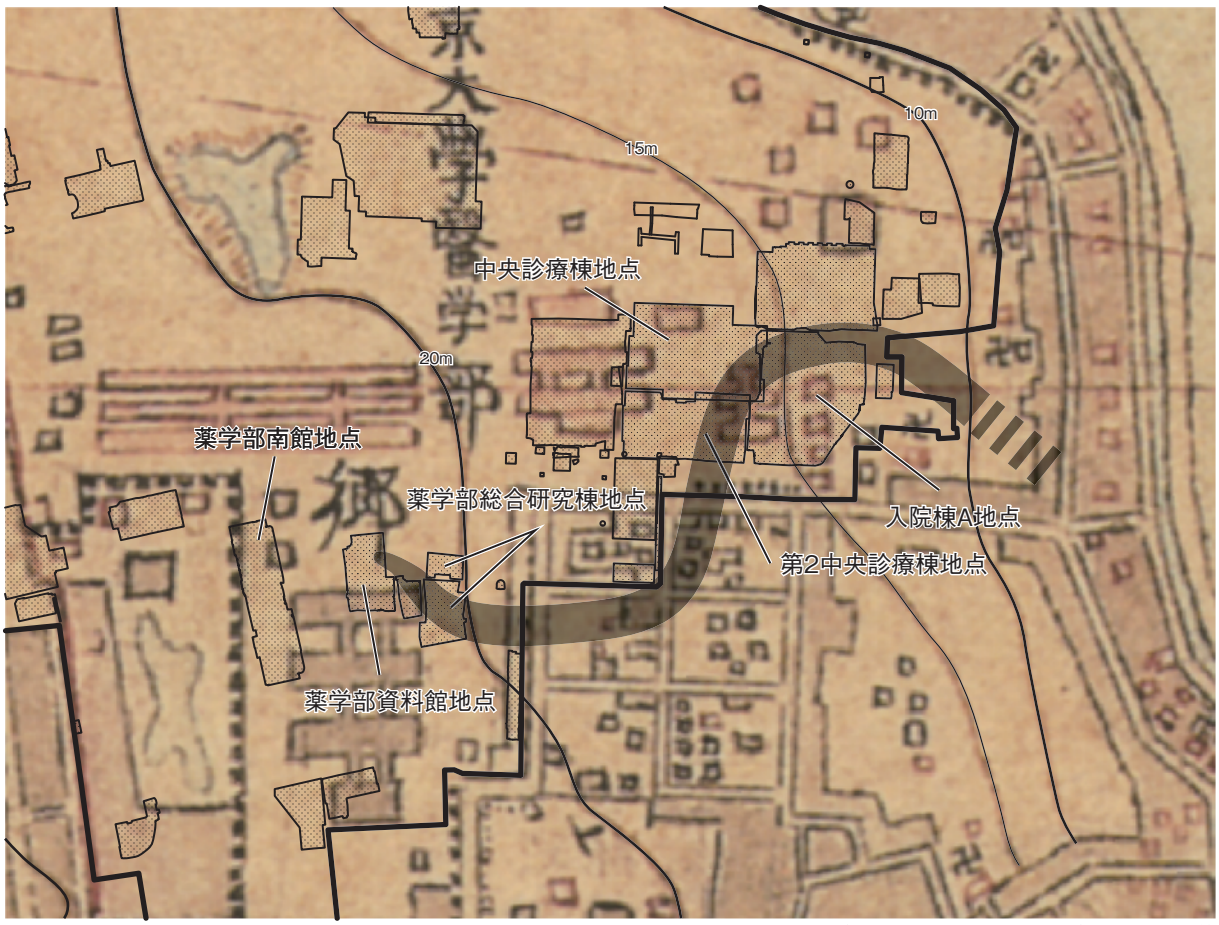
近世

これまで行った発掘調査では、本郷キャンパス内から、加賀藩邸を遡る遺構や遺物は、確認されていない。「東邸沿革図譜」によると当該期は大久保忠隣の屋敷地であったとされる。大久保忠隣は慶長 19（1614）年に改易されるが、その後、元和２～３（1616 ～ 17）年頃、加賀藩前田家が拝領し、下屋敷として利用をする事になる。藩邸の開発はやや遅れて、寛永３（1626）年のこととされる（石川県図書館協会 1938）。寛永前半に比定される井戸などの生活遺構は、本地点から多く確認されているが、24 医学部教育研究棟地点、54 総合研究棟（文・経・教・社研）地点など三四郎池南側から多く確認されており、藩邸当初の居住空間がこの周辺であったことが窺える。

文献では、寛永 16（1639）年、3 代当主利常が本郷邸に隠居し、慶安３（1650）年には本郷邸全焼している記事が確認できる。ただし、この火災についてはこれを裏づける調査事例は確認されていない。その後、明暦３（1657）年に起きた明暦の大火を契機に藩邸南側の近藤登之助同心、大森半七同心などが居住していた幕臣地２万坪が本郷邸に組み入れられる。それ以前、寛永年間頃の当該地付近の状況は「寛永江戸全図」（臼杵市教育委員会蔵）から知られる（Ⅰ－６図）。また、明暦の大火では上屋敷であった大手前にあった辰口邸も全焼し、本郷邸に５代藩主綱紀が避難し、以後定住したことで、本郷邸は事実上の上屋敷として機能していたと考えられる。これまでの発掘からはそれを裏づけるように 17 世紀後半以降の遺構、遺物の出土が格段に増加する。

この段階の本地点は、医学部教育研究棟地点の成果から、藩邸拝領当初から加賀藩邸内南縁域であったことが推定される。詳細は、同地点の報告（東京大学埋蔵文化財調査室 2019）を参照されたい。

天和２（1682）年の火災では当時の上屋敷であった神田筋違邸および本郷邸共に全焼するが、これを契機として本郷邸が上屋敷として機能することになる。元禄 16（1703）年に起こった水戸様火事によって再び全焼し、御殿空間の土地利用が大きく変化している。この前後の絵図と照合したものが、Ⅰ－７図とⅠ－８図である。この間、本地点は、幕末まで御殿空間の奥御殿域に位置するが、詳細な土地利用については、「Ⅳ 考察　薬学部南館・資料館地点の成果と藩邸初期の景観」を参照されたい。

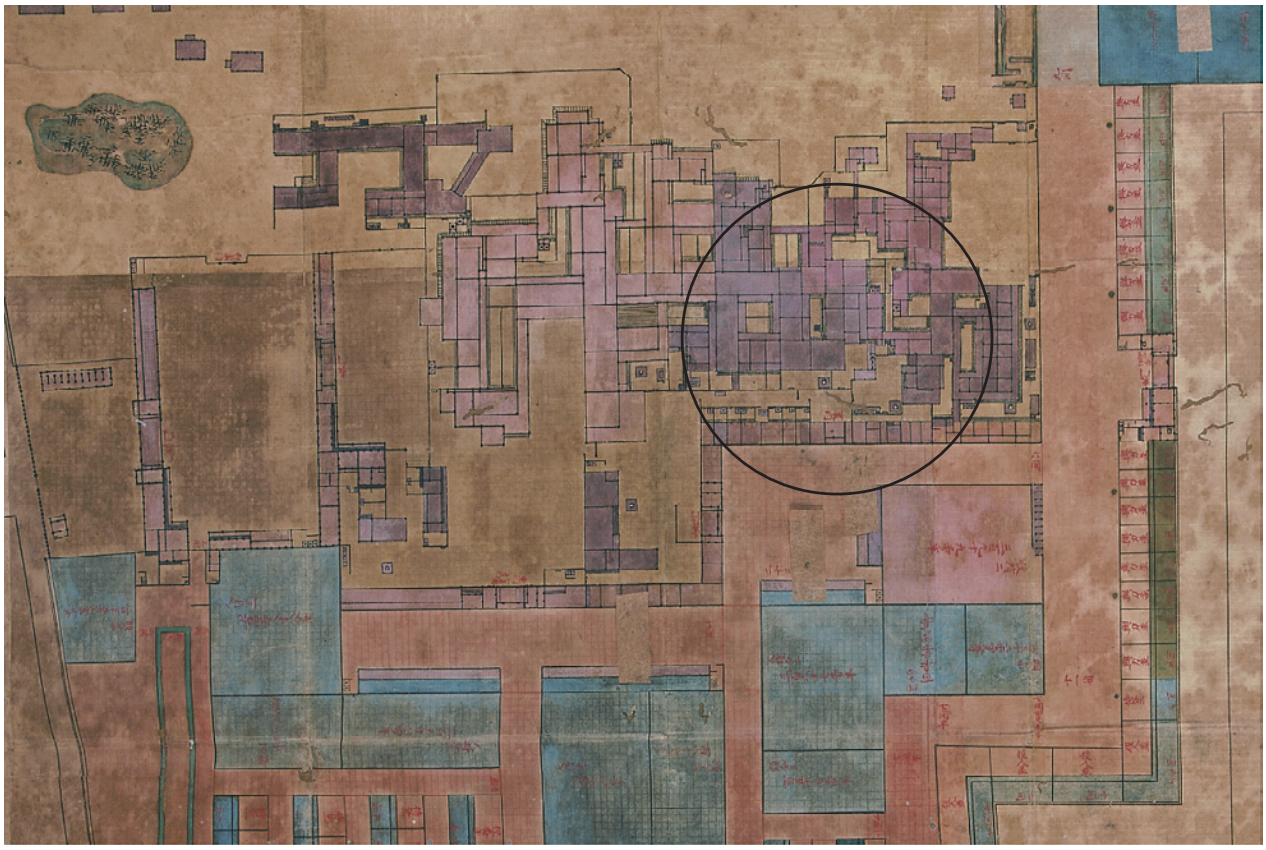


明治前期測量2万分1フランス式彩色地図に加筆

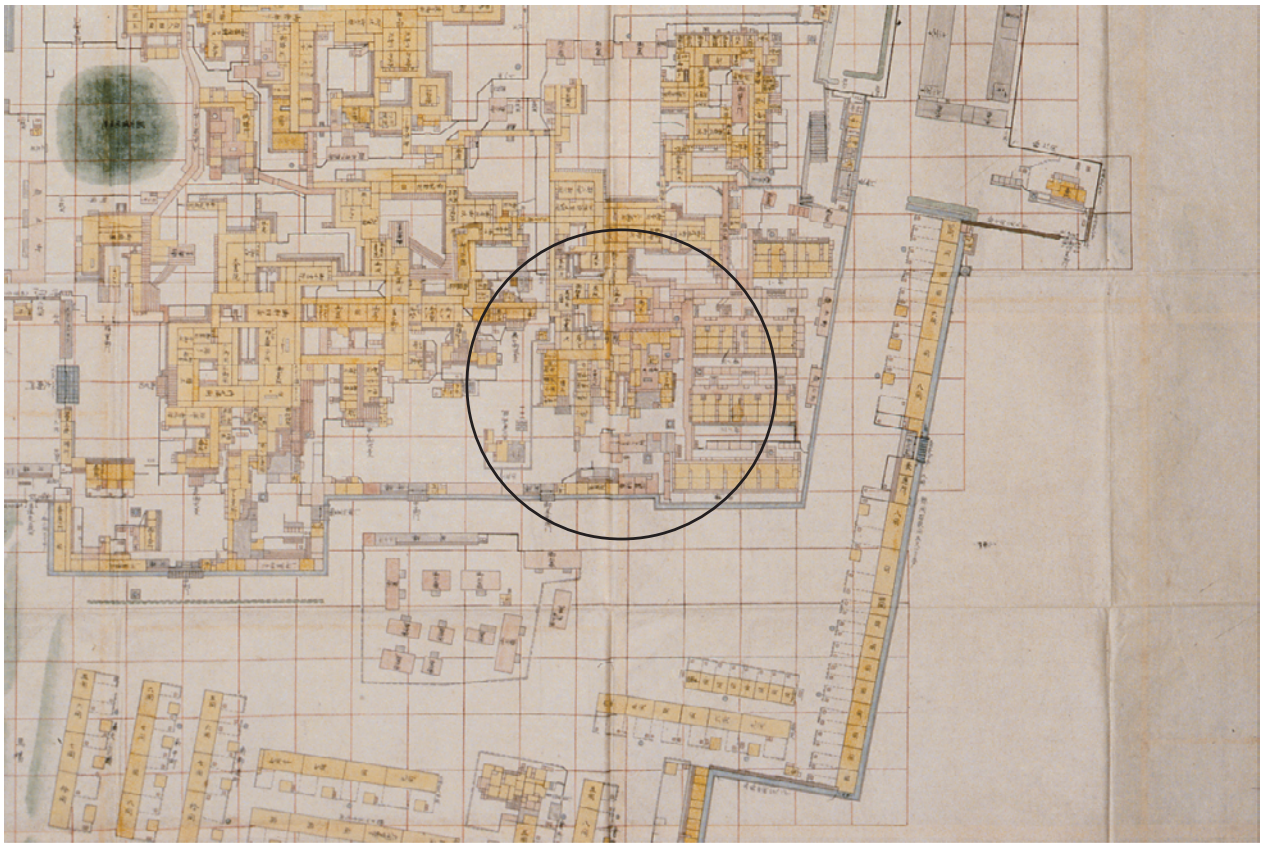
Ⅰ-5図　周辺の地形と埋没谷（S=1/8000）

『寛永江戸全図』（臼杵市教育委員会蔵）

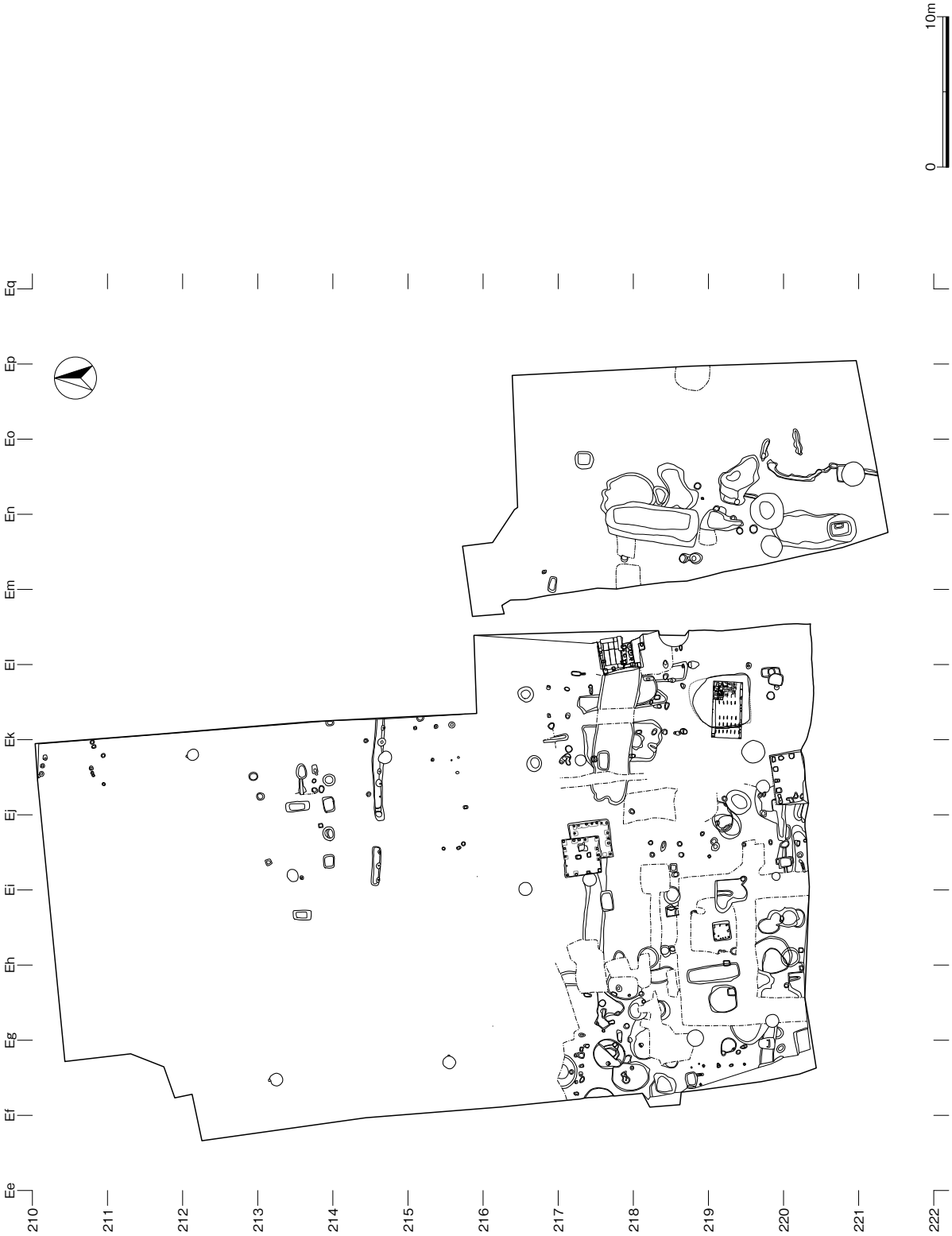
Ⅰ-６図　調査区の位置（１）



I-7図　調査区の位置（２）　御上屋敷御殿閣図（前田育徳会所蔵）



I-8図　調査区の位置（３）　江戸御上屋鋪惣御絵図（金沢市立図書館所蔵）



Ⅰ-9図　薬学部新館地点・薬学部資料館地点全体図　(S=1/400)

Ⅱ　薬学部南館地点

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

(1) 調査の照会と試掘調査

1988 年 7 月に東京大学施設部から埋蔵文化財調査室に、それまで使用していた薬学部本館の南側に新たに校舎（2021 年 3 月現在南館と呼称する）を新設するのに伴い、埋蔵文化財調査に関する照会があった。新校舎建設予定地は、東京都遺跡地図によると遺跡番号 219（東京都教育委員会 1985)、現文京区 47 本郷台遺跡群（本郷七丁目･弥生二丁目、台地、集落･貝塚･大名屋敷、[平] 住居・[近] 礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭･石垣 [旧][縄][弥][古][平][近])内に位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。当該地においても遺跡の遺存状態に応じた埋蔵文化財発掘調査を行う必要があった。

工事に先立って、予定範囲内における遺跡の遺存状況を把握、および調査体制などを設計する目的で、試掘調査を 1988 年 8 月 3 ～ 5 日に行った(調査担当寺島孝一)。試掘調査の結果、表土下は近代以降に大きく撹乱されてはいたものの、江戸時代の加賀藩前田家江戸藩邸に伴う遺構が遺存していることが確認され、建築予定地域内全域について発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、施工に合わせて 4 年後の 1992 年 10 月 21 日～ 12 月 18 日に行った。

第２節　調査の方法と経過

(1) 調査の方法（Ⅱ－１図）

発掘調査は、建物予定地域全域を対象にして行った。調査面積は 1,300㎡である。調査時は、調査区の形状に合わせて 10m 四方のグリッドを設定して行ったが、本報告は、その後に設定した東大グリッド表記に変更している（東京大学埋蔵文化財調査室 2017)。

(2) 調査の経過

発掘調査は、試掘調査より得られた状況を踏まえて、10 月 22 日より調査区北半から重機による表土掘削を開始した。次いで 11 月 4 日より南半の重機掘削を開始し、6 日に終了した。この間､10 月 26 日より遺構確認を開始、11 月 4 日より遺構の調査を開始した。

調査区北半は、関東ローム層上面付近まで近代以降に大きく撹乱されていた。調査では、深度を有する井戸なども確認されたものの、その他はピットなどの小遺構が中心であったことで順調に進行し、11 月 18 日には北半の調査は終了した。

調査区南半－特に 217 ラインより南－は、北側と比べて撹乱が少なかった。11 月 11 日から遺構確認、11 月 16 日から遺構調査を開始した。12 月 11 日に全ての遺構の調査が終了し、12 月 14 日に全体写真の撮影を行った。12 月 14, 15 日に人力による調査を行えなかった井戸の下部を重機掘削による調査を行い、15 日に全ての野外調査を終了した。

第3節　調査の概要（Ⅰ－9図､Ⅱ－1図､Ⅱ－1表）

発掘調査で確認された埋蔵文化財は､遺構が江戸時代、遺物が縄文時代と江戸時代に比定されるものであった。調査区は、「Ⅰ 遺跡の位置と環境」でも略述したが、本郷台地東側を南流する旧石神井川から西へ延びる支谷の谷頭部にあたり、調査区全体の地形は 213 ライン付近が最も低く、南北両側に上っている。

遺跡は、調査区全域にわたって近代以降に撹乱されていたが、それを除去するとロームが露出し、遺跡の遺存は良いとは言えない状況であった。特に調査区北側は、関東ローム層（Ⅲ層）付近まで撹乱されており､井戸､溝、小土坑が少量検出したに過ぎない。南半と比較すると明らかに遺構数が少なく、江戸時代の遺構、遺物などを伴う生活痕跡の大半が削平されたと推定される。また、確認された井戸の多くは、足掛け施設が相対して付き、井戸側を伴わない素掘りのものであった｡こうした井戸は、本郷構内では全て 17 世紀前半の遺物が出土するもので、このような深度を有する遺構が遺存していた状態であった。

調査区南半－ 217 ラインより南－は、北側と比べて撹乱が少なかった。ただし、217 ライン付近に位置する地下室 SU51、SU98 などは坑底から 1m 程度、調査区南端の SU95、SU106 などでも、坑底から 2m 程度しか遺存していなかった。詳細は「Ⅳ 考察」で後述するが、元禄 16（1703）年火災以降の奥御殿期の生活面から 1m 以上削平されたと推定している。確認された遺構は、17 世紀前半に遡るものが多く確認された。足掛け施設を伴う井戸、廃棄土坑、溝、植栽痕などで、当該地付近が藩邸初期の居住空間であったことが窺える｡これに対して、17 世紀末以降上屋敷期と推定される遺構はごく少量で、

大半が削平されたと考えられる。

第４節　基本層序（Ⅰ－４図）

基本層序は、調査区で最も低い 213 ライン東壁付近で観察を行った。最上層の「近代以降の盛土」と書かれた堆積土は、昭和 2（1927）年に当時の医学部薬学教室（現薬学部）の校舎裏側に増築された校舎によって壊され、その後、本館が竣工した昭和 56（1981）年にこれが壊された際に、形成された埋土である。1 層は近世の盛土である。谷の凹んでいる部分のみに確認された。その他では、南側の一部から確認され、Ek216 区付近が最も良好に遺存していた。ここからは、ローム土上に暗褐色土層が 20 ～ 30cm の厚さで堆積し、その上部標高 20.7m 付近に生活面と思われる硬化面が確認された。この硬化面は、調査区南側の所々で確認されている。

谷は、資料館地点と共通の堆積が確認されており、上層から黒褐色土（2 層）、暗褐色土（3 層）、黒褐色土（4 層）、黒色土（5 層）、ローム漸移層（6 層）であった。

Ⅱ-1図　薬学部南館全体図　(S=1/250)

Ⅱ－１表　薬学部南館地点

種別	番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	年代	遺構図版（Ⅱ−@）	遺物図版（Ⅱ−@）	切り合い	備考
SP	1	Ej210					
SP	2	Ei210					
SP	3	Ei210					
SP	4	Ei210					
SP	5	Ei210					
SP	6	Ei210					
SP	7	Ei210					
SP	8	Ei210					
SP	9	Ei210					
SE	10	Ej212		Ⅱ−2			
SK	11	Ej212･Ej213	17前	Ⅱ−2	Ⅱ−15		
SP	12	Ej213					
SK	13	Ej213					
SK	14	Ej213･Ej214					
SD	15						
SP	16						
SP	17						
SP	18						
SP	19						
SP	21						
SP	22						
SP	23						
SP	24						
SP	25	Ei213					
SP	26						
SE	27	Ej214	?	Ⅱ−3		27>29	
SD	29	Ei214･Ej214･Ek214	17前	Ⅱ−3	Ⅱ−15	27>29	
SP	30	Ek215					
SP	31	Ek215					
SP	32	Ek215					
SP	33	Ek215					
SP	34	Ej215					
SP	36		?				
SE	37	Ei213	17前	Ⅱ−2			
SP	38	Ei213					
SK	39	Eh213					
SK	40	Ei213･Ei214					
SE	41	Ef213		Ⅱ−4			
SE	42	Ef215		Ⅱ−4			
SP	43	Ei215					
SP	44	Ei215					
SP	45	Ei215					
SP	47	Ej215					
SE	48	Ei216	17前	Ⅱ−4			
SK	49	Ej216	17前	Ⅱ−5	Ⅱ−15		
SK	50	Ek216					
SU	51	Ej217	17中～18中	Ⅱ−6	Ⅱ−15	51>98	
SP	52	Ej217	17?				
SD	53	Ek216･Ek217					

種別	番号	グリッド	年代	遺構図版（Ⅱ−@）	遺物図版（Ⅱ−@）	切り合い	備考
SP	54	Ek216					
SP	55	Ek216					
SK	56	Ef217					
SK	57	Ef217･Ef218				57>58	
SK	58	Ef217･Eg217	17前	Ⅱ−5	Ⅱ−15	57>58	
SK	59	Ef218	17前	Ⅱ−5	Ⅱ−16		
SP	60	Ef217･Eg217					
SP	61	Eg217					
SK	62	Ef217･Eg217･Eg218					
SP	63	Ef217･Eg217･Ef218･Eg218					
SK	64	Eg217･Eg218					
SK	65	Ef218					
SK	66	Ef218	17前	Ⅱ−6	Ⅱ−16		
SE	67	Ef217･Ef218	17前	Ⅱ−6	Ⅱ−17～19		
SK	69	Ef219･Eg219					
SE	70	Ef219	17前	Ⅱ−7	Ⅱ−19、20		
SK	71	Ef219･Eg219					
SK	72	Ef219･Eg219					
SK	73	Ef219･Eg219					
SK	75	Ef219･Ef220					
SK	76	Eg219･Eh219･Eg220･Eg220	17後	Ⅱ−7	Ⅱ−20	76>86	遺物被熱
SK	77	Eg218･Eg219	17前	Ⅱ−7	Ⅱ−21、22		
SK	78	Eh219	17前	Ⅱ−7	Ⅱ−22		
SK	79	Eg219･Eg220					
SK	81	Eg217				81>82>83	
SK	82	Eg217				81>82>83	
SP	83	Eg217				81>82>83	
SP	85	Eg220					
SK	86	Eg220･Eg220				76>86	
SP	87	Eh220					
SD	91	Ej217･Ek217･Ek218	17前	Ⅱ−8	Ⅱ−22	100>91、103>91	
SU	92	Ej219･Ej220	17後	Ⅱ−9	Ⅱ−23、24		～天和2年、遺物被熱
SE	93	El218	17前?、近代混入	Ⅱ−10	Ⅱ−25		
SE	94	Ej219	17後	Ⅱ−10	Ⅱ−25		殿閣図にあり、遺物被熱
SU	95	Ek219	17後～18中	Ⅱ−10	Ⅱ−25	95>106	
SK	97	Ei219･Ej219	17?				
SU	98	Ei217	18後	Ⅱ−6	Ⅱ−25	51>98	
SK	99	Eg217･Eg218					
SX	100	Ek217･El217･Ek218･El218	17?（桟瓦あり）	Ⅱ−11	Ⅱ−25	100>91、100>103	
SE	101	Ei217	17前	Ⅱ−11	Ⅱ−26		
SE	102	Ej219	17前	Ⅱ−11	Ⅱ−26、27		
SU	103	Ek217･El217･Ek218･El218	17?	Ⅱ−12		100>103>91	
SE	104	Ei219	17中	Ⅱ−12	Ⅱ−27		
SE	105	Ej217	17前	Ⅱ−12	Ⅱ−27、28		SK77と接合
SU	106	Ek218･Ek219	17前	Ⅱ−13	Ⅱ−28	95>106	
SK	107	Eh219･Eh220	17前	Ⅱ−14	Ⅱ−28		

第Ⅱ章　遺構

本地点から出土した遺構は、95 基で、全て江戸時代に比定されるものである。内訳は、地下室 6 基、溝 4 基、井戸 14 基、土坑 30 基、ピット 40 基、性格不明の遺構 1 基であった。（Ⅱ－ 1 図、Ⅱ－ 2 表）

SE10（遺構Ⅱ－ 2 図）

調査区北側 Ej212 区から確認された素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の南北壁面には相対してやや高さを変えて抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 210cm までの間に合計 10 基確認された。

規模は、直径 70cm、深さは調査を行った確認面より 210cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 20cm、高さ 10cm、奥行き 20cm で、40 ～ 50cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまで、上層暗褐色土、下層黒褐色土の 2 層に分層されるが、両層とも粒子の細かい土である。

遺物は、出土していない。

SK11（遺構Ⅱ－ 2 図、遺物Ⅱ－ 15 図）

調査区北側 Ej212 区で確認された円形の土坑である。規模は、径約 50cm で、壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は粘性・しまりが強い黒褐色土単層である。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、銭、石製品が少量出土している。

SE27（遺構Ⅱ－ 3 図）

調査区中央東側 Ei214、Ej213 区から確認された円形を呈する素掘りの井戸である。遺構の北側で SD29 と重複し、新旧は本遺構が新である。井戸側は確認できなかった。井戸の南北壁面には、相対してほぼ同じ高さに抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 170cm までの間に合計 6 基確認された。

規模は、径 80cm、深さは調査を行った確認面より 170cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 20cm、高さ 10cm、奥行き 20cm で、50cm くらいのピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまでで 2 層に分層されるが、粒子の細かい土である。

遺物は、瓦片が少量出土している。

SD29（遺構Ⅱ－ 3 図、遺物Ⅱ－ 15 図）

調査区中央東側 Ei214 ～ Ek214 区から確認された溝である。SE27 と重複し、新旧は本遺構が旧である。溝の東側は調査区外で遺構全体は復元できない。溝の西側は 170cm のブリッジを挟んで、東西に分かれている。また、溝の南壁側におおむね半間間隔で小ピットが確認されている。

規模は、同一軸上に 2 本の溝があり、西側は長さ 260cm、東側は長さ 670cm で、その間 170cm のブリッジがある。幅は 60 ～ 80cm、深さは約 70cm を計測する。溝底から認められた小ピットは 9 基あり、平面形や規模にはバラツキがあるものの、おおむね半間間隔で並んでおり、本遺構は塀状の施設であったと推定される。覆土は、2 層に分層されるが、共に粒子の細かい土である。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器類が少量出土している。

SE37（遺構Ⅱ－ 2 図）

調査区中央 Ei213 区から確認された素掘りの井戸である。やや東西径が大きい楕円を呈している。井戸側は確認できなかった。井戸の南東壁面のみに抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 190cm までの間に 3 基確認された。

規模は、長径 90cm、短径 70cm、深さは調査を行った確認面より 190cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、南東面のみにおおむね間口 20cm、高さ 10cm、奥行き 15cm で、約 60cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまでで 3 層に分層されるが、粒子の細かい土である。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器が少量出土している。

SE41（遺構Ⅱ－ 4 図）

調査区北西 Ef213 区から確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の南北壁面には、相対して高さを変えて抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 180cm までの間に合計 8 基確認された。

規模は、径約 80cm、深さは調査を行った確認面より 180cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 15 ～ 20cm、高さ 10cm、奥行き 15cm で、約 50cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまでで、粒子の細かい黒褐色土であった。

遺物は、出土していない。

SE42（遺構Ⅱ－４図）

調査区中央西側 Ef215 区から確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の東西壁面には、相対してやや高さを変えて抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 210cm までの間に合計９基確認された。

規模は、径約 80cm、深さは調査を行った確認面より 210cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 15cm、高さ 10cm、奥行き 15cm で、40 ～ 50cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまでは、粒子の細かい黒褐色土であった。

遺物は、出土していない。

SE48（遺構Ⅱ－４図）

調査区中央 Eh216 ～ Ei216 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の東西壁面には、相対してやや高さを変えて抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 220cm までの間に合計９基確認された。

規模は、径約 80cm、深さは調査を行った確認面より 220cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。確認面から 150cm 程度の位置でやや膨らみ、1m 程の径になっている。足掛け状施設は、おおむね間口 15 ～ 20cm、高さ 15cm、奥行き 15cm で、40 ～ 50cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまでで、粒子の細かい黒褐色土であった。

遺物は、混入が認められたが、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品が出土している。

SK49（遺構Ⅱ－５図、遺物Ⅱ－15 図）

調査区東側 Ej216 区で確認されたほぼ円形の土坑である。規模は東西約 110cm、南北 100cm、確認面からの深さは最大 30cm を計測する。坑底は鍋底状を呈し、壁は開きながら立ち上がっている。覆土はしまりのある黒褐色土覆土単層である。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器が少量出土している。

SU51（遺構Ⅱ－６図、遺物Ⅱ－15 図）

調査区南側中央 Ei217 区で確認された方形の土坑である。遺構の東南側で SU98 と重複し、SU51 が新である。平面形は方形を呈し、壁際には方形の小ピットが巡っている。小ピットは隔壁に４基ずつ、合計 12 基確認された。中央やや東には深さ 20cm の不整形の落ち込みが１基確認されたが、昇降施設の固定穴の可能性がある。

規模は、一辺 250cm、確認面から坑底までの深さは最大 80cm であった。壁を巡るピットは全て方形を呈しており、隅に位置するものがやや大きく一辺 30cm 程度で、その中間のピットは 20cm 程度であった。各ピットには、一辺 10cm 強の方形の柱痕が明瞭に観察された。坑底は平滑にされるが、壁はやや凹凸が確認される。壁面には板材などが巡っていた可能性が高い。

遺物は、17 世紀中葉と 18 世紀中葉の陶磁器・土器類、瓦などがコンテナ箱にして１箱程度出土している。

SK58（遺構Ⅱ－５図、遺物Ⅱ－15 図）

調査区南西側 Ef217 ～ Eg217 区で確認された円形の土坑である。遺構の南西側で SK57 と切り合っており、新旧は本遺構が旧である。遺構の壁、坑底の凹凸は顕著で、調査の際、北半の坑底のローム土が撹拌されていたことによってやや掘りすぎてしまったが、南半が本来の状況である。坑底はドーナツ状に窪んでいた。

規模は、東西約 200cm、南北 210cm、確認面からの深さは最大 35cm を計測する。坑底は凹凸が顕著で、壁はほぼ垂直に上がっている。覆土はしまりのある暗褐色土単層である。遺構の形態、覆土の状況から、本遺構は植木の移植穴と推定される。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器が出土している。

SK59（遺構Ⅱ－５図、遺物Ⅱ－16 図）

調査区南西側 Ef218 区で確認された不整形の土坑である。遺構の西側は調査区外で、全体の様子は窺えない。坑底は段を有し、南側が一段下がっている。この下がっている平鍋状の坑底は、被熱のため硬化していた。

遺存している規模は、東西約 150cm、南北 180cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。坑底はやや平滑で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、しまりの弱い暗茶褐色土と黒褐色土２層に分層される。遺構の性格は不明である。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器が出土している。

SK66（遺構Ⅱ－６図、遺物Ⅱ－16 図）

調査区南西側 Ef218 区で確認された不整長方形の土坑である。坑底は西側で段を有し、東側が一段下がっている。下がっている坑底の一部は、被熱のため硬化していた。

遺存している規模は、東西 100cm、南北 80cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。坑底はやや平滑

で、壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は、暗茶褐色土と暗褐色土２層に分層される。遺構の性格は不明である。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器などが少量出土している。

SE67（遺構Ⅱ－６図、遺物Ⅱ－ 17 ～ 19 図）

調査区南西側 Ef218、Eg218 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の東西壁面には、相対してほぼ同じ高さで壁を抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 190cm までの間に合計 10 基確認された。

規模は、径約 110cm、深さは調査を行った確認面より 190cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 15 ～ 20cm、高さ 10cm、奥行き 15cm で、約 40cm のピッチで穿たれている。足掛けが作られた東壁側は、壁面の一部が崩落していた。覆土は、調査した深さまでは、粒子の細かい褐色土であった。

遺物は、足掛けを有する他の井戸と比べると多く出土している。17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦（金箔瓦を含む）、金属製品、石製品がコンテナ箱に５箱程度出土している。

SE70（遺構Ⅱ－７図、遺物Ⅱ－ 19、20 図）

調査区中央 Ef219 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の東西壁面には、相対してほぼ同じ高さで抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 160cm までの間に合計７基確認された。

規模は、径約 80cm、深さは調査を行った確認面より 160cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。確認面から 1m 程度の位置でやや膨らみ、1m 程の径になっている。足掛け状施設は、おおむね間口 15 ～ 20cm、高さ 10cm、奥行き 20cm で、30 ～ 40cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまで、粒子の細かい黒褐色土であった。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品がコンテナ箱で１箱出土している。

SK76（遺構Ⅱ－７図、遺物Ⅱ－ 20 図）

調査区南側 Eg219、Eg220、Eh219、Eh220 区で確認された円形の土坑である。遺構の北側を近代のレンガ基礎に切られている。南側で SK86 と重複しており、新旧は本遺構が新である。

遺存している規模は、東西 250cm、南北 240cm、確認面からの深さは最大 40cm を計測する。遺構の壁、坑底の凹凸は顕著で、坑底中央と西側はやや高くなっている。壁は坑底からほぼ垂直に上がっている。覆土はロームブロックなどを多量に含む褐色土単層である。遺構の形態、覆土の状況から、本遺構は植木の移植穴と推定される。

遺物は、二次的被熱が観察される 17 世紀後半の陶磁器が少量出土しており、その一部は医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層出土磁器と類似しており、これらは天和２（1682）年の被災資料と推定される。

SK77（遺構Ⅱ－７図、遺物Ⅱ－ 21、22 図）

調査区西南側 Eg218、Eg219 区から確認された隅丸長方形の土坑である。遺構の上部を近代のレンガ基礎に切られている。

規模は、東西 110cm、南北 350cm、確認面からの深さは最大 70cm を計測する。遺構の壁、坑底はやや凹凸を有し､壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は３層に分層される。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品などがコンテナ箱に２箱程度出土した。

SK78（遺構Ⅱ－７図、遺物Ⅱ－ 22 図）

調査区西南側 Eh219 区から確認された方形の土坑である。遺構の四隅および壁際には打ち込み小ピットが十数基確認され、遺構壁際に板材など巡らせたものと推定できる。

規模は、一辺約 120cm、確認面から坑底までの深さは最大 35cm を計測する。小ピットはいずれも 10cm 未満である。遺構の壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。規模、構造からゴミの仮置き場か？

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、金属製品などが少量出土した。

SD91（遺構Ⅱ－８図、遺物Ⅱ－ 22 図）

調査区東南側 Ej217、Ek217、Ek218 区から確認された幅広の溝状遺構である。遺構の東側上部および遺構を横断するように２箇所溝状の撹乱に切られている。また、遺構の東側を SX100、SU103 に切られ、東側の様子は窺えない。ただし、調査区東壁より約 5m 隔てた薬学部資料館地点からは遺構の続きが確認されていないことから、その間に立ち上がっていると判断される。溝底には小円礫を中心とした砂利が厚い部分で約 20cm の堆積が

認められた。

遺存している規模は、東西 920cm、南北 260cm、確認面から坑底までの深さは最大 50cm を計測する。遺構の壁、溝底はやや凹凸を有し、壁は溝底から開きながら立ち上がっている。覆土は、8 層に分層されるが、砂利層下の溝底はやや硬化していた。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器などがコンテナ箱で 1 箱出土した。

SU92（遺構Ⅱ－ 9 図、遺物Ⅱ－ 23、24 図）

調査区南西側 Ej219、Ej220 区で確認された長方形の地下室である。SU106 と重複し、本遺構が新である。遺構の南北壁際と坑底付近には、大型の釘と板材の痕跡が観察された。これらの釘は土層実測図 4 層と 6 層間から確認されており、遺構内側は箱状に組み立てられた板が巡っていたと判断された。坑底から確認された釘は、列をなしており、坑底の釘は合釘が確認されたことで、鳥越氏の地下室分類「底板＋側板」型 B 類（鳥越 2007）に該当すると考えられる。また、4 層下面には丁寧に並べられた平瓦が 40 枚程度出土している。

規模は、東西 400cm、南北 210cm、確認面から坑底までの深さは最大 80cm であった。入れ子状の箱の規模は東西 370cm、南北 200cm であった。覆土は 7 層に分層されるが、5 ～ 7 層は遺構構築時、1 ～ 4 層は遺構廃棄後の堆積と判断される。

遺物は、17 世紀中～後葉の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品などがコンテナ箱にして 10 箱程度出土している。陶磁器の一部は医学部附属病院入院棟 A 地点 C2 層出土磁器と類似しており、天和 2（1682）年の被災資料と推定される。

SE93（遺構Ⅱ－ 10 図、遺物Ⅱ－ 25 図）

調査区南西 El218 区で確認された円形を呈する井戸である。井戸側、壁面の足掛けは確認できなかった。遺構の東半は調査区外で遺構全体の様子は窺えない。

規模は、径約 200cm、深さは調査を行った確認面より 160cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。井戸の規模、壁面の足掛け施設が認められなかったことより、17 世紀前半の遺物が出土しているものの、年代的に新しい可能性が高い。

遺物は、17 世紀前半と近代の陶磁器、瓦が少々出土している。

SE94（遺構Ⅱ－ 10 図、遺物Ⅱ－ 25 図）

調査区南西 Ej219 区で確認された円形を呈する井戸である。井戸側、壁面の足掛けは確認できなかった。

規模は、径約 150cm、深さは調査を行った確認面より 120cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。本井戸は、その位置から「御上屋敷御殿閣図」（前田育徳会所蔵）に描かれた奥御殿の井戸と合致する（Ⅳ考察、参照）。

遺物は、17 世紀後半の陶磁器、瓦がコンテナ箱に 2 箱出土しており、上記絵図面との年代的対比から、元禄 16（1703）年の火災による廃棄と推定される。

SU95（遺構Ⅱ－ 10 図、遺物Ⅱ－ 25 図）

調査区南側 Ek219 区で確認された方形あるいは長方形を呈していたと推定される地下室である。遺構の南側は調査区外にある。遺構中央を大きく撹乱され、確認当初に近代以降の撹乱であると誤って判断したことで、重機によって覆土の多くを除去してしまった。壁のやや内側には方形のピットが巡っている。壁際を巡るピットは、北壁で 5 基確認されているが、東、西壁においても遺存しているピットのピッチから 5 基ずつ存在していた可能性が高い。

遺存している規模は、東西 350cm、南北 210cm、確認面から坑底までの深さは最大 210cm であった。壁を巡るピットはおおむね方形を呈しており、一辺 25 ～ 30cm 程度である。坑底、壁はやや凹凸が確認される。ピットと壁面には、若干隙間があり、おそらく壁面に板材などが巡っていたのだろう。

遺物は、17 世紀後半～ 18 世紀中葉の陶磁器、土器、瓦などコンテナ箱 1 に箱出土している。

SU98（遺構Ⅱ－ 6 図、遺物Ⅱ－ 25 図）

調査区南側中央 Ei217 区で確認された方形の土坑である。遺構の北西側を SU51 に大きく切られている。平面形は方形を呈し、壁のやや内側には方形のピットが巡っている。SU51 に切られている北西側は不明であるが、各壁にはやや大きめのピットが 4 基づつ、11 基が確認された。さらに東壁では各ピット間、南壁には中央 2 基のピット間に方形の小ピットが確認された。また、北壁のピットは、壁から 30cm ほど内側に作られていた。

規模は、東西 250cm、南北 280cm、確認面から坑底までの深さは最大 50cm であった。壁を巡るピットは全て方形を呈しており、一辺 25cm 程度であった。各ピットには、一辺 10cm 強の方形あるいは、円形の柱痕が明瞭に観察された。壁間のピットはやや小規模であった。坑底、壁は SU51 と比較すると、やや凹凸が確認される。ピットと壁面には、若干隙間があり、この部分は坑底よ

り 10cm 程度高くなっている。おそらく壁面に板材などが巡っていたのだろう。

遺物は、18 世紀後半の陶磁器・土器類、瓦など少量出土している。

SX100（遺構Ⅱ－ 11 図、遺物Ⅱ－ 25 図）

調査区南東側 Ek217、Ek218、El217、El218 区から確認された石組遺構である。SU103 の上に構築されているが、直接的な関連性はないと思われる。組まれていた石の配置から、南側に階段が付く石組施設と推定されるが、上部を大きく削平され、遺構全体の様子は復元できない。坑底は軟質の凝灰岩を幅 40cm 弱、厚さ 10cm 程度の長い板状に加工し、2 列 8 枚と階段の上がり際に小型石を配していた。壁は、坑底で使用された石材よりやや硬質で、幅 25cm、厚さ 15cm に丁寧に加工したものが用いられていた。階段の最下段と推定された南西壁の石は壁と同じ石材が用いられ、長さ 85cm、厚さ 25cm 程度に成形されて積まれていた。遺構の堀方はほとんど確認できず、少なくとも坑底付近では配石の位置と大きく変わらない範囲を掘削したと考えている。遺構の規模は、室部内寸で東西 150cm、南北 110cm、外寸で東西 205cm、南北 165cm、階段を含めた外寸は南北 180cm を計測する。覆土は、焼土、焼瓦を多量に含む橙褐色土で、火災後の瓦礫などを廃棄したものと判断された。

遺物は、桟瓦を含む焼瓦がコンテナ箱で 3 箱程度出土した。

SE101（遺構Ⅱ－ 11 図、遺物Ⅱ－ 26 図）

調査区中央やや南側 Ei217 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の南北壁面には、相対してほぼ同じ高さで抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 180cm までの間に合計 6 基確認された。規模は、径 85cm、深さは調査を行った確認面より 180cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 15 ～ 20cm、高さ 15cm、奥行き 10 ～ 20cm で、約 50cm のピッチで穿たれている。また、最も上とその下の足掛けとの間に、他とは異なる構造の抉り込みが確認されたが、機能は不明である。覆土は、調査した深さまでは、粒子の細かい茶褐色土であった。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦（金箔瓦を含む）、金属製品がコンテナ箱で 1 箱出土している。

SE102（遺構Ⅱ－ 11 図、遺物Ⅱ－ 26、27 図）

調査区南側 Ej219 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の南北壁面には相対して、やや高さを変えて抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 200cm までの間に合計 10 基確認された。規模は、径 90cm、深さは調査を行った確認面より 200cm まで確認できた。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 15cm、高さ 10cm、奥行き 15 ～ 20cm で、35 ～ 40cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さまでで、粒子の細かい茶褐色土であった。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品がコンテナ箱で 1 箱出土している。

SU103（遺構Ⅱ－ 12 図）

調査区南東側 Ek217、Ek218、El217、El218 区で確認された方形の地下室である。遺構の東部が調査区外、上部を SX100 に切られ、遺構全体の様子は復元できない。平面形は、南側に一段上がった張り出しを持つ、方形を呈していたと推定され、坑底は壁のやや内側に方形あるいは長方形のピットが巡っている。壁面際には西壁の状況から推定して、4 基づつピットが配されていたと思われるが、南壁際やや内側に一列のピット群が認められていることから、遺構の拡張を行った可能性がある。さらに南壁では坑底より 30cm 程度上にテラス状の張り出しが設けられ、そのコーナーにはピットが確認されている。規模は、坑底で東西 200cm、南北 210cm、確認面から坑底までの深さは最大 150cm であった。壁を巡るピットは、方形を呈しているものが一辺 20 ～ 30cm、長方形を呈しているものが長辺 30 ～ 50cm、短辺 20 ～ 30cm 程度であった。南側のピットは、一辺 10cm 強の方形あるいは、円形の柱痕が観察された。坑底、壁は、やや凹凸が確認される。ピットと壁面には、若干隙間があり、南側では坑底より 10cm 程度高くなっている。おそらく壁面に板材などが巡っていたのだろう。

遺物は、陶磁器がごく少量出土している。

SE104（遺構Ⅱ－ 12 図、遺物Ⅱ－ 27 図）

調査区南側 Ei219 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の東西壁面には、相対してほぼ同じ高さで抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 150cm までの間に合計 5 基確認された。規模は、径約 50cm、深さは調査を行った確認面より 150cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、おおむね間口 20cm、高さ 10cm、奥行き 15cm で、約 40cm のピッチで穿たれている。覆土は、調査した深さ

までは、粒子の細かい暗茶褐色土であった。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、瓦が少量出土している。

SE105（遺構Ⅱ－ 12 図、遺物Ⅱ－ 27、28 図）

調査区南東側 Ej217 区で確認された円形を呈する素掘りの井戸である。井戸側は確認できなかった。井戸の東西壁面には、相対してほぼ同じ高さで抉り込んだ足掛け状の施設が、調査を行った確認面から 180cm までの間に合計 8 基確認された。

規模は、径約 70cm、深さは調査を行った確認面より 180cm 以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。足掛け状施設は、間口 15 ～ 20cm、高さ 15cm、奥行き 15cm で、40 ～ 40cm のピッチで穿たれている。

遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦（金箔瓦を含む）、金属製品がコンテナ箱で 2 箱出土している。

SU106（遺構Ⅱ－ 13 図、遺物Ⅱ－ 28 図）

調査区南東側 Ek218、Ek219 区で確認された隅丸方形の地下室である。遺構の上部を SU92 に切られている。平面形は、南側が方形でコーナーを有しているが、北側は半円形を呈している。

規模は、坑底で東西 330cm、南北最大 390cm、確認面から坑底までの深さは最大 200cm であった。坑底から天井までの高さは南側で約 100cm、北側で 120cm であった。壁はコーナー付近で工具痕が確認されるなど、やや凹凸が認められるものの、坑底は比較的平滑に調整されている。覆土は、4 層に分層され、2 層、4 層は天井の崩落土であった。遺物は、主に 3 層から出土している。

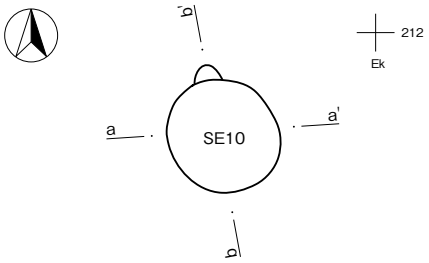
遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品などコンテナ箱で 1 箱出土している。

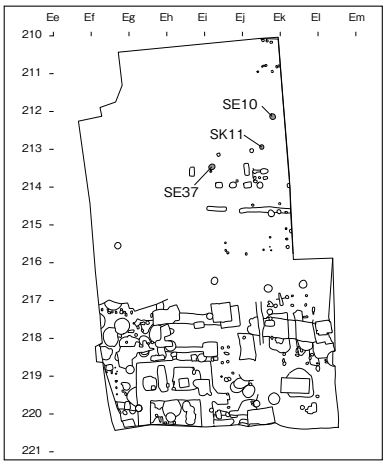
SK107（遺構Ⅱ－ 14 図、遺物Ⅱ－ 28 図）

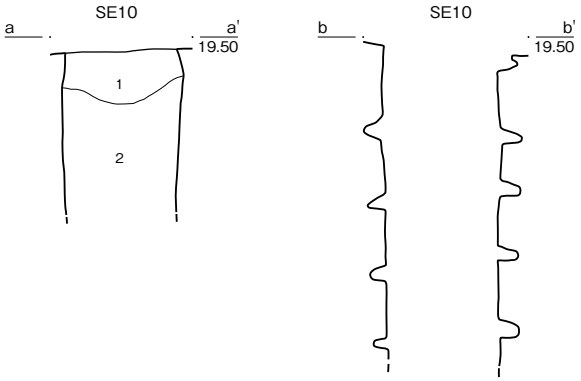
調査区南西側 Eh219、Eh220 区で確認された 3 ～ 4 基の土坑が切り合うような不整形の土坑である。中央に小ピットがあるが、これは本遺構に伴っていない。

遺存している規模は、東西約 120cm、南北 320cm、確認面からの深さは最大 50cm を計測する。溝底はやや凹凸を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺構の性格は不明である。

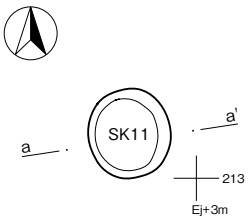
遺物は、17 世紀前半の陶磁器、土器、瓦などがコンテナ箱で 1 箱出土している。

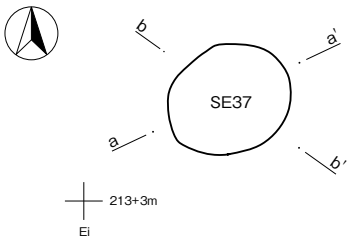


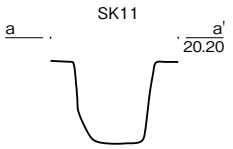


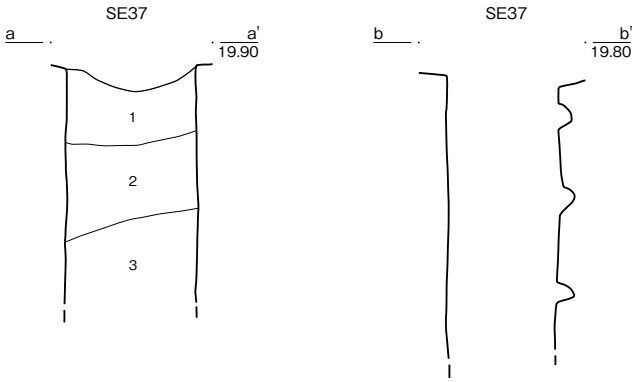


SE10
1　暗褐色土　（ロームブロック･ローム粒少含、粘性･しまりあり）
2　黒褐色土　（ローム粒微含、粘性･しまりややあり）





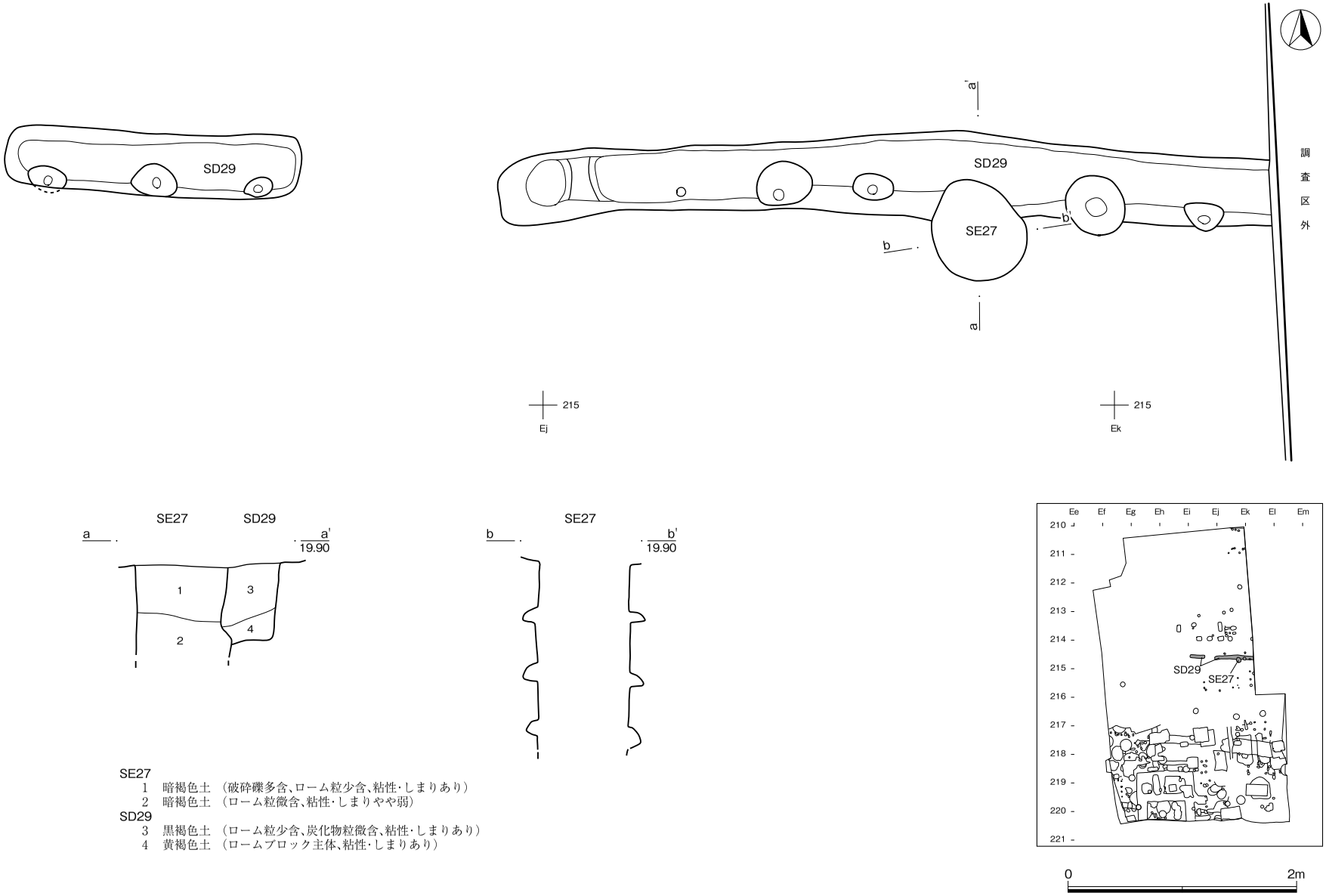




SE37
1　黒褐色土　（ローム粒･ロームブロック含、粘性･しまりややあり）
2　黒褐色土　（ローム粒微含、粘性･しまりややあり）
3　暗茶褐色土　（ローム粒微含、粘性弱、粘性あり、締まりやや弱）

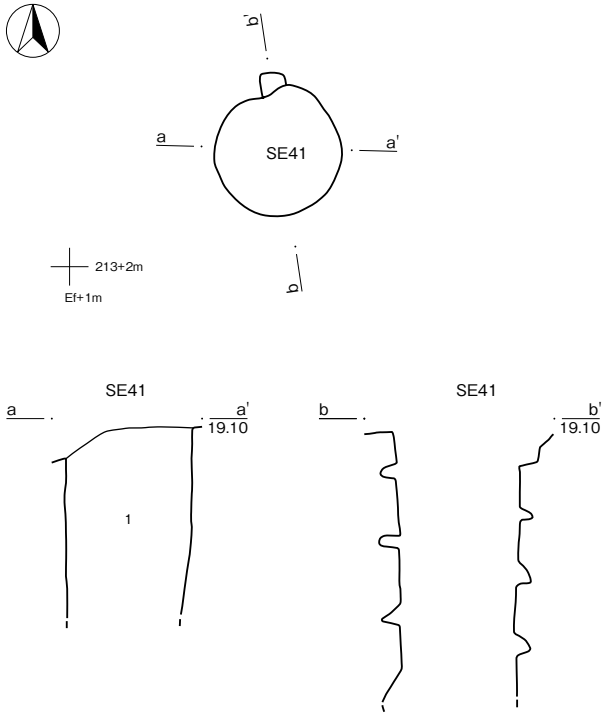
0　2m

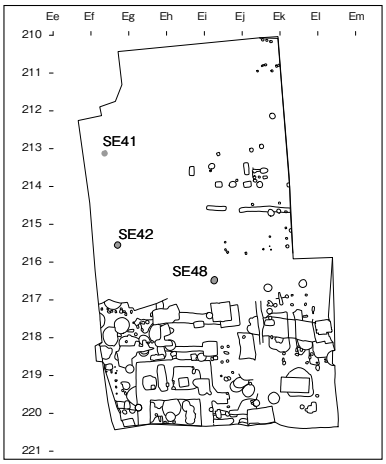
Ⅱ-2図　SE10、SK11、SE37



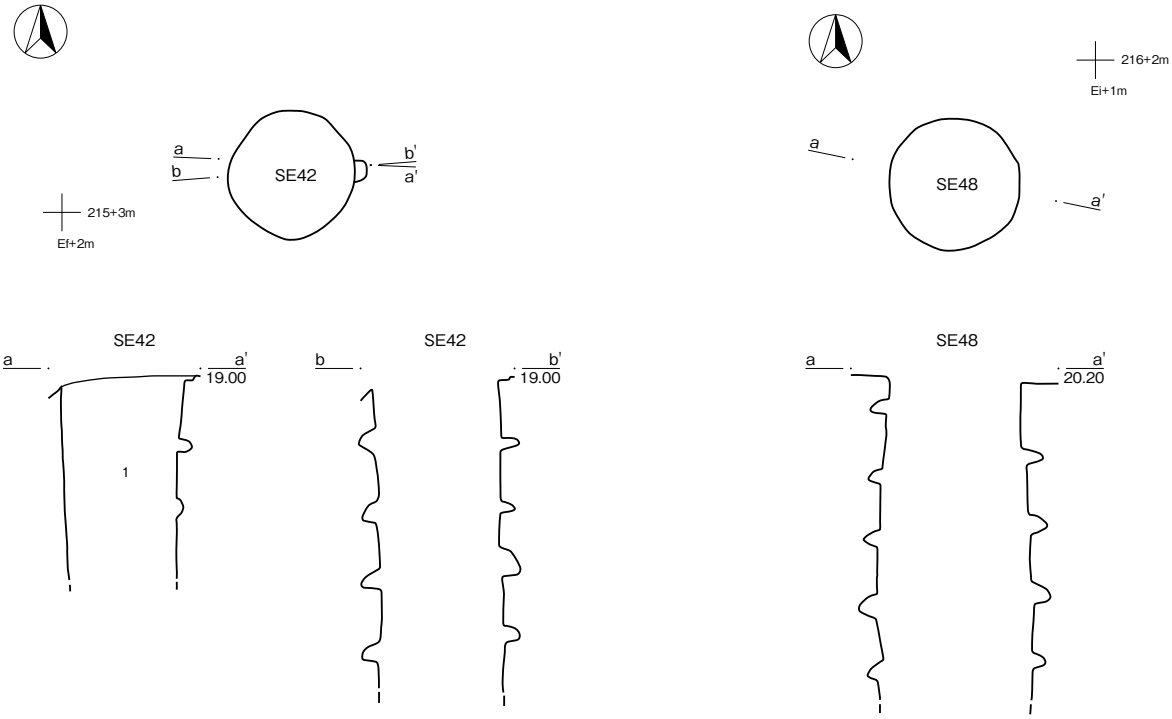
SE27
1　暗褐色土　（破砕礫多含、ローム粒少含、粘性・しまりあり）
2　暗褐色土　（ローム粒微含、粘性・しまりやや弱）
SD29
3　黒褐色土　（ローム粒少含、炭化物粒微含、粘性・しまりあり）
4　黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまりあり）

Ⅱ-3図　SE27、SD29



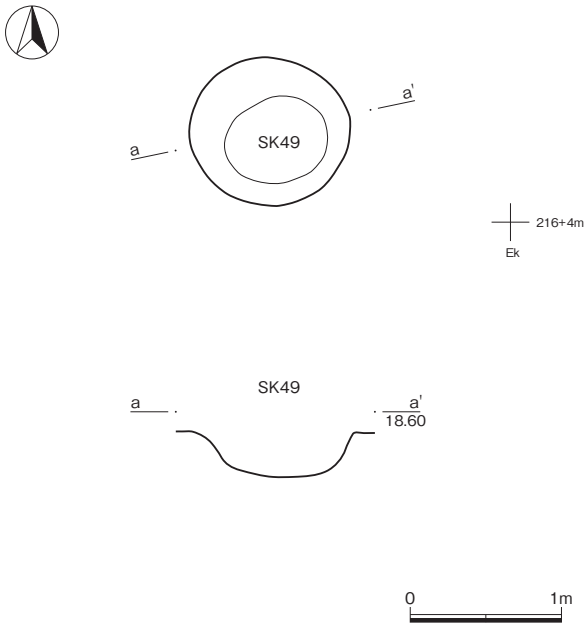


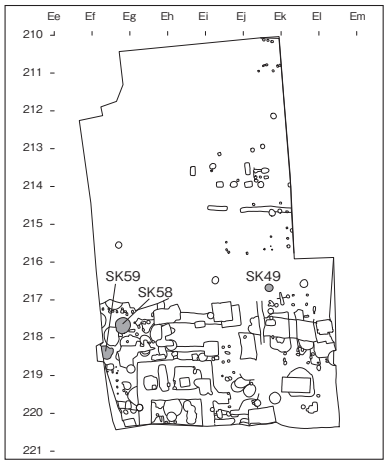
SE41
1　黒褐色土　（ローム粒微含、粘性ややあり、しまりやや強）

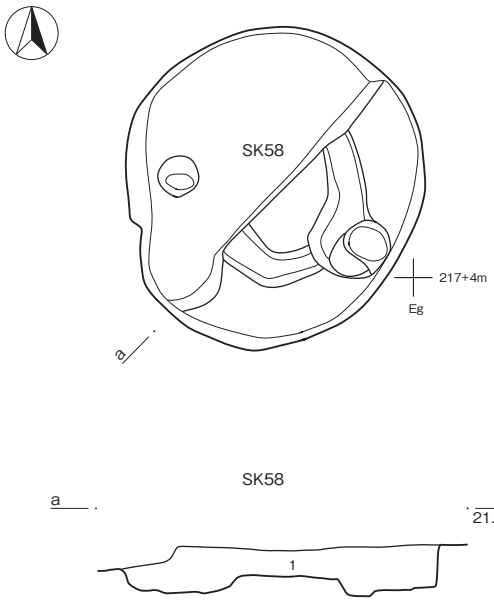


SE42
1　黒褐色土　（ローム粒微含、粘性・しまりややあり）

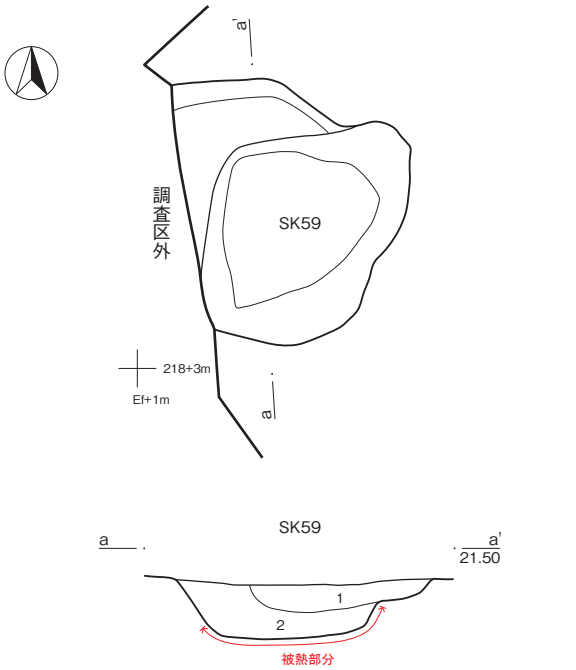
Ⅱ-4図　SE41、SE42、SE48





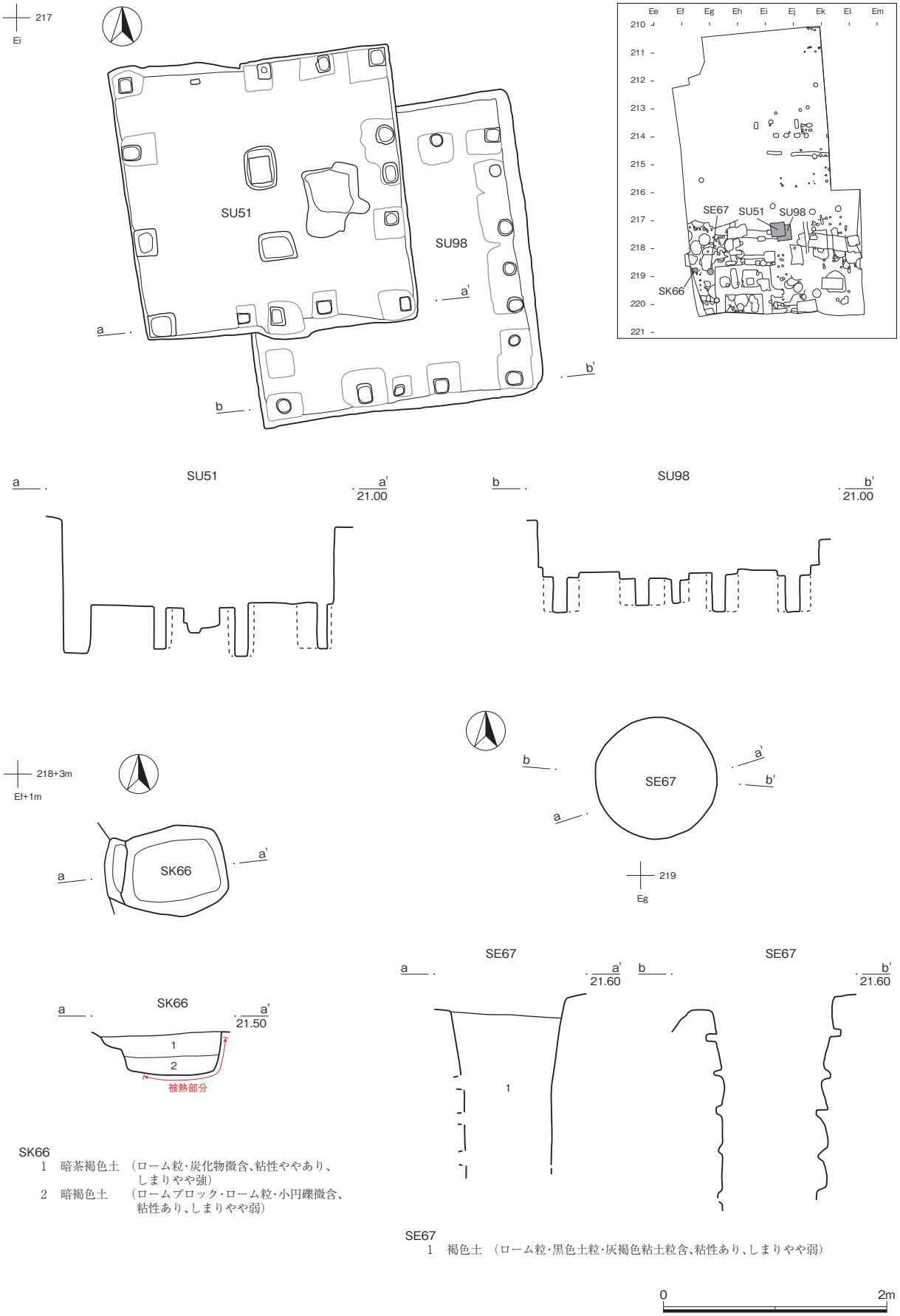


SK58
1　暗褐色土　（ローム粒･黒色土粒多含、しまりあり）



SK59
1　暗茶褐色土　（ローム粒･小礫･瓦片少含、粘性あり、しまり弱）
2　黒褐色土　（小礫･破砕礫少含、粘性あり、しまり弱）

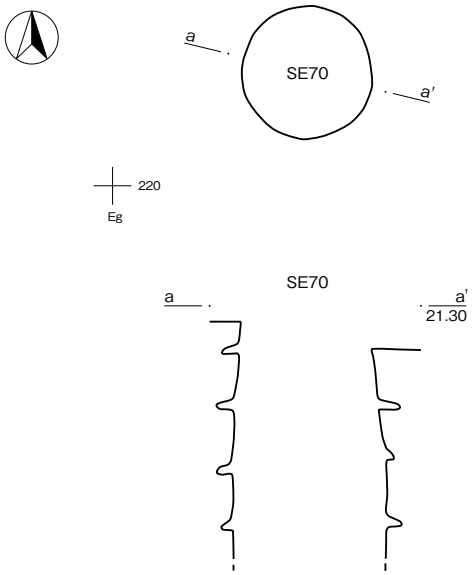
Ⅱ-5図　SK49、SK58、SK59

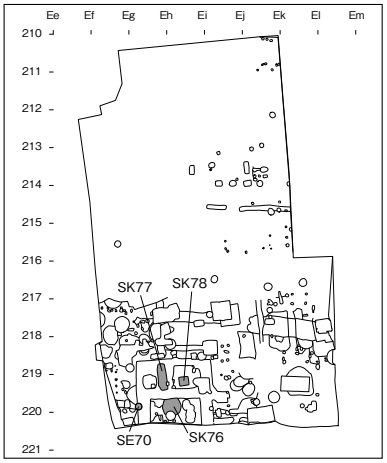


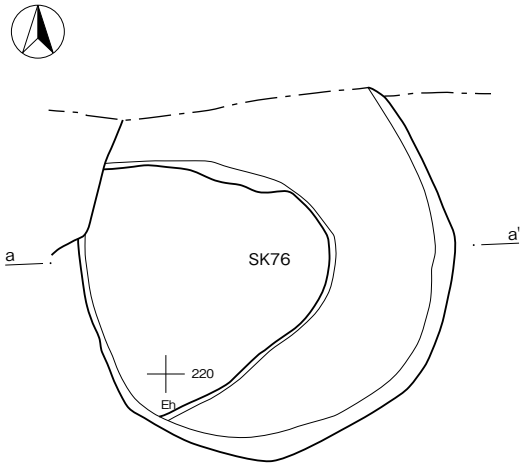
SK66
1　暗茶褐色土　（ローム粒･炭化物微含、粘性ややあり、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ロームブロック･ローム粒･小円礫微含、粘性あり、しまりやや弱）

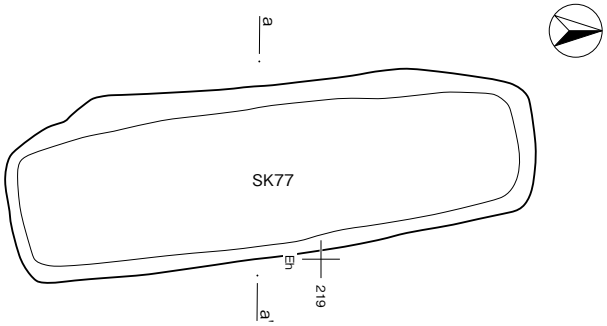
SE67
1　褐色土　（ローム粒･黒色土粒･灰褐色粘土粒含、粘性あり、しまりやや弱）

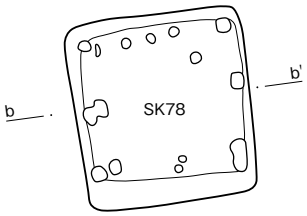
Ⅱ-6図　SU51、SK66、SE67、SU98



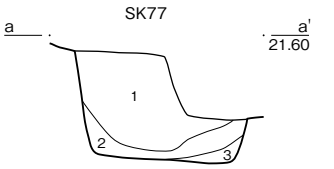




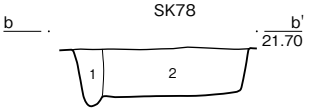




SK76
1　褐色土　（ロームブロック･ローム粒多含、小円礫･黒色土粒微含、粘性･しまりあり）



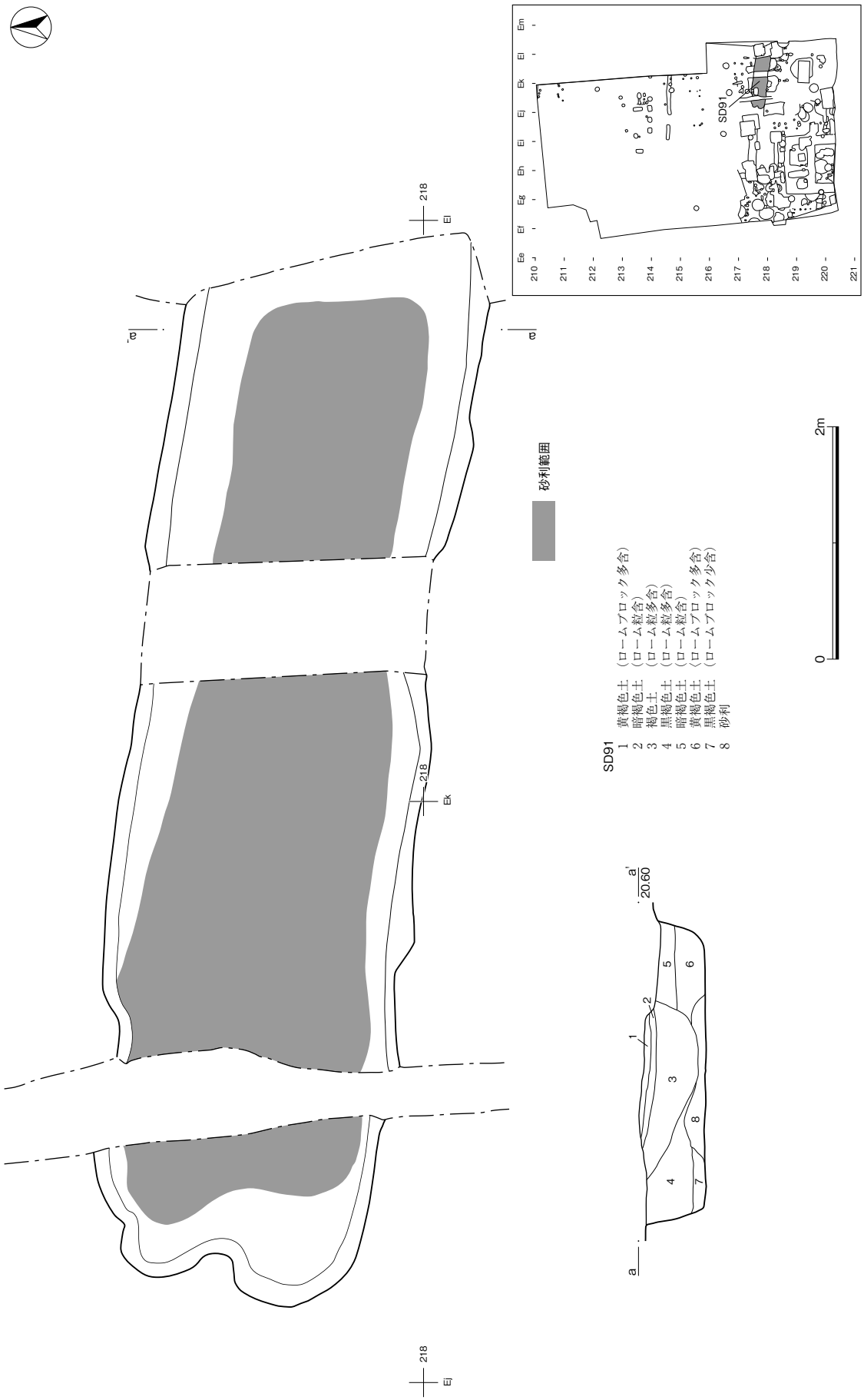
SK77
1　暗灰褐色土　（ローム粒･小円礫少含、粘性･しまりあり）
2　暗褐色土　（ローム粒･炭化物微含、粘性やや強、しまりあり）
3　黒褐色土　（焼土粒･炭化物少含、粘性強、しまりややあり）



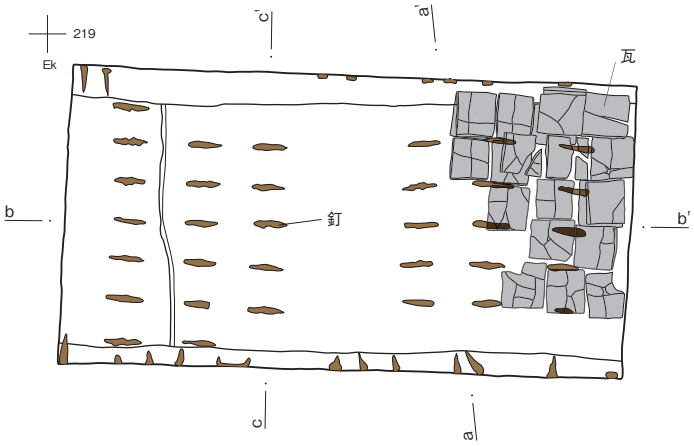
SK78
1　暗灰褐色土　（炭化物微含、粘性強、しまりあり）
2　暗褐色土　（ローム粒微含、粘性･しまりあり）

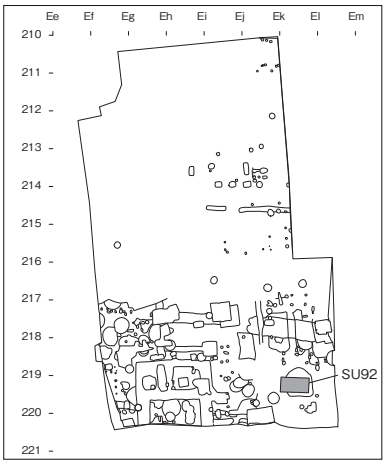
0　2m

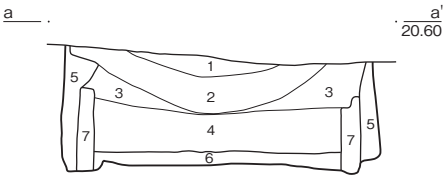
Ⅱ-7図　SE70、SK76、SK77、SK78


Ee
Ef
Eg
Eh
Ei
Ej
Ek
El
Em
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
SD91
218
El
a
a'
218
Ek
218
Ej
砂利範囲
SD91
1　黄褐色土（ローム ブロック多含）
2　暗褐色土（ローム粒合）
3　褐色土（ローム粒多含）
4　黒褐色土（ローム粒多含）
5　暗褐色土（ローム粒合）
6　黄褐色土（ローム ブロック多含）
7　黒褐色土（ローム ブロック少含）
8　砂利
a'
20.60
a
1
2
3
4
5
6
7
8
0
2m

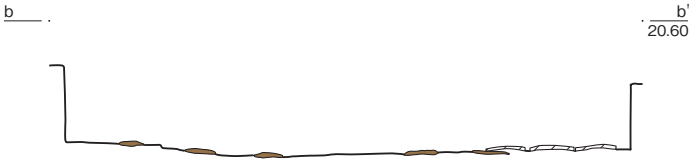
Ⅱ-8図　SD91



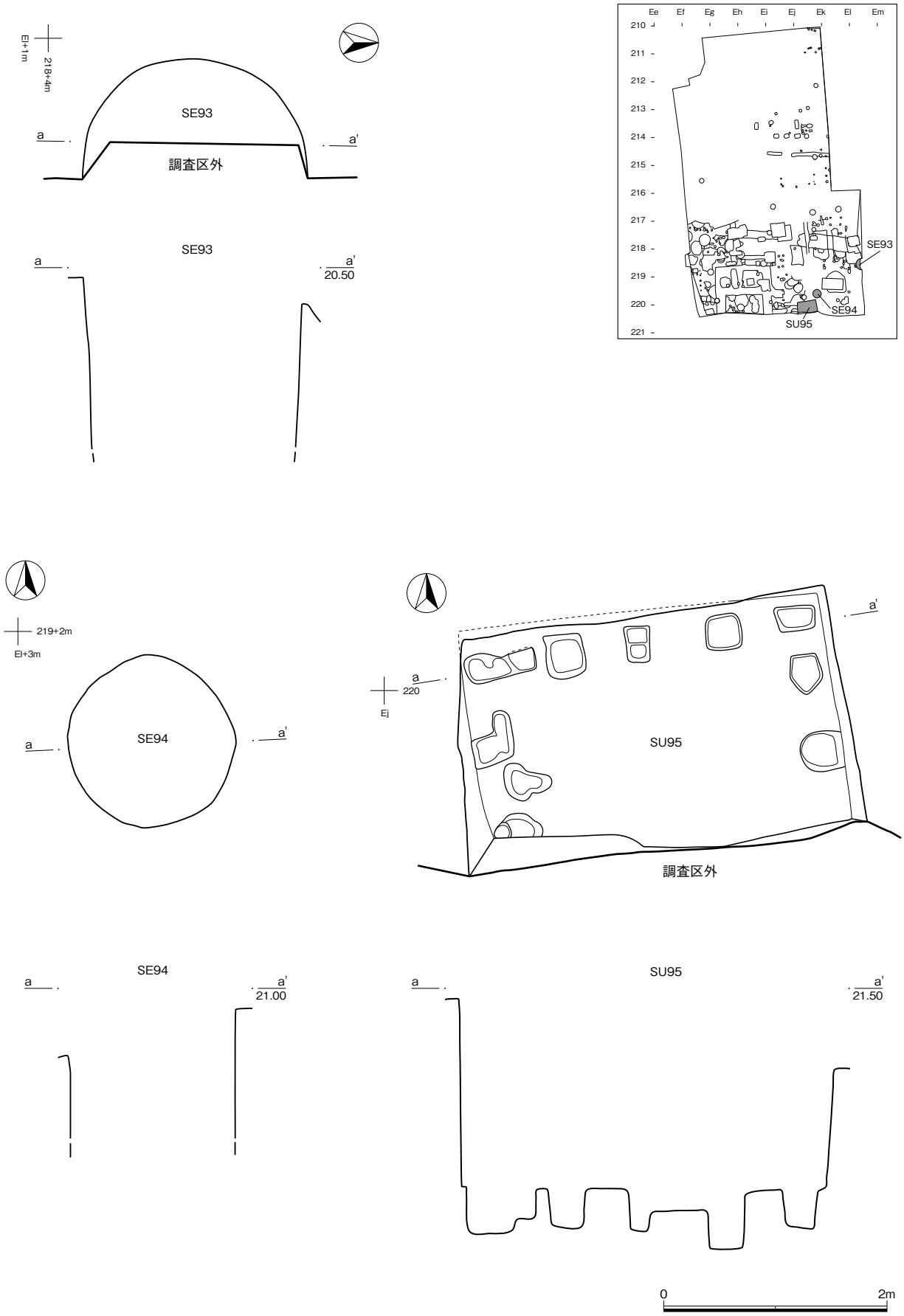




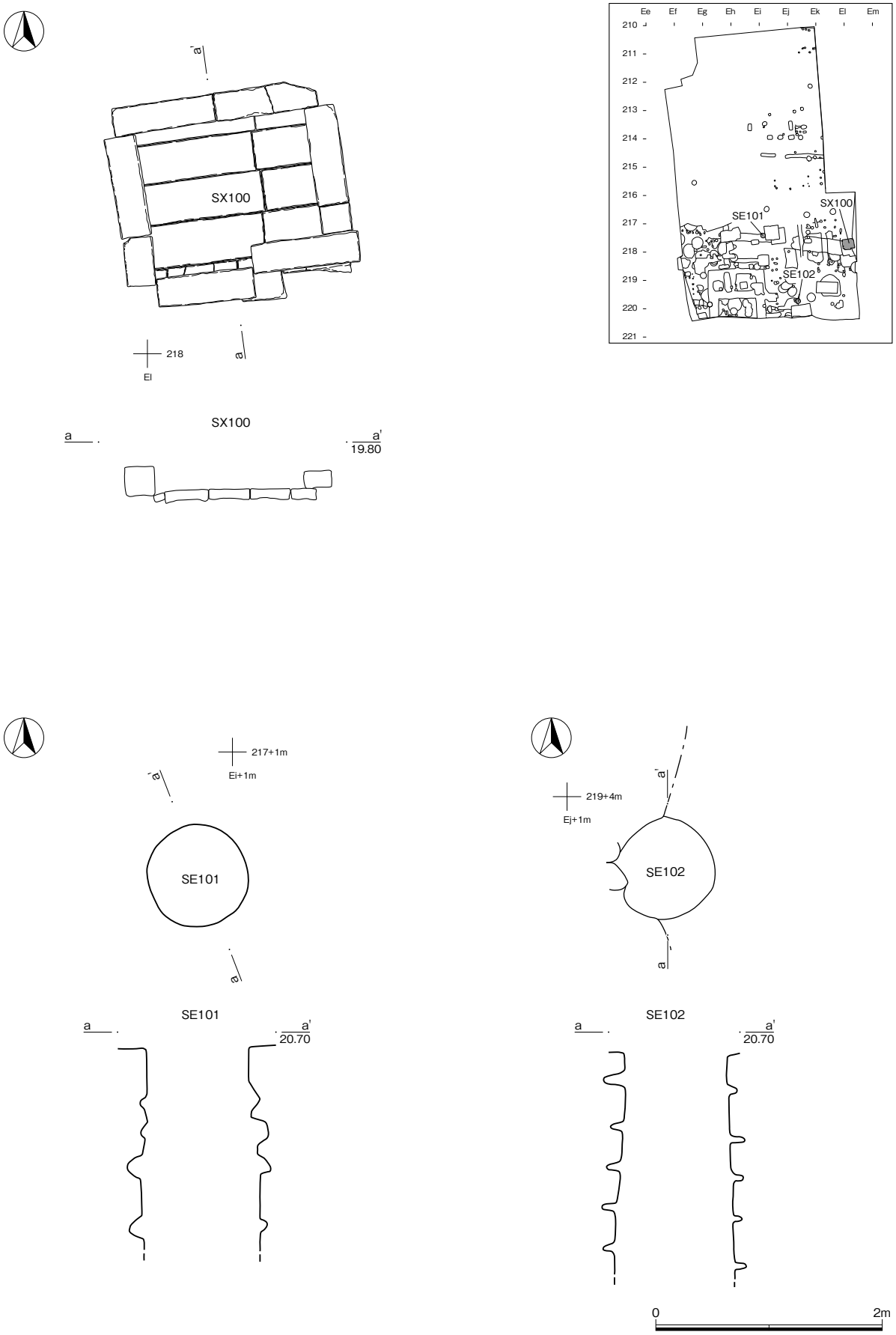
SU92
1　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック含）
2　暗褐色土　（焼土粒･炭化物含）
3　明褐色土　（焼土粒･炭化物多含）
4　黄褐色土　（ロームブロック含）
5　黄褐色土　（ローム粗粒含）
6　明褐色土　（ロームブロック極多含、整地層）
7　褐色土　（腐食物多含）



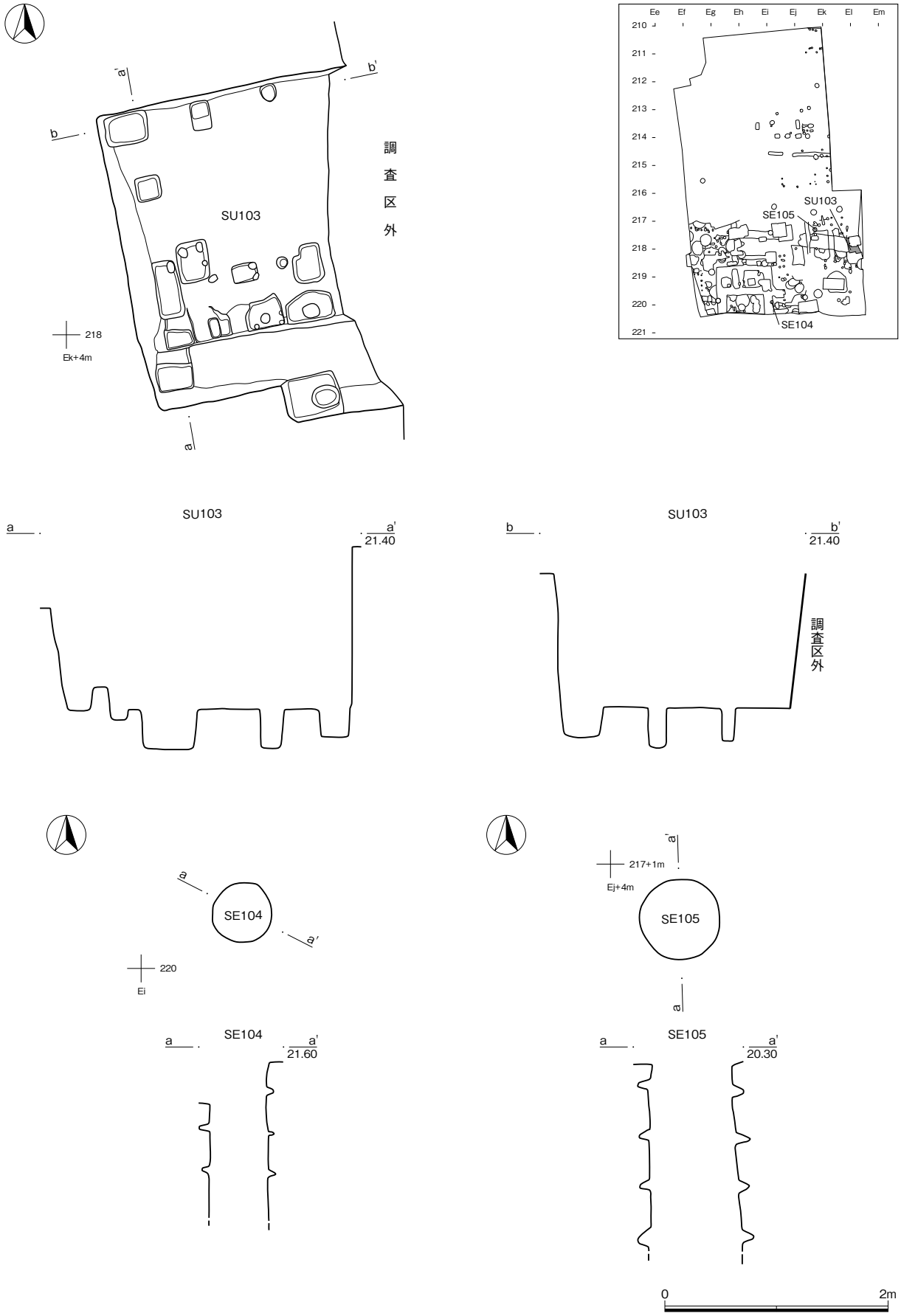
Ⅱ-9図　SU92



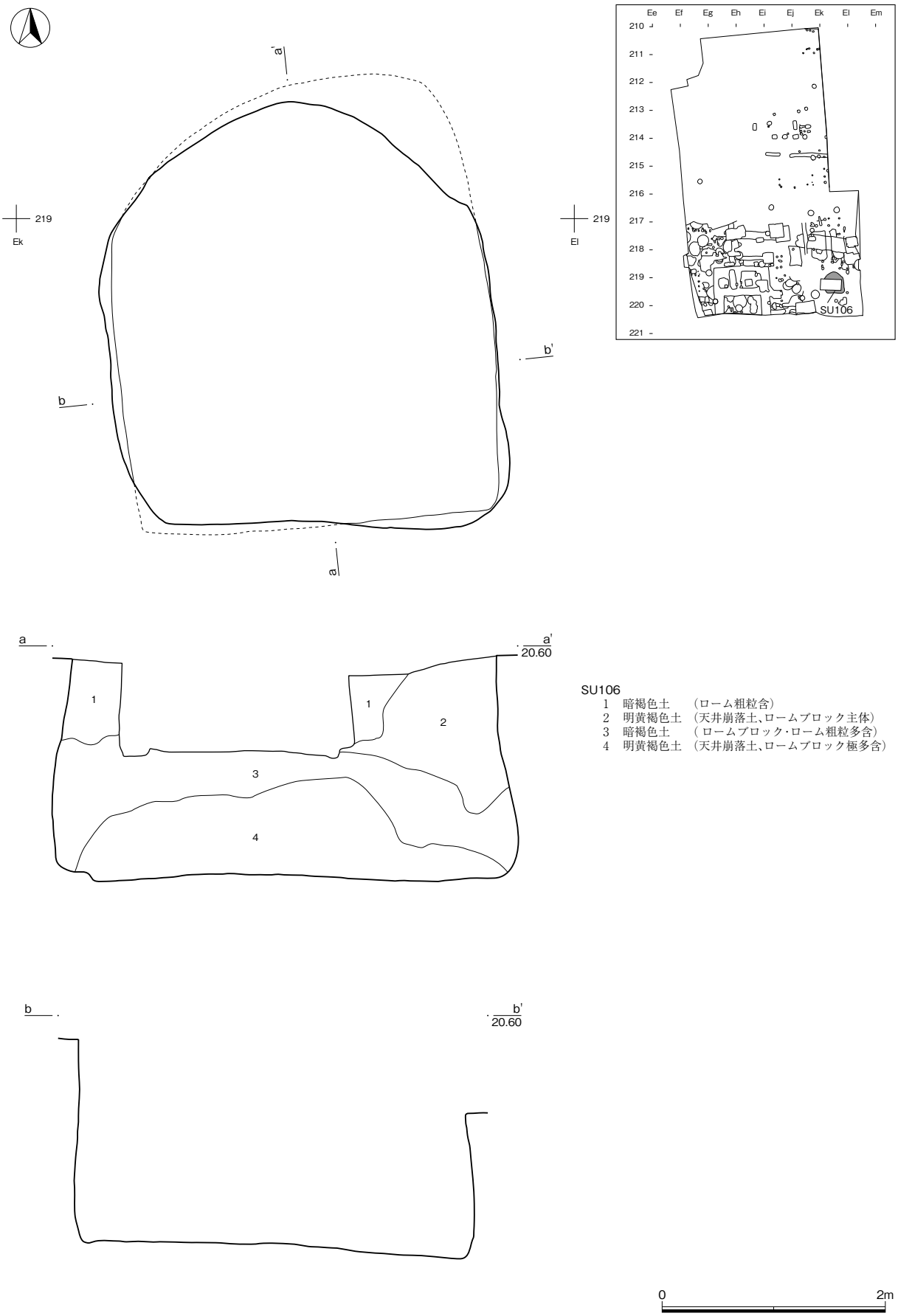
Ⅱ-10図　SE93、SE94、SU95、



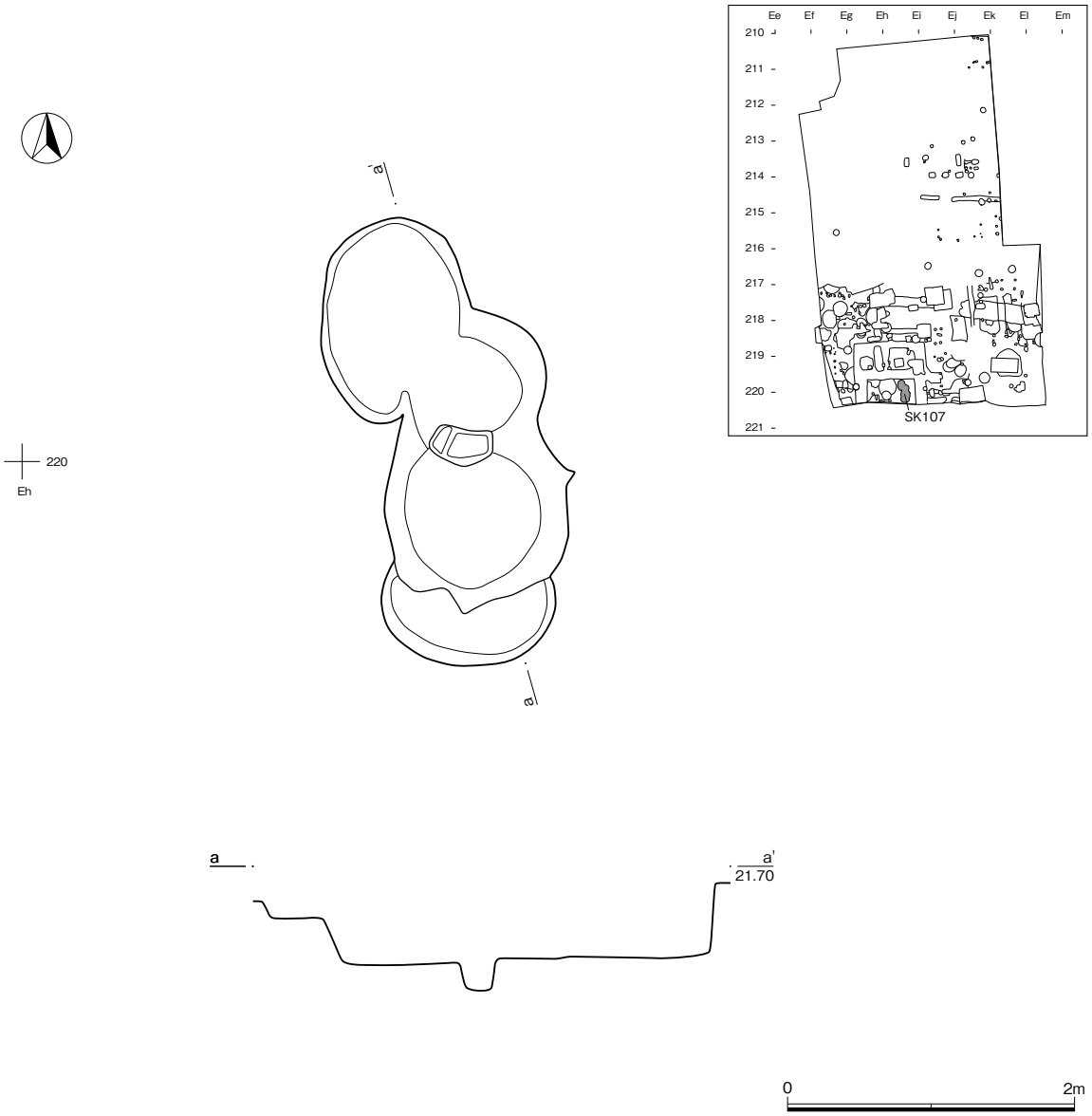
Ⅱ-11図　SX100、SE101、SE102



Ⅱ-12図　SU103、SE104、SE105


a'
219
Ek
219
El
b'
b
a
Ee
Ef
Eg
Eh
Ei
Ej
Ek
El
Em
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
SU106
a
a'
20.60
1
1
2
3
4
SU106
1　暗褐色土　（ローム粗粒含）
2　明黄褐色土　（天井崩落土、ロームブロック主体）
3　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粗粒多含）
4　明黄褐色土　（天井崩落土、ロームブロック極多含）
b
b'
20.60
0
2m

Ⅱ-13図　SU106


Ee
Ef
Eg
Eh
Ei
Ej
Ek
El
Em
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
SK107
a
a'
220
Eh
a
a'
21.70
0
2m

Ⅱ-14図　SK107

第Ⅲ章　遺物

第１節　縄文時代の遺物（Ⅱ－15図）

先述のように、縄文時代の遺構は確認されていない。出土した縄文土器片は、20数点で、主なものを図化した。1は連弧文系土器の深鉢口縁部である。口縁部はやや内傾し、口唇直下に水平に4条の沈線が巡り、同じく4条の平行沈線が浅く山形に描かれており、波状を呈すると考えられる。口縁下沈線と弧状沈線の間、山形の沈線内は沈線より狭い棒状工具により縦位の沈線が密に施文される。胎土色は赤橙色から白橙色で焼成は普通である。2は加曽利Ｅ式の深鉢胴部片である。地紋は浅く明瞭ではないが、疎に右巻き短軸絡条体が施文され、少なくとも3条の縦位の沈線が深く施文される。縦位の条線の処理は粗く、はみ出し部も処理されていない。胎土色は灰褐色から赤橙色で焼成は普通である。

第２節　江戸時代の遺物（Ⅱ－15～29図）

本地点からはコンテナ総数、54箱の遺物（磁器・陶器・土器・瓦・金属・その他）が出土している。その中にはSU92に敷かれていた瓦が7箱が含まれており、全体的な遺物量は少ない。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を基に作成した最新バージョン（分類Ver.4）に準拠している（以降､「東大分類」と略す）（東京大学埋蔵文化財調査室2016）。瓦の分類は加藤氏の分類（加藤1990）に拠っている。遺跡における分類は数量分析により文化・社会・経済・年代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とするが、本地点では推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構が検出されなかったため、個別の遺物から「東京大学構内の遺跡における年代的考察」（堀内1997）、「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（2）」（大成2011）を基に年代推定を行った。

遺物量は少ないが、天和2（1682）年の火災以前の加賀藩邸下屋敷時代の遺構が検出されており、17世紀前半段階の良好な資料が認められた。小林謙一氏は16世紀後葉の南関東のかわらけについて、小地域ごとの小規模土器生産が江戸の周辺地域に展開しており、それらが流入してきたと指摘し、17世紀初頭においてもその流れが認められるとしている（小林1997）。本地点のかわらけも江戸在地のかわらけが定型化（東大分類DZ-2-b）される以前（東大分類DZ-2-a）のかわらけと江戸の周辺地域から流入してきたかわらけによって構成されていると考えている。

SK11（Ⅱ－15図）

1は瀬戸・美濃系灰釉陶器皿でTC-2-aに分類される。小振りで、胎土は灰白色。碁笥底。畳付に目跡が1箇所残る。高台内にも釉が多く残る。東大編年Ⅱ期に多く見られるもので17世紀前半に比定される。

SD29（Ⅱ－15図）

1は瀬戸・美濃系陶器小振りの鉄絵皿。TC-2-jに分類される。長石釉。底部高台内に目跡3箇所あり。鉄絵は見込み圏線、周縁部に唐草文。蘭竹文の前段階に多く出土する製品である。全体的に釉が白濁している。外面はヘラ削りによる調整痕が大きく残る。高台断面三角形の削り出し高台である。東大編年Ⅱ期に多く見られるもので17世紀前半に比定される。

SK49（Ⅱ－15図）

1は肥前系染付磁器いわゆる初期伊万里の皿でJB-2-aに分類される。型打成形。口縁端部を折縁状にしている。畳付の釉剥ぎは水平に削っており、砂が付着している。見込み全面に葡萄文様が描かれている。東大編年Ⅱ期に多く見られるもので17世紀前半に比定される。

SU51（Ⅱ－15図）

1、2は陶器である。1は肥前系刷毛目鉢でTB-2-gに分類される。口縁部が外反している鍔状口縁。植物文様を二彩（鉄、緑）で描いている。高台内が深く彫り込まれているが、高台畳付の面取りはされておらず17世紀中葉のものであろう。見込みには砂目積みの痕が残る。高台露胎。2は壺･甕の蓋でTZ-34に分類される。灰釉。ボタン状の摘み。1、3の遺物より後出で、17世紀後半に多くみられる。

3は土器の皿である。底径と口径の差が小さく小振りでやや厚手。胎土は浅黄橙色のかわらけでDZ-2に分類される。赤色粒子、黒色粒子多量混入。やや腰が張り丸みを帯びて立ち上がる。ススの付着は見られない。東上野から北武蔵北部に分布するかわらけの可能性がある。

SK58（Ⅱ－15図）

いずれも東大編年Ⅱ期に多く見られるもので17世紀前半に比定される。

1、2は磁器である。1は肥前系底部無釉の碗でJB-1-bに分類される。外面鉄釉で、釉が流れ、下に溜まっている。内面青磁。胎土に黒色粒子が混じる。高台と体部の境に成形痕が残る。2は中国景徳鎮窯系皿でJA1-2に分類される。五彩の色絵祥端。上絵（青、緑、赤）。中国明末。地文様として輪つなぎ文様が配されている。丸文の中の文様は松か。底部裏は、二重圏線。畳付は数回に分けて削られ丸みを帯びている。高台内側にわずかに砂が付着している。

3、4は瀬戸・美濃系陶器である。3は鉄絵蘭竹文皿。TC-2-jに分類される。長石釉。見込みに二重圏線。底部高台内と見込みに目跡が3箇所ずつある。高台断面三角形の削り出し高台である。口唇部に6箇所二次加工した痕が見られるが用途は不明。4は灰釉丸皿。TC-2-aに分類される。碁笥底。高台内と見込みに目跡が1箇所ずつ残る。器高は低い。

SK59（Ⅱ－16図）

陶器、土器などがコンテナに1箱出土している。総織部皿や橙白色のかわらけが出土しており17世紀前半に比定される。

1～6は瀬戸・美濃系陶器である。いずれも二次焼成を受けている。1は端反皿でTC-2-yに分類される。釉は部分的に白濁している。高台がシャープに削り出されており、畳付に釉が付着している。裏面の露胎部分には全面にススが付着している。2は総織部折縁皿でTC-2-rに分類される。口縁端部は輪花になっている。見込みには沈線が6本巡る。高台は削り出しである。3は大平鉢でTC-3に分類される。灰釉。見込みには円形の釉剥ぎの痕が2箇所残る。口縁部はやや外反している。4は水盤でTC-5に分類される。長石釉。平底。口縁が外反している。見込みには目跡が1箇所残る。5は肥前系刷毛目香炉でTB-9-cに分類される。高台と体部の境に成形時の溝が入る。高台断面は方形。見込みには、灰降りがみられる。刷毛目部分はほぼ欠損している。武雄周辺の窯で焼かれたものか。6は擂鉢でTC-29に分類される。柿釉。擂目は櫛による15条1単位。胎土は白色である。口縁部は外反し、口縁内面に段が見られる。口縁部のみの破片である。

7は土器の皿である。底径と口径の差が小さい橙白色のかわらけで、DZ-2に分類される。ロクロで引いた後、板の上に乗せたのか底部糸切り痕の上に板目が付いた粘土が被さっている。黒色粒子混入。赤色粒子は見られない。厚手。スス付着。

SK66（Ⅱ－16図）

1、2は瀬戸・美濃系陶器。1は灰釉端反皿でTC-2-yに分類される。碁笥底。高台内に目跡あり。2は瓶でTC-10に分類される。肩の下に抉れのある瓶で内面まで釉が掛けられている。用途は不明。

SE67（Ⅱ－17～19図）

本遺構の出土遺物は、東大編年Ⅰｂ期の指標として位置づけられたものである（東京大学埋蔵文化財調査室1997）。出土遺物群の評価は、その後の研究の進展によって「Ⅴ考察」において修正を行った。参照されたい。

1～13は陶器である。1～12は瀬戸･美濃系である。1は長石釉丸碗でTC-1-ajに分類される。腰が張っており、口縁に向かってわずかに内湾気味に立ち上がる。内外面とも貫入が入る。2は鉄釉丸碗でTC-1-agに分類される。高台周辺は露胎である。体部外面無釉部分には横方向のヘラ削りが見られる。3は長石釉皿でTC-2-cに分類される。見込みにピン痕が3箇所残る。欠損面を二次加工して再利用している。高台脇にススが付着している。4､5は鉄絵皿。TC-2-jに分類される。長石釉。鉄絵。4は鉄絵蘭竹文皿。鍔皿。見込みに目跡2箇所あり。高台周辺が露胎である。削り出し高台である。5は見込みに目跡1箇所あり。蘭竹文よりの前段階からの様相を持つ。6、7は総織部の折縁皿でTC-2-rに分類される。沈線が6本巡る。見込みにピン痕が3箇所残る。高台断面は三角形で付け高台と思われる。高台内には指ナデの痕が残る。高台周辺は露胎である。7は欠損面を二次加工して再利用している。二次加工された表面には全面にススが付着しており、灯明皿として使われたのであろう。8は笠原鉢でTC-2-vに分類される。鉄絵緑釉流し。9、10は灰釉端反皿でTC-2-yに分類される。高台周辺は露胎である。9は見込みにはトチン痕が5箇所あり、体部は歪んで波打っている。高台は付け高台で、高台内外に指ナデの痕が残る。10は見込みに目跡2箇所残存。11は志野織部の鉄絵瓶である。TC-10-kに分類される。底部はほとんど段差はないがわずかに中央部分が窪められている。上部欠損面がきれいに二次加工されている。内面に鉄分が付着しており、お歯黒壺として再利用されたものであろう。12は擂鉢でTC-29に分類される。擂目は7条2単位で施され、見込みは櫛目が右方向に捻って施されている。重ね詰みの目跡が底部に2箇所見られる。

二次加工している。13 は丹波系擂鉢で TK-29 に分類される。擂目は 5 条 1 単位で施されている。外面には指頭圧痕が見られる。口縁断面は方形である。

14 ～ 27 は土器である。14 ～ 20 はいわゆる「江戸式」の前段階に当たるかわらけで DZ-2-a に分類される。DZ-2-a には、前段階からの多系統の製品が包括される。14 は底裏糸切り痕は右回転である。器壁はやや内湾しており、見込み中央には凹みがみられる。15 は器壁は外反気味に立ち上がる。見込み立ち上がり際には全周ナデ調整がみられる。底部裏に右回転糸切り痕がある。底部立ち上がり際は、端部調整がみられずやや突出している。16 は器壁はやや外反し立ち上がる。内面立ち上がり際の窪みは見られず、外面底部立ち上がり際の調整もみられない。底裏糸切り痕は、左回転である。17 はやや外反しており、底部立ち上がり際は調整がみられずやや突出している。18 は底裏糸切り痕は端部右回転である。器壁はやや内湾しており、見込みには凹凸がある。19 は器壁はやや内湾気味に立ち上がる。底部立ち上がり際の端部調整はみられない。口縁部全体にススが付着している。20 はいわゆる「江戸式」の要素を多く持っているが、内面立ち上がり際の窪みは見られないため、DZ-2-a に分類した。21 は手ずくねのかわらけで DZ-2-g に分類される。胎土は橙色で白色粒子を含む。見込みには縦方向、見込み立ち上がり際には全周ナデ調整がみられる。外面体部には目立った指頭痕は見られず上部に横方向のナデが施されている。本遺跡では、橙色の手づくねのかわらけはあまり見られない。22 は DZ-2 に分類される。にぶい黄橙色。胎土が粗く赤色粒子と黒色粒子を含む。厚手の小振りの皿。見込みには回転ナデ調整が 1 本、縦方向のナデ調整が 2 本みられ、見込みから口縁に掛けては緩やかな曲線を描く。底裏糸切り痕は右回転で周縁から内側に折り込むように成形されている。口唇部には 3 箇所に灯芯痕がある。底径と口径の差が小さく器壁が厚手ではあるが、見込みにナデ調整が施され、胎土が粗くにぶい黄橙色であるため、DZ-2 に分類した。23 は底部穿孔の皿で DZ-2-i に分類される。底部孔周辺にススが付着している。24 は底径と口径の差が小さい浅黄橙色のかわらけで DZ-2 に分類される。胎土が粗く、赤色粒子と黒色粒子を含む。厚手の小振りの皿。底裏に粗い糸切り痕がみられる。口縁部にススが付着。東上野から北武蔵北部で分布しているかわらけの可能性がある。25、26 は DZ-31-a に分類される。25 は小型で口唇部には敲打痕が見られる。1 脚残存。26 の表面は、ほとんど剥離してしまっているが、磨かれている。27 は塩壺。ロクロ成形で一重角枠内「三なと久左衛門」の刻印あり。DZ-51-t に分類される。内側を上から削り取っており、浅い。内面底部に渦巻き状の痕が残る。底部が非常に厚い。本遺跡では、他に出土例はない。

28 ～ 30 は瓦である。28、29 は軒丸瓦。28 は梅鉢文 B に分類される。筒部欠損。29 は無剣梅鉢文 A に分類される。金箔瓦。金箔は模様部にのみ残存している。30 は金箔瓦である。薄手。

31、32 は金属製のキセル。31 は吸口。32 は雁首。火皿は大きくやや腰の張る碗形である。脂返の湾曲は大きい。火皿の下に補強帯を有する。継ぎ目の蝋付けは上である。

33 は砥石。角は鑿のような工具で成形されている。縦方向にも横方向にも使用した痕がある。

SE70（Ⅱ－ 19、20 図）

いわゆる「江戸式」以前のかわらけが出土しており、17 世紀前半に比定される。

1 は JA-2 に分類される。白磁型皿。口唇部は外反し薄くなっている。

2 ～ 8 は土器の皿である。2 ～ 5 は胎土が橙色のかわらけで DZ-2-a に分類される。2 ～ 4 は器壁はやや内湾しており底裏に右回転糸切り痕がある。見込みは中心部を除いてややふくらみを持つ。いわゆる「江戸式」かわらけに近いがそれぞれの特徴は明瞭ではない。5 はやや外反しており、底裏に離れ糸切り痕がある。見込みにはロクロ成形による凹凸が残る。いわゆる「江戸式」になる直前の形態である。6 は胎土が橙色のかわらけで器壁はやや外反しており、底裏に右回転糸切り痕がある。見込みには回転の指ナデが 3 本みられ凹凸が残る。器高は低めで、底径は大きい。DZ-2 に分類される。7 は底径と口径の差が小さく。DZ-2-k に分類される。やや外反しており、底部裏に右回転糸切り痕がある。見込みには凹凸がある。胎土は橙色。赤色粒子、黒色粒子が混入。8 は底径と口径の差が小さく、胎土が浅黄橙色のかわらけで DZ-2 に分類される。器壁はやや内湾しており、胎土が粗く、赤色粒子と黒色粒子を含む。厚手、小振り。底部裏に粗い目の糸切り痕がみられる。東上野から北武蔵北部に分布するかわらけの可能性がある。

SK76（Ⅱ－ 20 図）

1 は肥前系磁器で高台断面の形状がシャープな「U」字状で JB-2-d に分類される。南川原窯ノ辻窯の製品を指標とする。二次焼成によって釉薬が飛んで、一部分を残してほとんど見られない。欠損面の胎土もガラス質に変質してしまっている。黄色と緑色がわずかに残存して

おり、色絵皿であったと思われる。

SK77（Ⅱ－21～23図）

古い段階の笠原鉢などが出土しており、17世紀前半に比定される。陶磁器、土器、金属製品、石製品がコンテナに3箱出土しており、本地点遺構からの遺物量としては多い。

1は肥前系磁器碗でJB-1に分類される。外面下半鉄釉。胎土はやや粗で、色調もやや茶色みがかっている。

2～7は陶器である。2、3は同一個体と思われる。肥前系と考えられ、TB-1に分類される。灰釉碗で体部は「ハ」の字状に大きく開く。内外面共に貫入が入る。畳付には砂が付着している。高台内に釉の縮れが見られる。4～7は瀬戸・美濃系である。4は碗の底部でTC-1に分類される。長石釉。底部無釉。二次利用のため体部は打ち欠かれ底部のみが残存している。5はヒダ状に型打ち成形している皿でTC-2-nに分類される。長石釉。内外面に貫入が入る。腰が張って、口縁部は外反している。底部、見込みは欠損。6は鉄絵大皿・大平鉢でTC-3-aに分類される。笠原鉢。内面全面に鉄絵の文様。花の雌しべ、雄しべまで細かく描かれている。文様はしだいに簡略化されるため古い様相が窺える。体部は高台からやや丸みを帯び、立ちあがっている。口縁部欠損。7は徳利でTC-10に分類される。鉄釉に灰釉が流し掛けられている。体部外面のロクロ目はやや強い。底部中央は、浅く削って高台を作り出し、釉は拭き取られている。肩は張っている。肩部より上は欠損している。

8～13は土器である。8～11は皿でやや外反しており、底裏に右回転糸切り痕がある。見込みには凹凸がある。DZ-2-aに分類される。胎土は橙色。8は内外面スス付着。9は内面立ち上がり際にわずかに腰折れ状痕が見られいわゆる「江戸式」の特徴をやや持っているが、顕著ではないので前段階とし、DZ-2-aに分類する。12は手ずくねでDZ-2-gに分類される。胎土はにぶい黄橙色。口唇部は「く」の字に立ち上げている。内面には横方向のナデ調整痕が残る。外面には指頭圧痕がみられる。内外面スス付着。13は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。小振りである。脚部1脚残存。口唇部内側に敲打痕あり。灰落しとして使用されたものか。

14～16は瓦である。14、15は軒丸瓦。14は花弁断面の稜が無く丸みのある無剣梅鉢Cに分類される。15は花弁断面の稜が不明瞭でなだらかな台形状をしている梅鉢Bに分類される。16は軒桟瓦で中心飾りは下ぶくれ状の中央、Y字状の脇、「へ」の字状の萼で構成される。8類に分類される。17は瓦を二次加工して作られた円盤状製品。加工面は、擦痕が観察される。

18は渡来銭。「元豊通寶」北宋銭。初鋳年は1078年。行書。直径25mm、内径19mm、穴径6.0mm、厚さ1.0mm、重さ3.4g。裏面は摩滅により平らになっている。径も大きく重さもあるので、本銭である可能性が高い。

19は金属製品。性格不明。断面形は丸く、端部は尖っている。

20は砥石。欠損。4面使用。鑿痕などの工具痕は残っていない。斜めにすり減っており、持ち砥として使われたのであろうか。

SK78（Ⅱ－22図）

1は肥前系磁器染付大皿・大平鉢で、JB-3-aに分類される。高台は丸く丁寧に釉剥ぎされている。釉剥ぎ部分にはわずかに砂粒が見られる。高台径は小さい。いわゆる初期伊万里。

2は鉛玉。径1.3cm。重さ11g 。径の大きさから火縄銃の弾であろう。

SD91（Ⅱ－22図）

志野織部皿やいわゆる「江戸式」以前のかわらけが出土しており、17世紀前半に比定される。

1は瀬戸・美濃系陶器志野織部皿でTC-2-sに分類される。長石釉、内面に鉄で菊花文が描かれている。口縁部、緑釉流し掛け。

2～4は土器の皿である。2、3は口縁が外反しており、見込みに凹凸が見られるかわらけでDZ-2-aに分類される。2の胎土は橙色で、口縁部全体にススが付着している。3は底部裏に右回転糸切り痕があり、全体にススが付着している。4は底部穿孔の皿で、DZ-2-iに分類される。 底径と口径の差が小さい。胎土は粗く、浅黄橙色。赤色粒子、黒色粒子混入。底裏に左回転で粗い糸切り痕がみられる。東上野から北武蔵北部にかけて分布している土器か。

SU92（Ⅱ－23、24図）

丹波系陶器擂鉢の形態や天和2（1682）年の火災によって被熱した磁器と類似している製品の出土から遺物は、17世紀後半に比定される。壁と床が板敷きと思われる地下室である。多くの頭巻きの鉄釘や合釘が確認できた。鉄釘は全体で116本確認できた。

1～5は磁器である。1は底部無釉の肥前系磁器青磁碗でJB-1-bに分類される。見込みが一段窪んでいる。胎土は粗いが粒子は細かい。内面には灰降りが見られる。2は中国景徳鎮窯系皿でJA1-2に分類される。畳付は斜

めに削られ、砂が付着している。高台裏にはカンナ痕が見られる。被熱しており釉の表面にざらつきが見られる。3～5は東京大学構内の遺跡入院棟A地点C2層火災一括資料（天和2（1682）年の火災によって被熱した陶磁器）に類似している（東京大学埋蔵文化財調査室　2016）。肥前系磁器染付皿で3、4は底部欠損のためJB-2に分類する。3は口唇部口銹。口縁部輪花。内面雪輪文。外面花唐草文。4は被熱で釉の光沢が無くなっている。外面唐草文。5は高台断面の形状がシャープな「U」字でJB-2-dに分類される。内面竜田川文。外面山水文。口唇部口銹。

6～7は瀬戸・美濃系陶器である。6は鉄釉天目形碗でTC-1-aに分類される。輪高台。高台内墨書「○」。底部脇にも墨書。体部欠損。7は鉄釉鍔皿でTC-2に分類される。高台無釉。外面には横方向のヘラ削りが見られる。8は丹波系陶器擂鉢でTK-29に分類される。口縁部は断面方形で、17世紀前葉の様相が窺える。石英、長石、雲母などの小石を含む。擂目は6条1単位で施されている。擂目から口縁部に掛けて段があり、口縁部は横方向にナデられている。

9～15は瓦である。地下室の床面に敷かれていたものである。全部で軒平瓦2枚、平瓦27枚が出土した。いずれも被熱し部分的に赤変している。9、10は軒平瓦である。9は中心飾りが中央の点珠に上部がクローバー状になる二葉で構成される。36類に分類される。軒部と反対側の2箇所に同一の刻印が打たれている。10は中心飾りはクローバー状の中央、外反する脇、中央下の点珠で39類に分類される。11～15は平瓦。全長28.5～25.0cm。全幅（狭端）25.0～24.0cm。全幅（広端）27.3～26.0cm。

16、17は鉄製品である。壁材、床材を留めるために釘や鎹が使われており、かなりの数の釘や鎹が原位置で確認された。壁からは頭巻きの鉄釘や合釘が確認できたが、遺存状態が悪く、それぞれの釘の種類は識別できなかった。鉄釘総数は116本であった。南壁は釘が約21本、鎹3本。東壁は釘が約15本、鎹1本。北壁は釘が約31本。16は鎹。南壁出土。残存長は16cm。17は頭巻きの鉄釘。東壁出土。残存長は11.2cm。床面から出土している釘は板と板を繋ぐための両端の尖った合釘と思われ、原位置で確認された。長さは約3寸。東から1列目が5本。2列目が5本。3列目が5本。西から1列目が7本。2列目が6本。3列目が5本。中央部分は空いている。遺存状態が悪く、実測図の作成ができなかった。

18、19は砥石である。18は流紋岩。中砥。3面使用。片端欠損。19は片端欠損。表面、裏面使用。全面に鉄分が付着している。

SE93（Ⅱ－25図）

1、2は瀬戸・美濃系陶器である。1は灰釉香炉でTC-9-aに分類される。脚は獣面が貼り付けられている。1脚のみ残存。口縁部欠損。見込みに墨書。2はらっきょう形水注の蓋でTC-27-aに分類される。

3は軒丸瓦である。巴文と連珠の間に圏線が巡らない連珠三つ巴文Cに分類される。

SE94（Ⅱ－25図）

瓦がコンテナに1箱出土しているが、陶磁器、土器は20片ほどである。

1は軒平または軒桟瓦である。中心飾りは三葉に点珠5つで35類に分類される。

SU95（Ⅱ－25図）

1は丸形七輪の風口でDZ-48-aに分類される。最大幅は14.8cmで大型である。

SU98（Ⅱ－25図）

1は堺系陶器擂鉢でTL-29に分類される。擂目は11条1単位で施されている。

SX100（Ⅱ－25図）

遺物はコンテナに3箱ほど出土しているが、ほとんどが瓦で陶磁器、土器はわずかである。

1、2は熨斗瓦である。1は17類に分類される。中心飾りはへたのない瓢箪形。2は19類に分類される中心飾りは小点を両側から蕚状のもので包んでいる。

SE101（Ⅱ－26図）

陶磁器、土器、金属製品がコンテナに1箱出土している。志野織部皿、小振りな輪禿皿、いわゆる「江戸式」以前のかわらけ、底部が平らなほうろくが出土しており、17世紀前半に比定される。

1は中国龍泉窯系碗でJA4-1に分類される。鎬蓮弁文を持つ青磁碗。蓮弁文はぼやけてはっきりしていない。13世紀頃。

2～4は瀬戸・美濃系陶器である。2は小振りな輪禿皿でTC-2-mに分類される。鉄絵。見込みに蛇の目状に凸帯を作り、無釉。中央印花文。次第に見込みの凸帯はなくなり印花文も押されなくなるため、古い様相が窺える。高台は断面逆三角形の付け高台である。高台内には指ナデの痕が残る。高台周辺は露胎である。3は志野織

部皿で TC-2-s に分類される。長石釉、内面に鉄で菊花文が描かれている。口縁部、透明感のある緑釉。外面は、口縁部の緑釉のみで体部は無釉である。4 は志野織部鍔皿で TC-2 に分類される。緑釉、鉄絵。外面は口縁部以外は無釉。5 は瀬戸･美濃系陶器皿で TC-2 に分類される。

6 ～ 8 は土器である。6 は浅黄橙色のかわらけで DZ-2 に分類される。底部からの立ち上がりは外側に屈曲している。外面口唇部脇に沈線を持つ。胎土はやや粗い。赤色粒子、黒色粒子混入。7 はかわらけで DZ-2-a に分類される。外面立ち上がりは滑らか、内面立ち上がり際を指で押さえている。器高は低めで、底径は大きい。8 は底部が平らなほうろくで DZ-47 に分類される。土師質。体部外面には指頭圧痕が見られ、底部際は削られて丸みを帯びている。底面には板目が見られる。内耳が 1 箇所残存している。内耳は団子状のものを棒状工具でくり抜いて作られている。外面は黒く煤けている。江戸在地系と思われる画一的な製品が出現する以前の東関東系のほうろくであろう。

9 は煙管の雁首。火皿は大きくやや腰の張る碗形である。脂返の湾曲は大きい。継ぎ目の蝋付けは左側である。

SE102（Ⅱ－ 26、27 図）

底部無釉の肥前系磁器碗、瀬戸・美濃系の天目碗や総織部皿が出土しており、17 世紀前半に比定される。

1、2 は磁器である。1 は底部無釉の肥前系碗で、JB-1-b に分類される。青磁。内外面とも口縁部に釉溜まりができている。底部は欠損しているが、無釉の底部であろう。2 は明末～清初の中国景徳鎮窯系の青花芙蓉手皿で JA1-2 に分類される。畳付外周は斜めに削られ、砂が付着している。高台裏にはカンナ痕が見られる。型打は見られず後出のものであろう。

3 ～ 7 は瀬戸・美濃系陶器である。3 は鉄釉天目碗で TC-1-a に分類される。口縁部の立ち上がりは、あまり短くなっていない。輪高台。高台周辺が露胎である。4 は長石釉丸皿で、TC-2-c に分類される。小振り。胎土は灰白色。碁笥底。畳付に目跡が 1 箇所残る。5 は総織部の鍔皿で TC-2-r に分類される。緑釉で沈線が 6 本巡る。高台周辺が露胎である。6 は外面にしのぎを持つ菊皿で TC-2-k に分類される。黄瀬戸緑釉流し。型打ち成形。付高台。高台内には指ナデの痕が残る。見込みに目跡が 3 箇所残る。7 は擂鉢で TC-29 に分類される。口縁部は「く」の字に外反している。櫛目は 13 条 1 単位。

SK104（Ⅱ－ 27 図）

1 は土器で DZ に分類される。瓦質。器種不明。火鉢などの底部か。底部とすれば器壁は 2.8cm と厚くかなり大型である。雷文のような模様の一部が陰刻で見られる。

SE105（Ⅱ－ 27、28 図）

陶磁器、土器、金属製品がコンテナに 2 箱出土している。いわゆる初期伊万里、高台無釉の磁器碗、底部が平らなほうろく、梅鉢文菊瓦などが出土しており、17 世紀前半に比定される。

1 ～ 4 は磁器である。1 ～ 3 は肥前系染付碗である。1 はいわゆる初期伊万里で JB-1-a に分類される。高台畳付を平らに削り出している。畳付には砂が付着している。見込みには焼成時の灰が付着している。かなり歪んで口縁は楕円形を呈している。2 は高台無釉で、JB-1-b に分類される。高台畳付は平らである。見込みには焼成時の灰が付着している。3 は JB-1 に分類される。高台畳付を釉剥ぎしており、わずかに砂が付着している。高台高は低い。焼成不良で全体的に釉が白濁している。やや大振り。SK77 と接合。4 は明末の中国景徳鎮窯系坏。JA1-6 に分類される。口縁部は「く」の字に折れ曲がっている。器壁は薄い。外面草花文。高台は無釉で小さい。畳付は平らに削られている。

5 ～ 10 は陶器である。5 は肥前系皿で TB-2 に分類される。灰釉。高台内まで施釉されている。胎土は灰白色。嬉野の内野山窯か。6 ～ 9 は瀬戸・美濃系である。6 は長石釉の皿で TC-2-c に分類される。見込みに目跡 2 箇所あり。底部無釉。7 は TC-2 に分類される。灰釉鍔皿。目跡 1 箇所あり。底部無釉。8 は鉄釉香炉・火入れで TC-9-b に分類される。敲打痕が口縁部全周に残り、灰落しとしても使われていたことが分かる。脚は摘み脚で 1 個残る。9 は草花文が鉄絵で描かれた織部徳利で TC-10-k に分類される。底部際は斜めに削られている。底部中央は一段削り込まれ、高台状になっている。底部穿孔され、植木鉢などに二次利用されている。10 は丹波系陶器擂鉢で TK-29 に分類される。櫛目は 7 条 1 単位。石英、長石、雲母などの小石を含む。口縁部断面は方形で 17 世紀前葉の様相が窺える。内外面に鉄泥を塗布。

11 ～ 14 は土器である。11 ～ 13 はかわらけ。11 は DZ-2-a に分類される。体部はやや外反している。見込み中央はやや窪み、底裏は糸切りの溝が深く刻まれ粗い。胎土は橙色。12 は DZ-2 に分類される。体部はやや内湾気味に立ち上がる。見込み中央にやや膨らみが見られる。糸切り痕は左回転。胎土はにぶい黄橙色。内面は見込みから体部にかけてはなめらかに立ち上っている。13 は口径と底径の差が小さいかわらけではあるが、器壁は薄く DZ-2-a に分類される。小型。見込み中央は

やや窪んでいる。体部はやや内湾気味に立ち上がる。糸切り痕は右回転。胎土は橙白色。口縁部に灯芯痕あり。14 は底部が平らなほうろくで、DZ-47 に分類される。瓦質。体部外面には指頭圧痕が見られ、底部際は削り調整されて、丸みを帯びている。底面には板目が見られる。内耳は 2 箇所残存しており、団子状のものを棒状工具でくり抜いて作っている。SE101 出土のほうろくは土師質であるが形態は近い。外面は黒く煤けている。江戸在地系と思われる画一的なほうろくが出現する以前の東関東系のほうろくであろう。

15、16 は、瓦である。15 は梅鉢文菊瓦である。梅鉢紋には笵に付いた傷が見られる。同じ箇所に傷の付いた同笵の菊瓦が東京大学本郷構内の遺跡の複数の地点で確認されている。医学部附属病院入院棟 A 地点の D1 層から D4 層の間の遺構や包含層から 7 点、SK3 からも同笵の菊瓦が出土している（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。また、御殿下記念館地点 532 号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）、寛永 14（1637）年の墨書のあるかわらけと共伴している医学部教育研究棟地点 SK4553（東京大学埋蔵文化財調査室 2019）、薬学部資料館地点（本書Ⅲ）から同笵の梅鉢紋菊丸瓦が出土している。金箔が施されていたのであろう。寛永 6（1629）年の御成御殿の瓦と推定されている。16 は軒丸瓦で、花弁の断面の稜線が明瞭な台形の無剣梅鉢文 A に分類される。

17 は銅製釘。長さ 3.6cm。

SU106（Ⅱ－ 28 図）

瀬戸・美濃系陶器長石釉皿や丸底のほうろくが出土しており、17 世紀前半に比定される。

1 は肥前系磁器染付丸形坏で JB-6-a に分類される。高台内に釉、縮れが見られる。畳付に砂粒が付着。器壁は厚手。2 は瀬戸・美濃系陶器長石釉皿で TC-2-c に分類される。見込みに目跡 3 箇所あり。底部無釉。全面に貫入が見られる。

3 はほうろくで、DZ-47 に分類される。土師質。外面体部は指頭圧痕が見られ、底部際はヘラ削りで調整されている。中央部が欠損して形態は不明だが、おそらく緩やかな丸底になるのであろう。内耳が 1 箇所残存しており、団子状のものを棒状工具でくり抜いて作っている。立ち上がりは高く、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部は「コ」の字状になっている。外面は黒く煤けている。胎土は橙色。わずかに雲母が見られる。江戸在地系と思われる画一的なほうろくが出現する以前の東関東系のほうろくであろう。

SK107（Ⅱ－ 28 図）

瀬戸・美濃系陶器長石釉鍔皿、灰釉端反皿が出土しており、17 世紀前半に比定される。

1 ～ 3 は瀬戸・美濃系陶器。1 は長石釉ヒダ皿で TC-2 に分類される。全面に貫入が入る。型打成形。腰が張り、口縁に向かって外反している。高台は高く、付け高台であろう。高台、高台内まで釉が掛けられている。2、3 は灰釉端反皿で TC-2-y に分類される。2 は体部が直線的に開く。全釉。高台内に目跡が 1 箇所残る。3 は腰に丸みを帯びてから外反する。底部無釉。

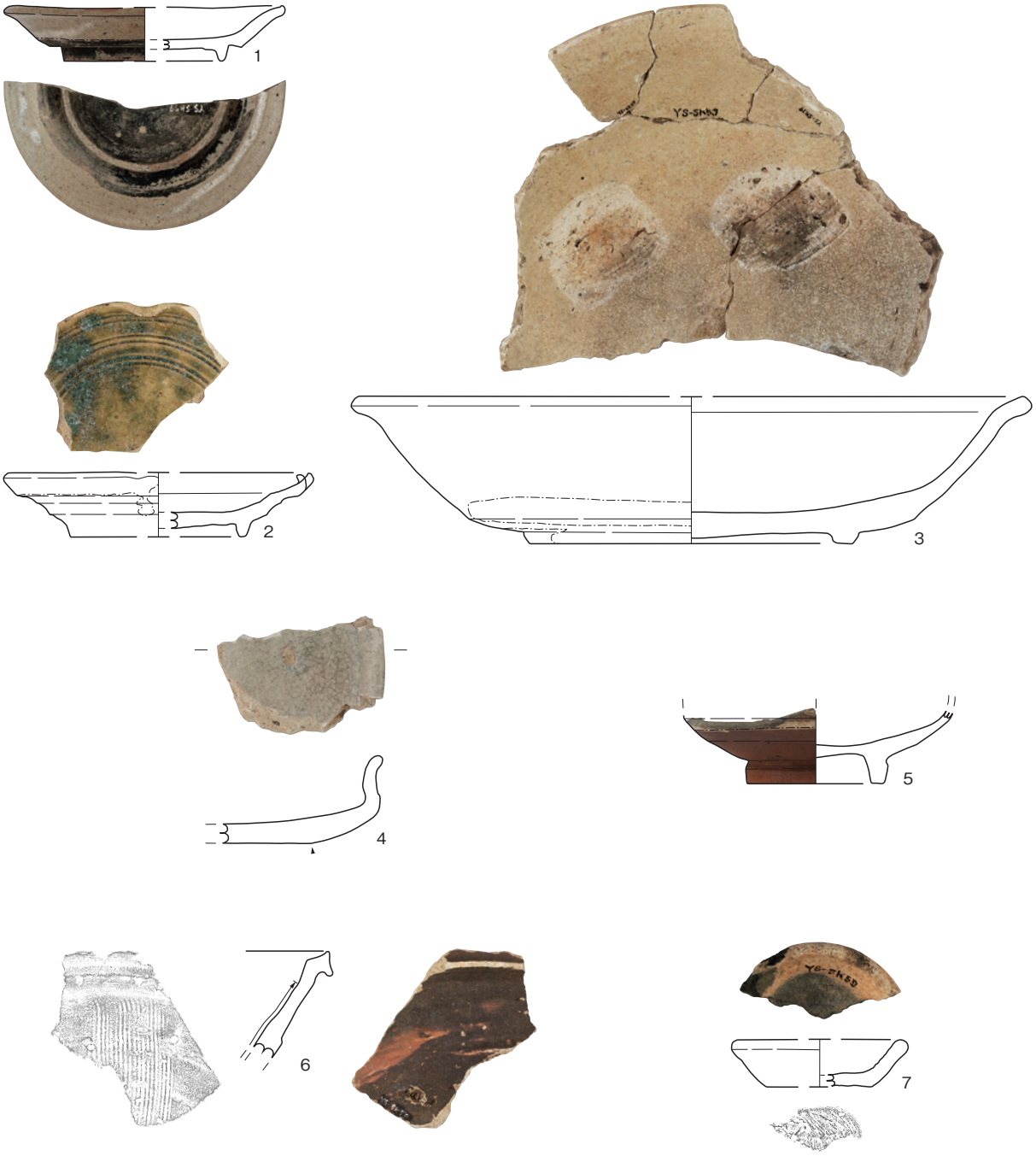
4、5 は土器の皿である。かわらけ。4 は口径と底径の差が小さいかわらけではあるが、器壁はやや薄く DZ-2-a に分類される。小型。胎土は浅黄橙色。体部はやや内湾気味に立ち上がる。ススの付着は見られない。5 は DZ-2 に分類される。胎土は黄橙色。胎土は粗く赤色粒子と黒色粒子を含む。小振り。二次的に灯芯を載せるための抉りが付けられ、周辺にはススがこびりついている。見込みには体部立ち上がり際に窪みが見られ、中央部も窪んでいる。底部糸切り痕は明瞭ではない。

遺構外（Ⅱ－ 29 図）

1 ～ 3 は磁器である。1 は明末の中国景徳鎮窯系青花芙蓉手皿で、JA1-2 に分類される。畳付は斜めに削られ砂が付着している。高台裏にはカンナ痕が見られる。型打は見られず後出のものであろう。SE102 の 2 と同一個体か。2 は肥前系染付鉢で、JB-5 に分類される。口縁が「く」の字状に外反している。見込み中央寿文。3 は脚部の畳付部分が浅く削り込まれた肥前系仏飯器で、JB-8-b に分類される。畳付の外周には 1 段、段が付けられている。青磁。

4、5 は瓦である。4 は軒丸瓦。金箔瓦。梅鉢の花弁断面の稜線がなだらかな台形状になっている無剣梅鉢文 B に分類される。筒部欠損。焼成は不良。5 は鬼瓦。瓦を固定するための銅線を通すための穴が 3 箇所開いている。雲形の脇部である。

Ⅱ-15 図　縄文土器、SK11、SD29、SK49、SU51、SK58

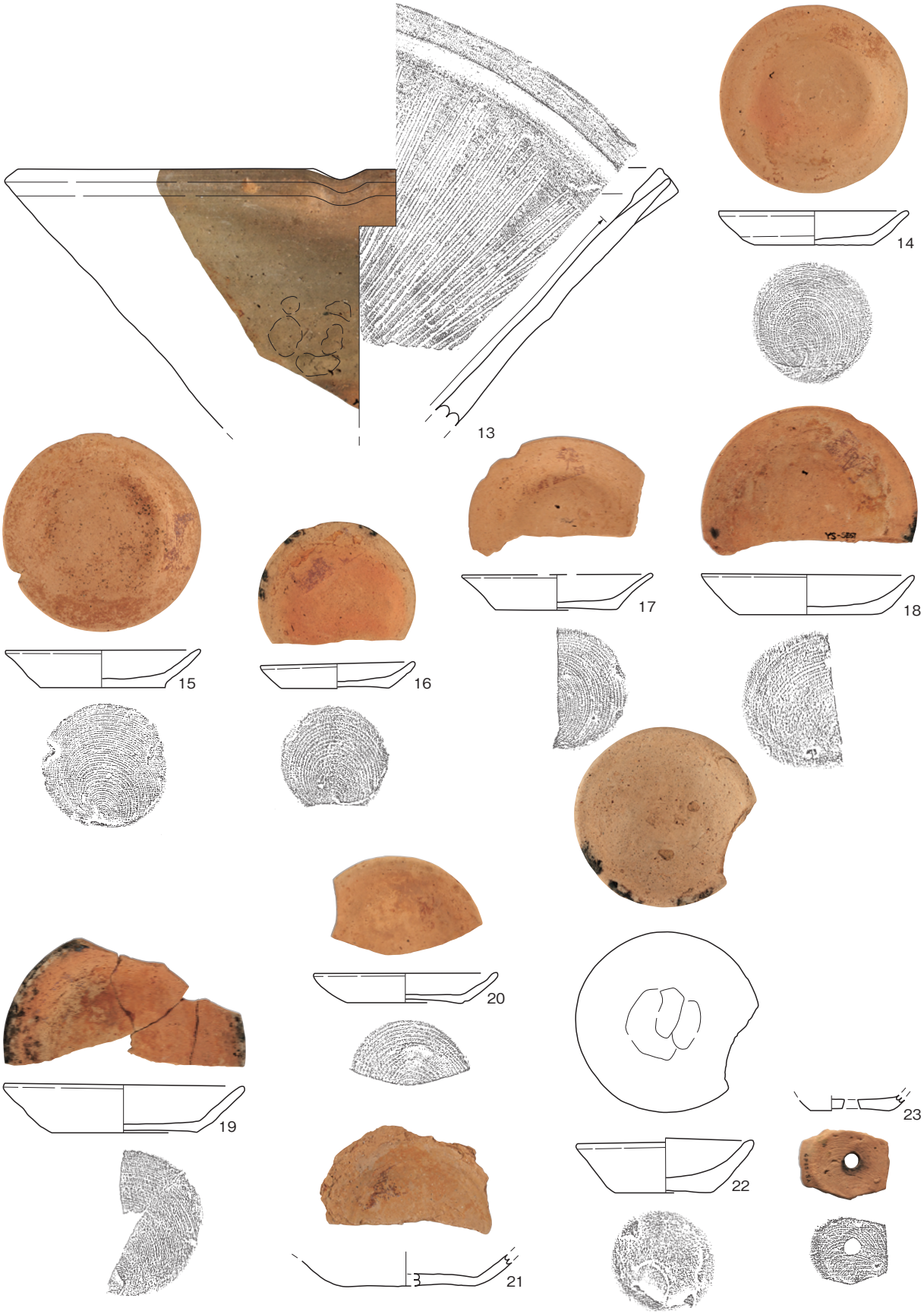


SK59

SK66

Ⅱ-16 図　SK59、SK66

Ⅱ-17図　SE67（1）

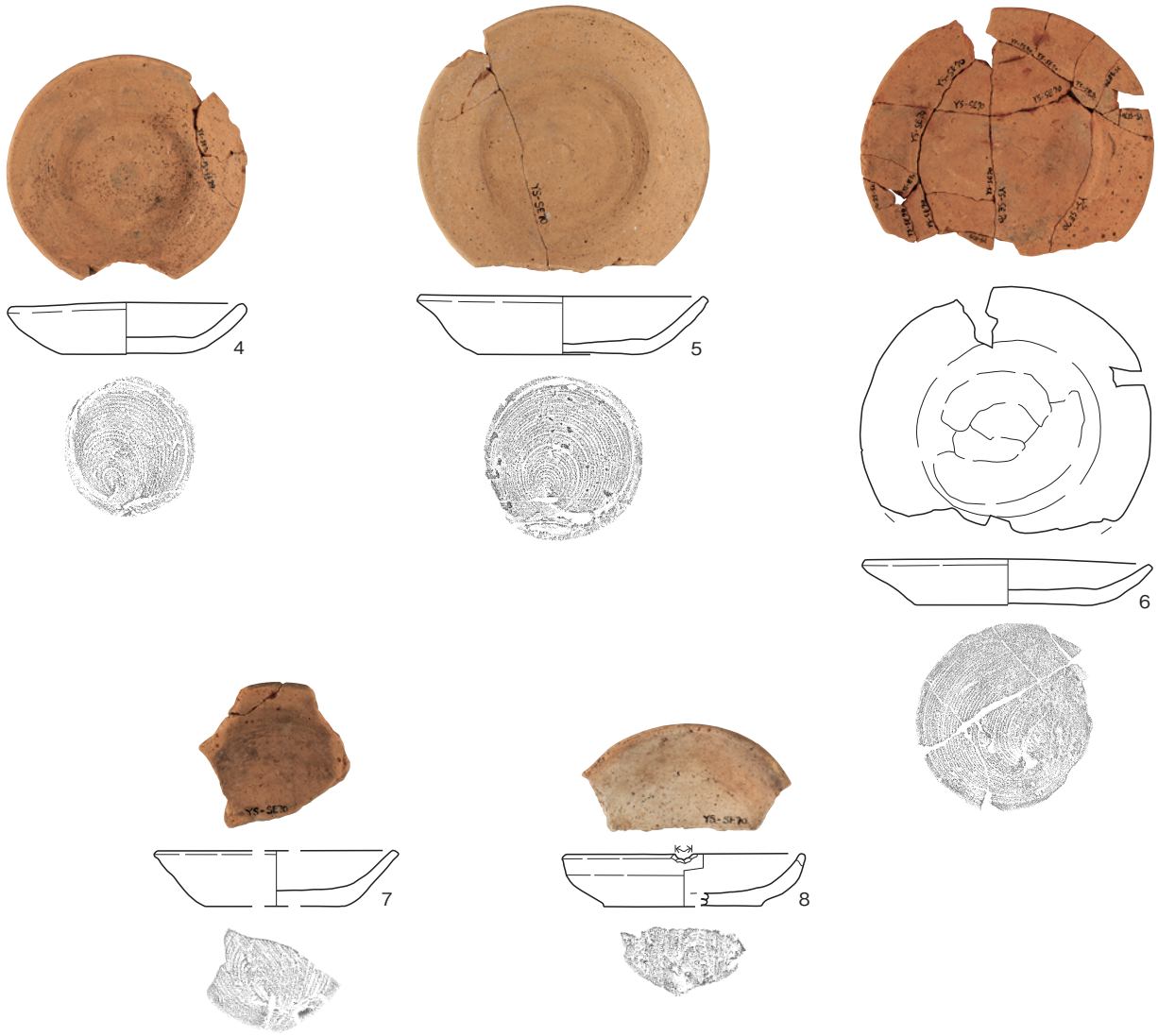


Ⅱ-18図　SE67（2）

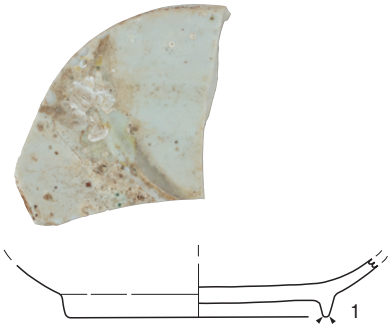
SE67（3）

SE70（1）

Ⅱ-19図　SE67（3）、SE70（1）

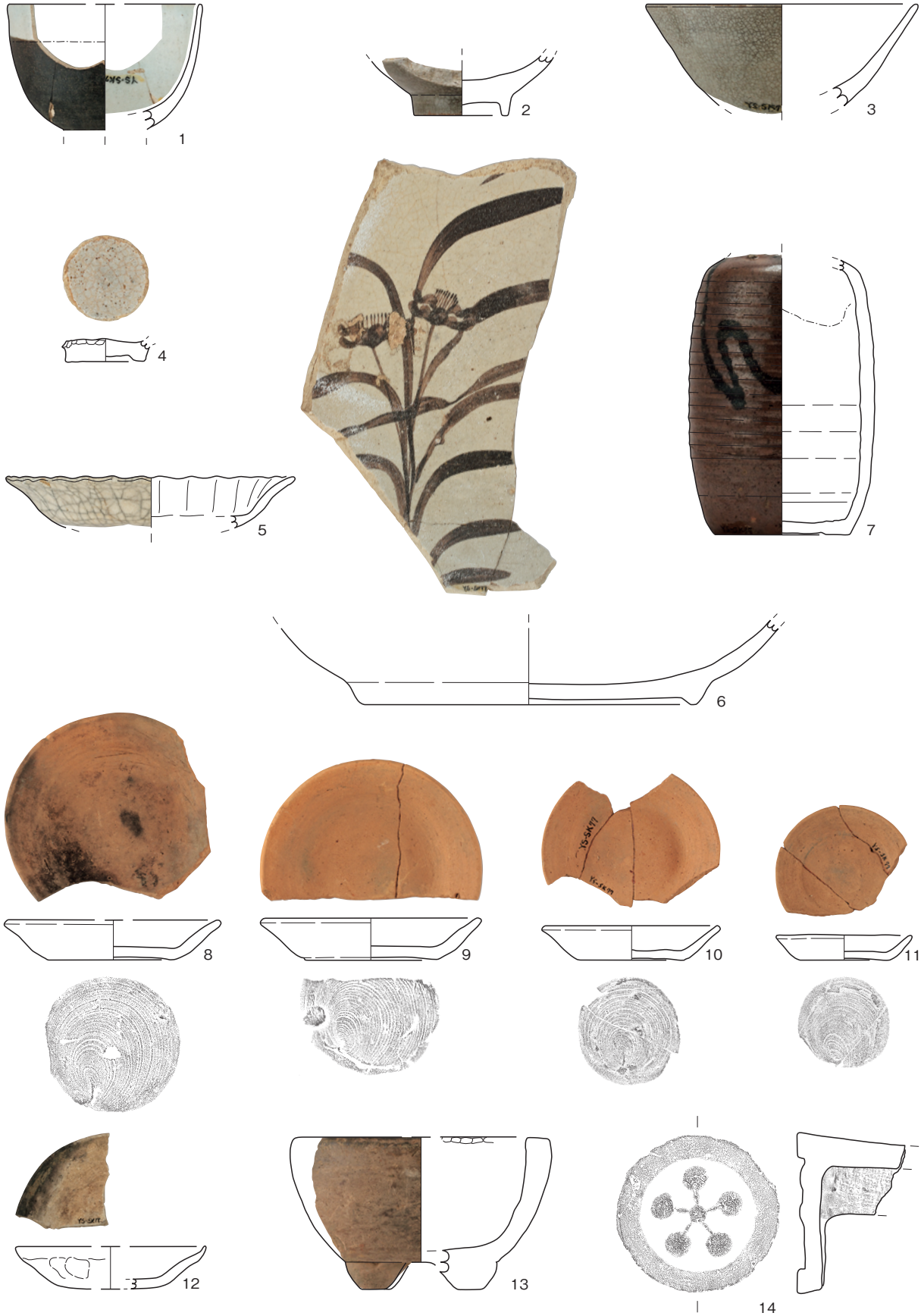


SE70（2）

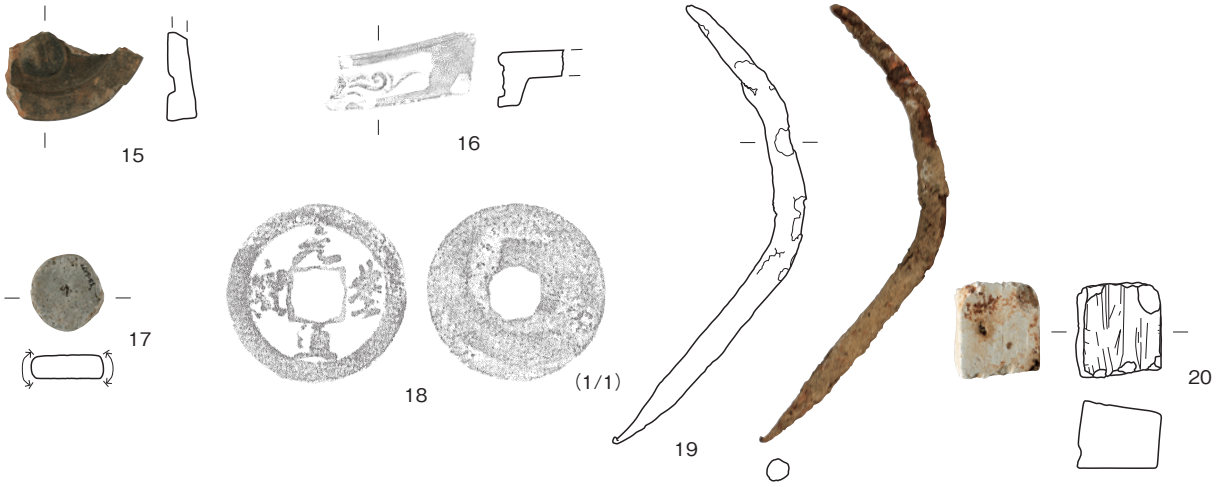


SK76

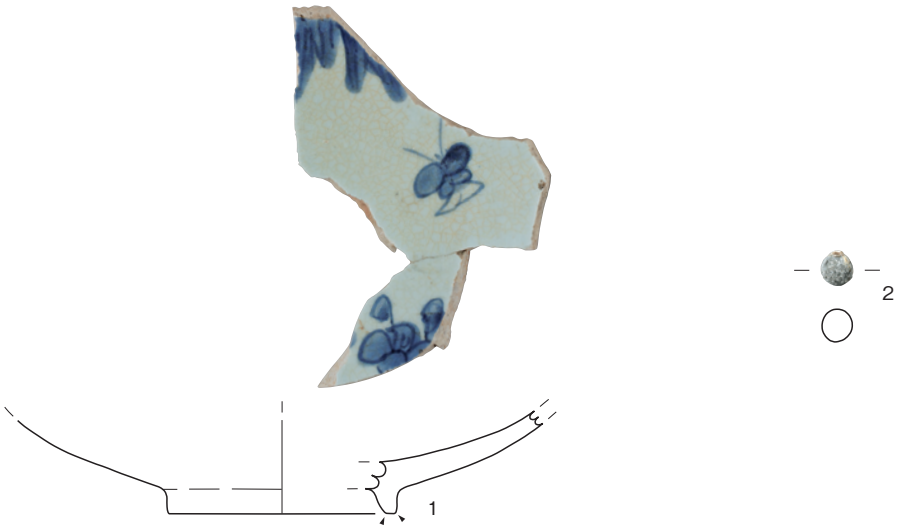
Ⅱ-20図　SE70（2）、SK76



Ⅱ-21 図　SK77（1）



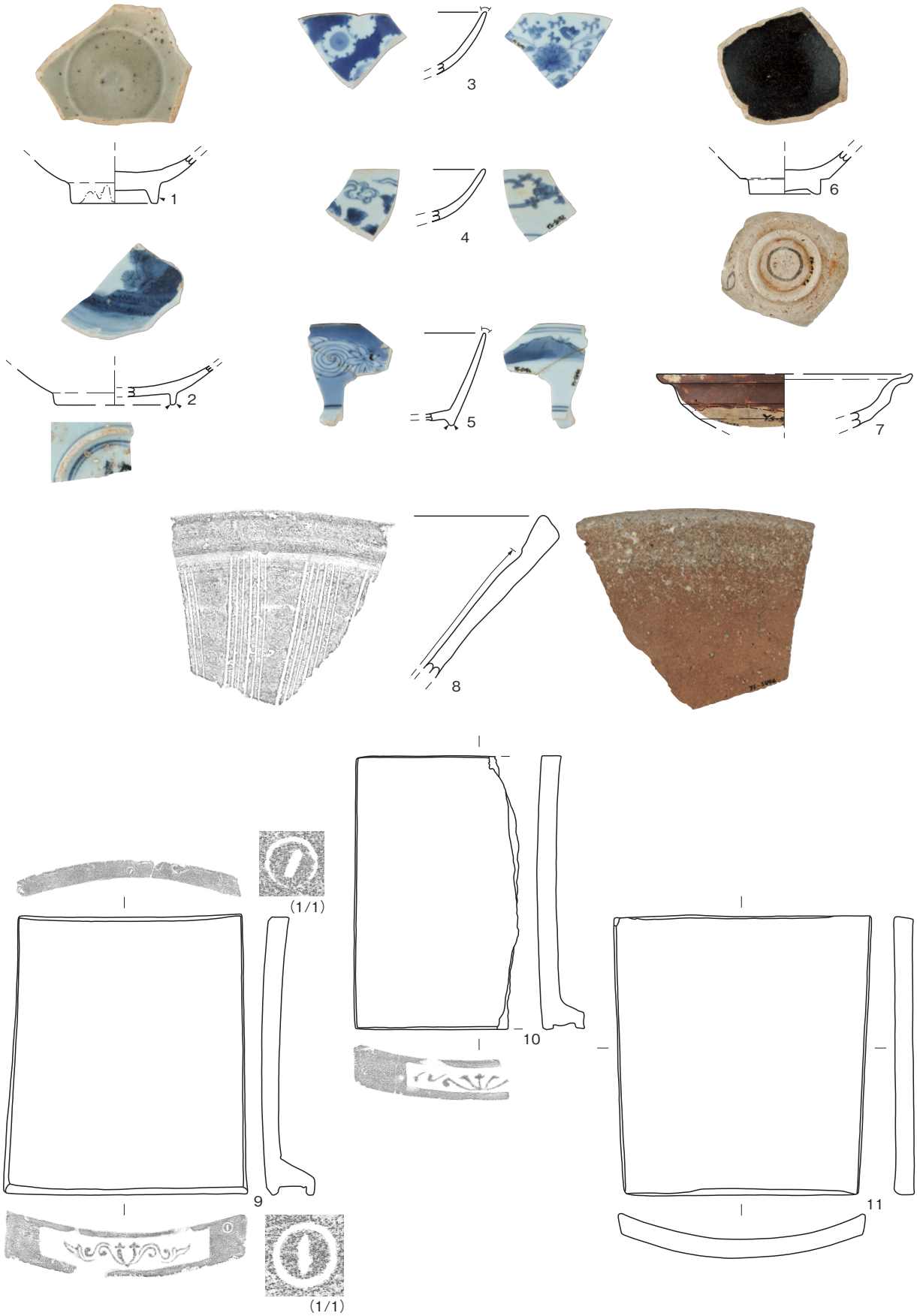
SK77（2）



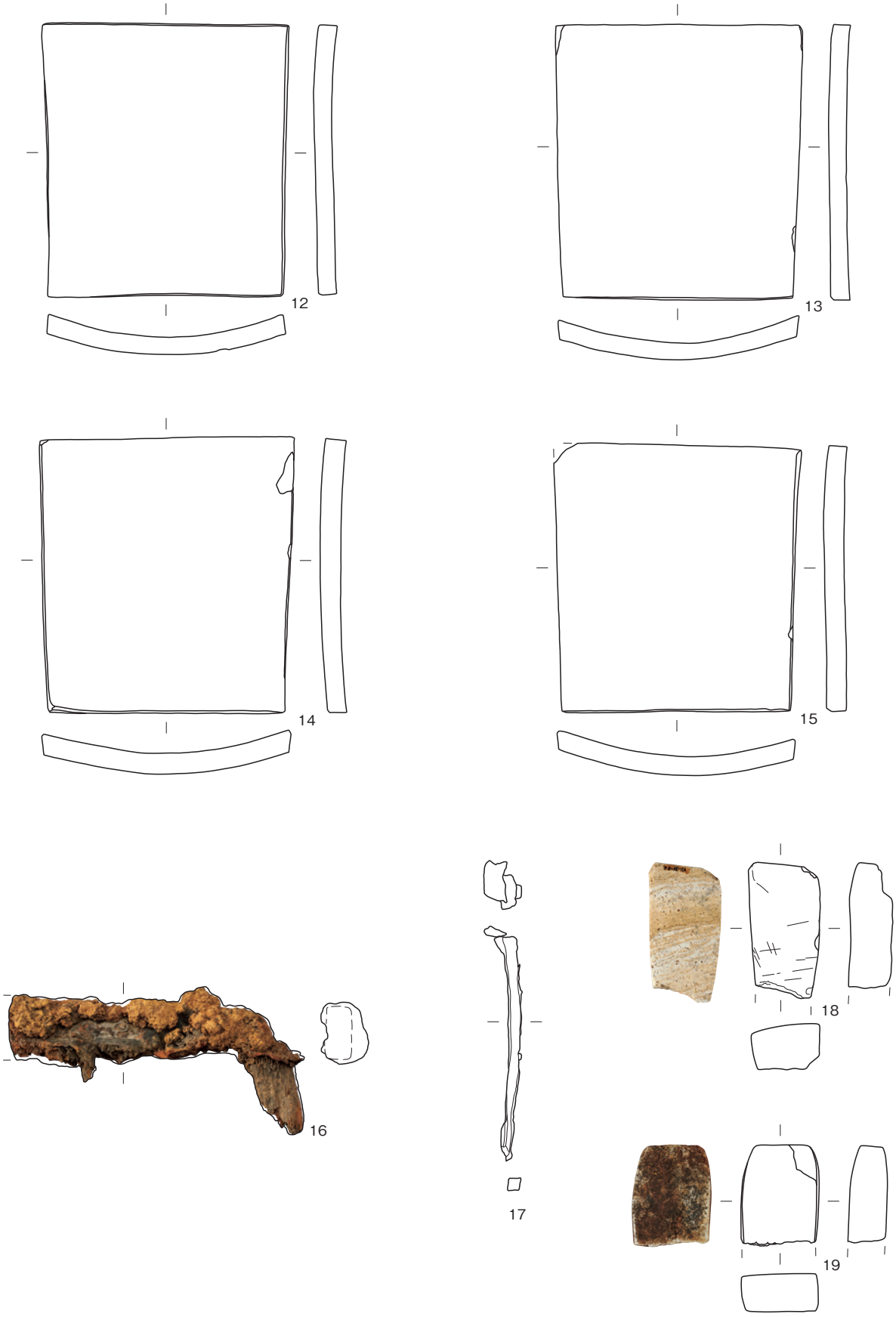
SK78

SD91

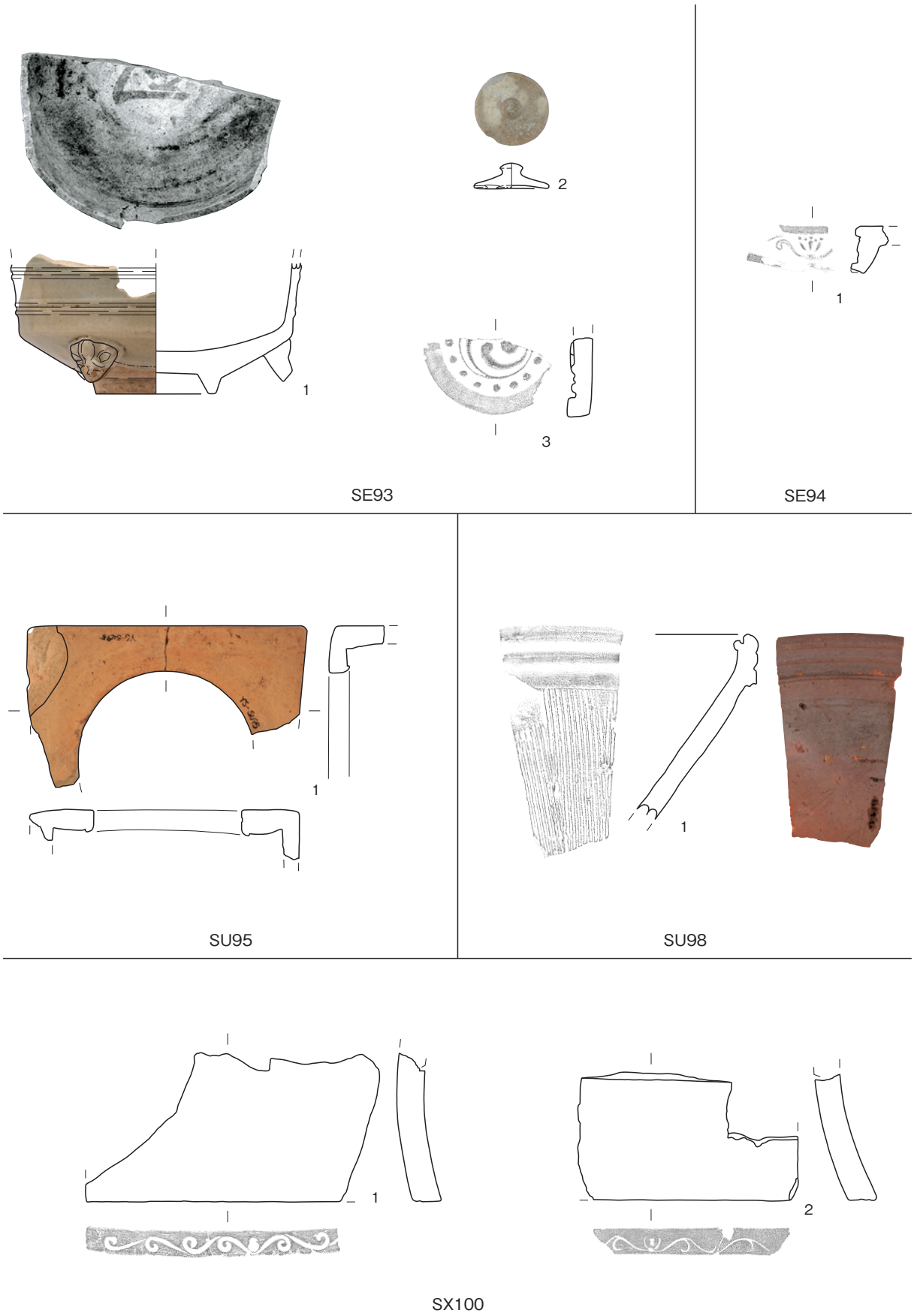
Ⅱ-22図　SK77（2）、SK78、SD91



Ⅱ-23図　SU92（1）

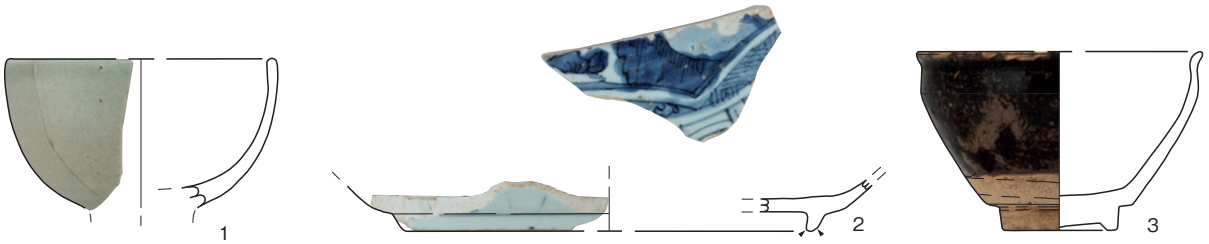


Ⅱ-24図　SU92（2）



Ⅱ-25 図　SE93、SE94、SU95、SU98、SX100

SE101

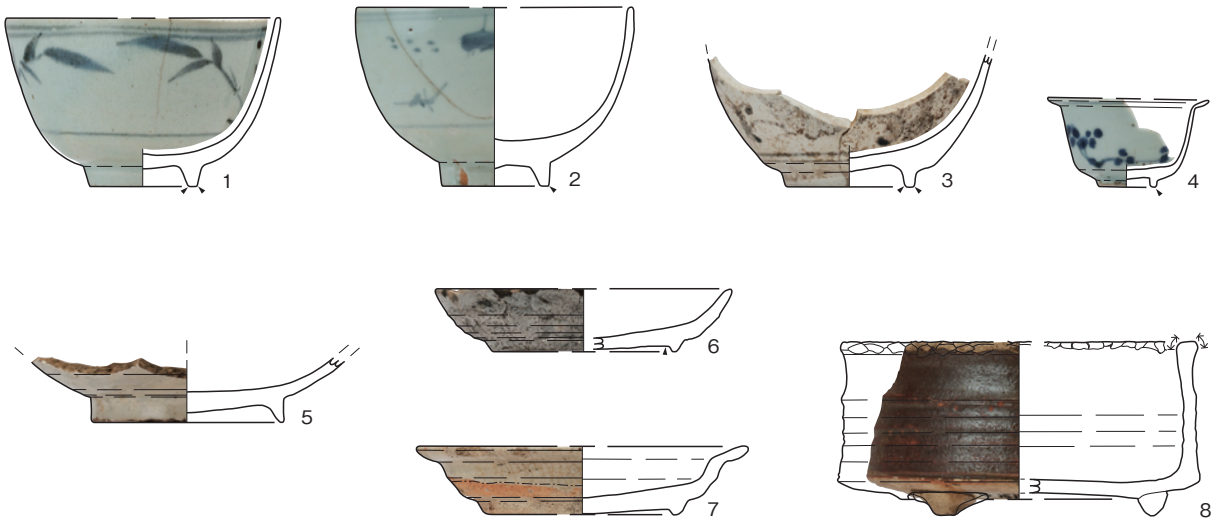


SE102（1）

Ⅱ-26図　SE101、SE102（1）

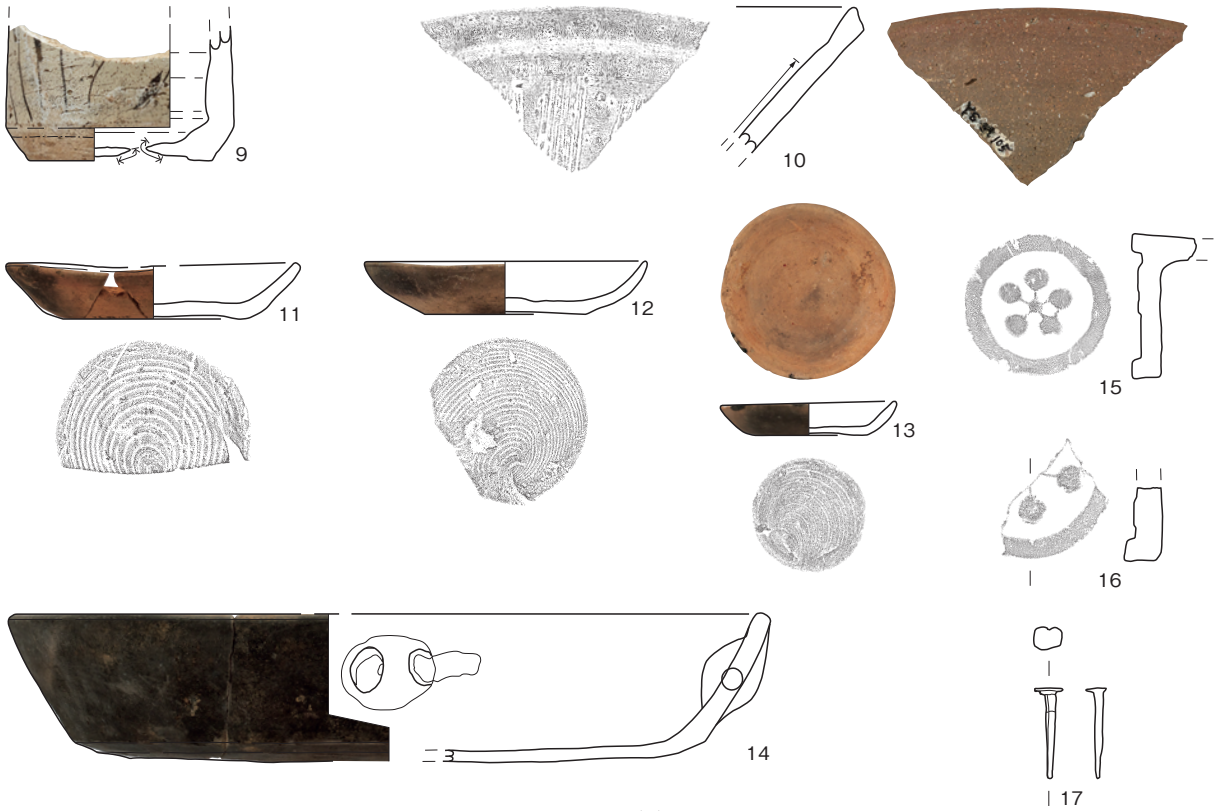
SE102（2）

SE104



SE105（1）

Ⅱ-27図　SE102（2）、SE104、SE105（1）

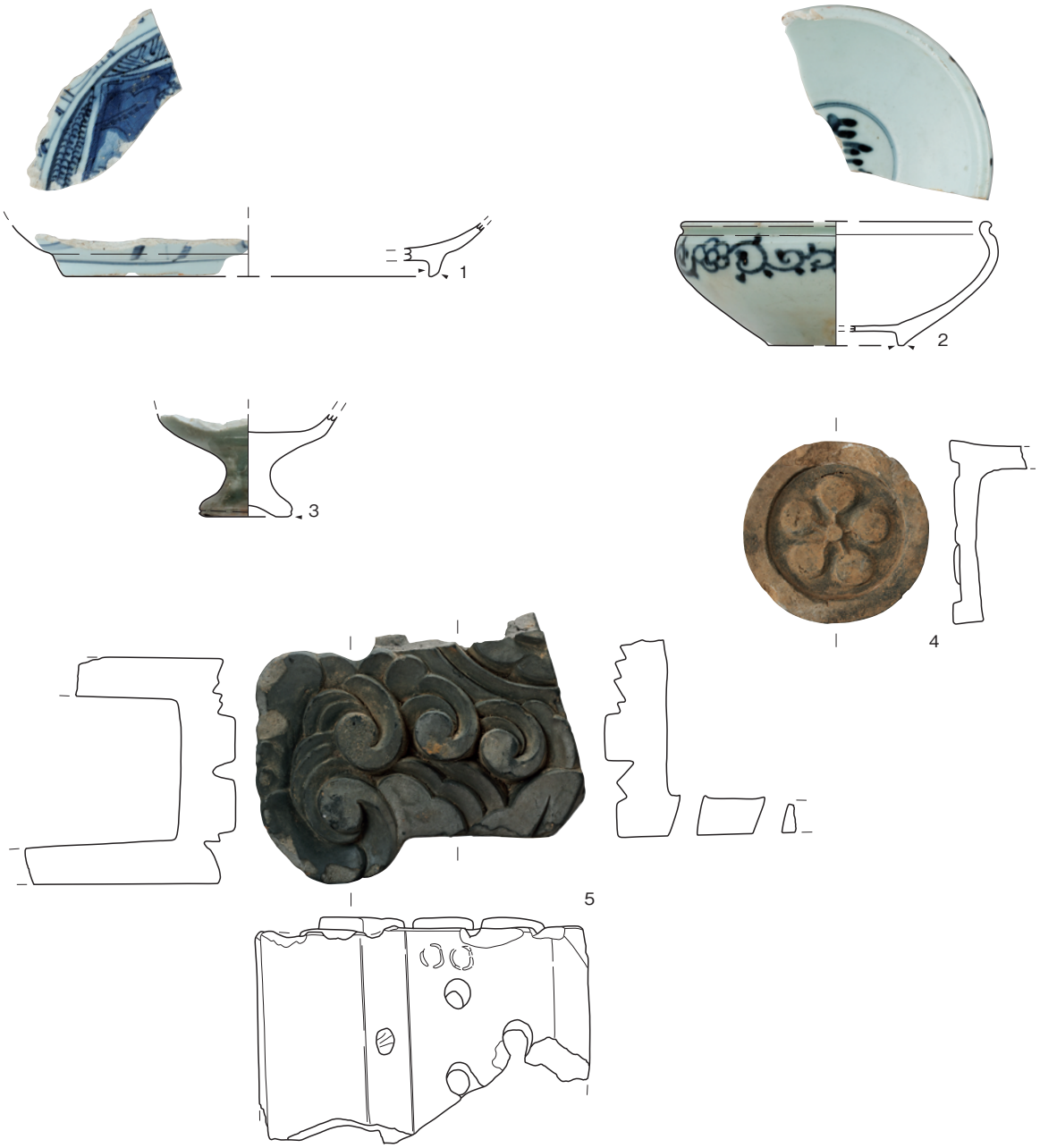


SE105（2）

SU106

SK107

Ⅱ-28図　SE105（2）、SU106、SK107



Ⅱ-29 図　遺構外

第３節　動物遺体

はじめに

本調査地点からは９群の動物遺体が出土した。それらの内、SE105 の資料は土壌ごとと取り上げ、後に水洗選別法によって抽出されたものである。そのほかの資料は、現場にて調査者が目視で確認できたものを任意で取り上げた資料である。なお、水洗選別法において、5㎜、3㎜、1㎜目の篩を用いている。以下、出土した動物遺体の種名を記し、綱ごとにその概要を述べる。

1. 貝類（Ⅱ－２表）

５種 205 個体が出土している。全て SE105 出土資料である。

最も多いのはヤマトシジミで 156 個体出土し、全体の 76.1％を占めている。そのほかに、ハマグリ（21 個体・10.2％）、サルボウガイ（18 個体･8.8％）、アサリ（9 個体･4.4％）、サザエ（破片・0.5％）が出土している。サザエの破片を除くと、中小型二枚貝類で占められている。なお、ハマグリは殻長 40 ～ 60㎜の中型からやや大型のもので構成されている。

2. 魚類（Ⅱ－３表）

２群７点が出土している。全て SE105 出土資料である。綱より下位まで同定できたものは３点で、ニシン科（2 点）、サケ属（1 点）であった。

また、未同定とした資料は、２点で共に小型の椎骨であった。特に尾椎の方は、イボダイ標本にサイズ・形状が近似していたものの、関節突起が前方に突出しない点で異なっていた。サイズは異なるものの、関節突起や棘突起の突出方向及び角度、全体の形状が近似していたのはゴマアイゴ標本であった。

同定不可とした資料は、２点で肩甲骨と腹椎で共に小型であった。

3. 鳥類（Ⅱ－３表）

スズメ目の左手根中手骨が１点出土している。SE105 出土資料である。ほぼ完存であった。ヒヨドリ標本とも形状は近似しているが、サイズがヒヨドリより小さく、腹側面遠位の凹みが浅い。松岡ほか（2009）に掲載されている写真と比較した結果、サイズ・先述の箇所の形状共に、ツグミ科（写真はトラツグミ）やヒタキ科（写真はコマドリ）のものに近い。

4. 哺乳類（Ⅱ－４表）

１種３点が出土している。綱より下位まで同定できたのは SK77 から出土したウマの左上顎第２後臼歯であった。歯根部が欠損しているため歯冠高が計測できなかったが、残存高が 70㎜であったことから４歳未満（西中川編 1991 の式による）と推定される。その他に、SE01 から同定不可とした四肢骨骨幹部分１点、SE105 で同定対象外の尾椎１点であった。四肢骨骨幹資料はイノシシやシカサイズであった。尾椎資料はネコやタヌキサイズであった。

軟体動物門　Phylum MOLLUSCA

- 腹足綱 Class Gastropoda
  - 古腹足目 Order Vetigastropda
    - サザエ科 Family Turbinidae
      - サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
- 二枚貝綱 Class Bivalvia
  - フネガイ目 Order Arcoida
    - フネガイ科 Family Arcidae
      - サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*
  - マルスダレガイ目 Order Veneroida
    - シジミ科 Family Cobicalidae
      - ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
    - マルスダレガイ科 Family Veneridae
      - アサリ *Ruditapes philippinarum*
      - ハマグリ *Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

- 硬骨魚綱 Class Osteihthyes
  - ニシン目 Order Clupeiformes
    - ニシン科 Family Clupeidae
      - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - サケ目 Order Salmoniformes
    - サケ科 Family Salmonidae
      - サケ属 *Oncorhychus* sp.
- 鳥綱 Class Aves
  - スズメ目 Order Passeriformes
    - 科属種不明 fam , gen., et sp. indet.
- 哺乳綱 Class Mammalia
  - 奇蹄目 Order Perissodactyla
    - ウマ科 Family Equidae
      - ウマ *Equus caballus*

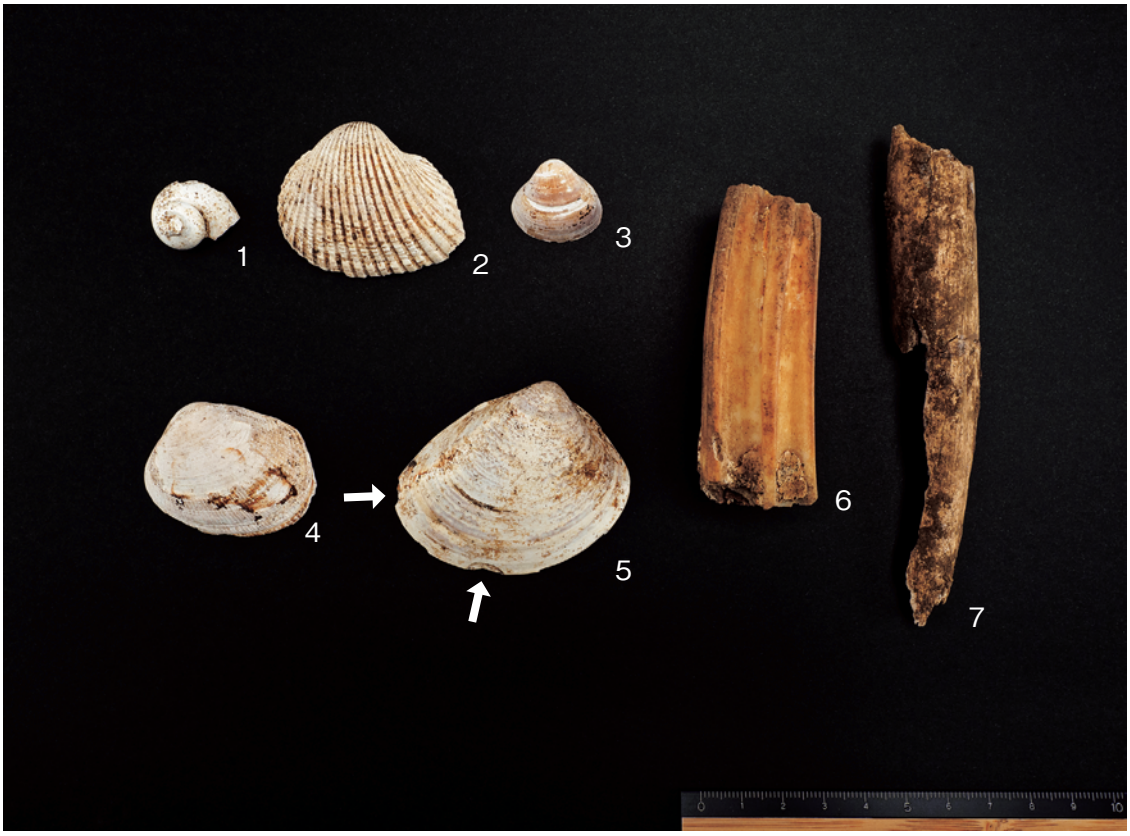
【参考文献】
西中川駿編　1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成２年度文部科学省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告，鹿児島大学農学部獣医学科
松岡廣繁（総指揮）・安部みき子編　2009『鳥の骨探』株式会社エヌ・ティー・エス

Ⅱ-2 表　薬学部南館地点出土の貝類遺体組成表

種	サザエ	ガイ	サルボウ	ジミ	ヤマトシ	アサリ		ハマグリ		計（MNI）
部位	殻	左	右	左	右	左	右	左	右	
点数	破片	18	14	156	155	3	9	11	21	
MNI	1	18		156		9		21		205
比率	0.5%	8.8%		76.1%		4.4%		10.2%		

Ⅱ-3 表　薬学部南館地点出土の脊椎動物遺体一覧

遺構等	動物の種類（分類群）		部位	左右	数	備考
	綱	綱より下位				
SK77	哺乳	ウマ	上顎第2後臼歯	左	1	歯根部分は欠損。歯冠の残存高が70㎜であるので、生後4歳未満と推定される。
SE101	哺乳	哺乳類・同定不可	四肢骨		1	骨幹部分。中型哺乳類。
SE105（5㎜）	哺乳	同定対象外	尾椎		1	ネコサイズ
SE105（3㎜）	硬骨魚	未同定	腹椎		1	
SE105（3㎜）	硬骨魚	未同定	尾椎		1	ゴマアイゴ標本に椎体の形状、棘や関節の突出の仕方などが近似。
SE105（3㎜）	硬骨魚	同定不可	肩甲骨	左	1	
SE105（1㎜）	硬骨魚	ニシン科	角骨	右	1	
SE105（1㎜）	硬骨魚	ニシン科	腹椎		1	被熱により白色化。
SE105（1㎜）	硬骨魚	サケ属	椎骨		1	椎体部分破片。被熱による白色化。
SE105（1㎜）	硬骨魚	同定不可	腹椎		1	小型。
SE105（1㎜）	鳥	スズメ目	手根中手骨	左	1	ヒヨドリ標本とも近似するが腹側面遠位の凹みが浅い。ツグミ科やヒタキ科のものに近い。



Ⅱ-30 図　薬学部南館地点出土動物遺体（1）

1．サザエ，2．サルボウガイ（左殻），3．ヤマトシジミ（左殻），4．アサリ（左殻），5．ハマグリ（右殻），6．ウマ　左上顎第2後臼歯，7．哺乳類・同定不可　四肢骨　※1～5．SE105，6．SK77，7．SE101　［→：人為的欠損］

Ⅱ-31 図　薬学部南館地点出土動物遺体（2）

1・2．ニシン科（1．腹椎，2．右角骨），3．サケ属　椎骨片，4・5．魚類・未同定（4．腹椎，5．尾椎），6．スズメ目・左手根中手骨，7．哺乳類・同定対象外　尾椎

Ⅲ　薬学部資料館地点

第Ⅰ章　調査の経緯と概要

第1節　調査に至る経緯

1994年度、東京大学施設部から埋蔵文化財調査室に、竣工間もない薬学部南館西側に資料館新設計画に伴い、埋蔵文化財の調査に関する照会があった。資料館建設予定地は、東京都遺跡地図遺跡番号219（東京都教育委員会1985）、現文京区47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落･貝塚･大名屋敷、[平]住居･[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧][縄][弥][古][平][近]）内に位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地として周知されている。当該地においても遺跡の遺存状態に応じた埋蔵文化財発掘調査を行う必要があった。当該地点の具体的対応の協議の中で、2年前に行われた隣接している南館の発掘調査で、江戸時代初期に遡る加賀藩邸の遺構、遺物が出土していることから、試掘調査を行うことなく建築予定地域内全域について発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、新営工事に合わせて1995年7月24日～9月1日に行った。

第2節　調査の方法と経過

(1) 調査の方法（Ⅲ－11図）

発掘調査は、建物予定地域全域を対象にして行った。調査面積は540㎡である。調査時は、2本の基準杭を設定して調査区の形状に合わせたグリッドを設定し、調査を行ったが、本報告は、その後に設定した東大グリッド表記に変更している（東京大学埋蔵文化財調査室2017）。

(2) 調査の経過

発掘調査は、隣接する薬学部南館地点の調査より得られた状況を踏まえて、7月24日より調査区北西側から重機による表土掘削を開始した。調査区西側は撹乱土下から関東ローム層が確認されたが、東側は谷へと傾斜する自然堆積土が堆積しており、当初の遺構確認は、自然堆積層上面にて行った。8月3日に表土掘削が終了し、8月7日から遺構の調査を開始した。近代以降に大きく撹乱されていたことによって、遺跡全体の遺存は良好ではなく、遺構数も少なかった。8月19日より近世の遺構の調査と並行して東側谷部の自然堆積層の掘削を開始し、地形の復元と先史時代の調査を行った。旧石器時代の調査は、調査区全体に7箇所の試掘トレンチを設定し、8月26日から開始した。この調査では、Eo217区周辺に設定したT.P.7の武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅳ層にかけて、礫群、石器ブロックが出土した。旧石器時代の調査と並行して、土層観察のための深掘りを行った。8月31日に全体写真の撮影を行い､全ての野外調査を終了した。

第3節　調査の概要

（Ⅰ－9図、Ⅲ－1図、Ⅲ－9図、Ⅲ－11図、Ⅲ－3表）

発掘調査で確認された埋蔵文化財は、遺構が旧石器時代と江戸時代、遺物が旧石器時代、縄文時代、江戸時代に比定されるものであった。調査区は、「Ⅰ　遺跡の位置と環境」でも略述したが、本郷台地東側を南流する旧石神井川から西へ延びる支谷の谷頭部付近にあたり、調査区全体の地形は谷に向って北東隅付近が最も低く、東と南側に上っている。

調査では、調査区全域にわたって近代以降に撹乱されていた。それを除去すると一部に江戸時代初期の層が遺存していたものの、ロームや黒色の自然堆積層が現れ、遺跡の遺存－特に江戸時代の－は良いとは言えない状況であった。

各時代ごとに概観すると、旧石器時代はEo217、Eo218区、武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅳ層にかけて石器ブロック1群と礫群が1群確認された。

縄文時代は、遺構には伴ってはいないが、調査区東壁際から晩期前半の土器の集中が確認された他、20数点程度出土した。本郷キャンパス内では、これまで本調査地点より東側にいくつか後期後半から晩期にかけての土器廃棄跡などが確認されている。

江戸時代の遺構や遺物は、調査区の西側緩斜面部に偏在しており、地形および近代以降の削平によって遺構、遺物などを伴う生活の痕跡の大半が削平されたと推定される。また、確認された遺構は、出土遺物からほぼ17世紀に比定され、18世紀以降に廃棄された遺構は、深度を有する1基の井戸（SE9）があるに過ぎないことも削平が大きかったことを物語っている。隣接する薬学部南館地点からも多く確認されているが、最も多かった時代が17世紀前半の遺構であり、SK1、SK6、SK8、SK10などが該当する。これらの遺構は、南北に列状に分布していることから、当該期にはこのライン以西に藩邸主体部が存在していた可能性が強い。

第４節　基本層序（Ⅰ－４図）

調査区内の地形は、西から東へと傾斜を有し、北東隅へ向かって大きく落ち込んでいる。調査区北壁ではローム上面（Ⅲ層）の標高が、En ライン付近では約 18.3m であるが、それから約 10m 東では、16.2m と 2m 以上も傾斜している。薬学部南館地点東側で確認された谷頭の調査区東壁のⅢ層上面の標高が 19.0m であったので、それからも急に落ちていることが看取される。

近世の盛土は西側の一部から確認されたが、多くは削平されていた。谷は、南館地点と共通の堆積が確認されており、上層から黒褐色土（2 層）、暗褐色土（3 層）、黒褐色土（4 層）、黒色土（5 層）、ローム漸移層（6 層）であった。

第Ⅱ章　旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物

第１節　旧石器時代

（１）調査の概要（Ⅲ－１、２図）

江戸時代の遺構調査中に、遺構覆土中から旧石器時代の所産と考えられる黒曜石製ナイフ形石器（Ⅲ－７図１）が１点出土した。このため調査範囲内には、旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性が高いと推定された。旧石器時代遺構・遺物の確認を目的とした調査は、縄文時代遺物包含層掘削終了後、ローム層上面（Ⅲ層）に２×２ｍの試掘坑を７ヶ所設定し、立川ローム層Ｘ層まで掘削を行った。その結果第１試掘坑（T.P.1）でⅢ層中から黒曜石製ナイフ形石器１点、第７試掘坑（T.P.7）ではⅢ層～Ⅳ層中位で礫集中が検出された。

本格的調査は、第７試掘坑を２ｍ拡張して４×４ｍの範囲で実施した。この拡張部分では石器10点、礫680点が出土した。これらの第７試掘坑Ⅲ～Ⅳ層出土下部石器・礫は、ブロック・礫群を構成して同一文化層（第Ⅰ文化層）を形成するものであり、Ⅳ層下部から中位にピークを持つ石器ブロックと礫群として認識された。第７試掘坑は北東方向に発達した谷部縁辺にあり、石器ブロック・礫群の出土状況も北東方向に５～7°傾斜し分布している。

このほかに、他時代遺構覆土中から出土した石器やその他試掘坑から石器が出土した。それらは、その他の石器として第Ⅰ文化層とは別に報告する。

（２）第Ⅰ文化層

概要（Ⅲ－１図）

本文化層の遺構は、調査範囲の北東側Ｅo217・218グリッドで、立川ローム層Ⅲ層からⅥ層下部に認められた散漫で小規模な石器ブロック１基と集中度の高い礫群１基からなる。出土した石器は、ナイフ形石器１点、掻器１点、削器１点、二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片１点、剥片・砕片５点（石刃１点）の合計10点である。本文化層石器石材は、黒曜石・チャート・安山岩・ホルンフェルスである。礫群の構成礫は680点で石材は砂岩・チャートである。

石器ブロックと出土石器

第１ブロック（Ⅲ－３図）

調査範囲北東側Ｅo217・218グリッドに位置する。本ブロックは第１号礫群の中央部から北西部に重複している。出土石器は長径3.2ｍ、短径2.0ｍの長楕円形範囲に分布する。出土層位は立川ローム層Ⅲ層下部からⅣ層中位で、約25㎝の高低差を持っている。北東方向に５～7°傾斜している。また、石器は前述した範囲内に散在するが、南東部分に７点が分布している。

出土石器は、ナイフ形石器１点、掻器１点、削器１点、二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片１点、剥片・砕片５点（石刃１点）の合計10点である。接合資料は認められない。

第１ブロック出土石器（Ⅲ－４～６図１～７）

出土石器は、ナイフ形石器１点、掻器１点、削器１点、二次加工痕のある剥片１点、使用痕のある剥片１点、剥片・砕片５点（石刃１点）の合計10点である。このうち７点を図示した。

１はガラス質黒色安山岩製ナイフ形石器である。素材は肉厚な大型横長剥片を縦に用い、その打面部に丁寧なブランティングを集中的に施している。対する側縁基部付近にもブランティング施した二側縁加工ナイフ形石器である。素材に先行する剥離痕の観察では、連続する肉厚・幅広な横長剥片剥離痕が観察される。素材の形状と用い方は該期に西南日本で生産される国府型ナイフ形石器に類似するが、素材断面形は三角形を呈しており、瀬戸内技法による盤状剥片石核から剥離された翼状剥片を素材としていないように観察される。従って本ナイフ形石器は典型的な国府型ナイフ形石器に類似する形態の刺突具と捉えておきたい。単独個体資料である。

２はホルンフェルス製掻器である。単剥離打面から剥離された薄い縦長剥片の素材端部を巡るように丁寧な片面加工を施し刃部としている。素材はやや捻じれた剥片であるが、表面の先行剥片剥離痕からは規則的な石刃様の縦長剥片が連続して剥離された痕跡が認められる。単独個体資料である。

３は透明度が低い光沢の強い黒曜石を用いている。やや肉厚な横長剥片の左側縁部に弱い調整を施して刃部とする削器である。表面には角礫面を大きく残している。高原山産ではないかと推定される。単独個体資料である。

４は漆黒で透明度の低い黒曜石を用いている。単剥離打面のゴロッとした横長剥片の素材端部に二次加工を施している。素材左右側縁部には折断が施されている。素材表面で観察される剥離痕からは、素材同様なゴロッとした横長剥片を打面転位させながら連続剥離した剥片剥

離痕が観察される。高原山産と推定される。単独個体資料である。

５は肉厚でゴロッとしたチャート製縦長剥片を素材とする使用痕のある剥片である。素材端部に礫面を残す。後述する剥片（Ⅲ－６図７）と同一個体資料である。図示していない剥片２点を含め、本文化層の主体となっている個体別資料である。素材表面中央には稜を持ち、左右方向から交互剥離で肉厚な横長剥片を素材剥離に先行して行っている。本資料は礫面を残す大型石核の打面再生剥片を素材として用いている。表面右側縁部、裏面左側縁部には使用痕と考えられる微細剥離痕が認められる。

６はガラス質黒色安山岩製石刃である。礫面をもつやや肉厚で大きい石刃である。表面には素材打面部方向の石刃剥離痕連続して認められ、規則的な石刃が剥離された痕跡が認められる。単独個体資料である。

７はチャート製横長剥片である。厚くゴロッとしている。石器表面には本製品と同様な幅広な剥離が180°打面転位などを行いながら進行した剥離痕が観察される。節理の多いチャートを用いている。前述した使用痕のある剥片（Ⅲ－５図５）と同一個体資料であり、図示していない剥片２点を含め、本文化層の主体となっている個体別資料である。

個体別資料の構成

本文化層から出土した石器10点は、ガラス質黒色安山岩２点（個体１・2）、チャート５点（個体６・7）、黒曜石２点（個体４・5）、ホルンフェルス１点（個体3）の石材構成である。本文化層石器石材で主体となっているのは、チャート（個体6）で図示した使用痕のある剥片（Ⅲ－５図５）と剥片（Ⅲ－６図７）のほか剥片２点からなる。その他個体はいずれも単独個体資料である。

接合資料は認められない。

礫群

第１号礫群（Ⅲ－８図）

本礫群は、調査範囲北東側Ｅ o217・218グリッドに位置する。本礫群には第１ブロックが北西部に重複している。出土礫は長径4.6 m、短径2.7 mの楕円形に分布する。礫の分布傾向は、出土範囲中央部から南東部に多くの礫が集中している。礫の出土層位は立川ローム層Ⅲ層上部からⅣ層下部まで約50cmの高低差を持つ。北東方向に５～7°傾斜している。

本礫群の構成礫は、拳大以下の礫が主体で、小型礫680点が検出され、集中度の高い礫群である。礫の石材は砂岩、珪岩である。いずれも比熱し、赤化した破損礫である。構成礫の接合資料は多く、分布範囲中央部と南東部に認められた集中部間で接合資料が複数認められる。このような状況から繰り返して礫を用いた使用頻度の高い礫群であると考えられる。

（３）その他の石器（Ⅲ－７図１・2）

他時代遺構覆土中や試掘坑から出土した石器をここで報告する。

１はナイフ形石器である。江戸時代調査中に遺構覆土中より出土した。長野県産と考えられる良質で透明度の高い黒曜石製である。打面部がハジケたやや厚い縦長剥片を素材とし、打面部を基部としている。ブランティングは左側縁部全面と右側縁部の基部から胴部まで丁寧に施され、右側縁部に刃部を残す優美な形態である。刃部には角礫面が残っている。単独個体資料である。

Ⅳ層下部の第Ⅰ文化層に共伴する可能性もあるが、形態や石材観からはⅣ層、Ⅳ層上部に含まれる石器の可能性も否定できない。

２は第１試掘坑から出土した黒曜石製ナイフ形石器である。やや濁る粒果の少し入る黒曜石である。角礫面打面から剥離された寸詰まりな横長剥片の打面部を右側縁部として素材とする。ブラティングは左側縁部基部から胴部付近に細かく施している。刃部表裏面には使用痕と考えられる微細剥離痕が認められる。神津島産のように観察される。単独個体資料である。

石器形状は台形様を呈するナイフ形石器であるが、所謂、武蔵野Ⅰ期に発達する台形石器とは少し異なるように思われる。

（４）まとめ

今回調査では、立川ローム層Ⅲ層からⅥ層下部で第Ⅰ文化層（石器ブロック１基･礫群１基、出土石器剥片10点）が検出されたに過ぎない。それらブロックはその規模・構成など小規模な石器群であるが、礫群は小礫680点が集中する礫群である。この文化層のほかに、黒曜石製ナイフ形石器が出土した。旧石器時代の成果は限定的ではあるが、近世武家屋敷として大きく地形改変を受け、また近代期にも最先端建物群を要する学府であった経緯を思うとき、このような状況下においても残存した石器群や遺構の価値は大きいと考えたい。

第Ⅰ文化層は層位的に武蔵野Ⅲ期（諏訪間・野口・島立　2010）に比定される石器群である。石器石材はチャート・黒曜石・安山岩・ホルンフェルスである。武蔵野Ⅲ期石器群は、ナイフ形石器と角錐状石器に掻器などの共

伴する石器群であり、槍先形尖頭器などの共伴が認められる段階である。河川中・上流域に形成される大規模遺跡では、多様な石材から石器製作が行われ、礫群も発達する。一方、本遺跡で検出されたような河川下流域や台地周縁部の遺跡でも、礫群は比較的安定して形成されるが、単独個体資料素材や製品が持ち持ち込まれ、限定された生産活動が想定されるような様相を呈している。

第１ブロックからは、ガラス質黒色安山岩製ナイフ形石器（Ⅲ－３図１）が出土している。該期のナイフ形石器は横長剥片を主体として製作される所謂切出状ナイフ形石器が主体となる時期であり、それらに角錐状石器や初期槍先形尖頭器が共伴する刺突具組成となるが、同時期の西南日本に発達する国府型ナイフ形石器や類似形態のナイフ形石器が東北日本南部でも共伴するとされる時期である。第１ブロック出土ガラス質黒色安山岩製ナイフ形石器は、大型横長剥片を縦におき、素材としてその打面部にブランティングを集中的に施している。それのみでなく対する側縁基部付近にもブランティング施した二側縁加工ナイフ形石器である。素材の形状からはこのナイフ形石器素材は瀬戸内技法盤状剥片石核から剥離された翼状剥片素材ではないと判断されるので、国府型ナイフ形石器に類似する形態のナイフ形石器として考えておきたい。

今回検出した文化層は、層位的に立川ローム層Ⅳ層下部武蔵野台地東縁端部に形成された少量の狩猟具・加工具を保有する活動痕跡であると捉らえられる。東京低地を望む武蔵野台地東縁部に発達した狭小な本郷台に形成される遺跡であり、河川中・上流域の在地石材原産地に隣接する拠点的遺跡に比べ、石器群構成の小規模な遺跡が点在して形成される地域である。これらは東京低地を望む武蔵野台地東縁部に小規模な集団が展開し、点々と遺跡形成した結果であろうと捉えられよう。

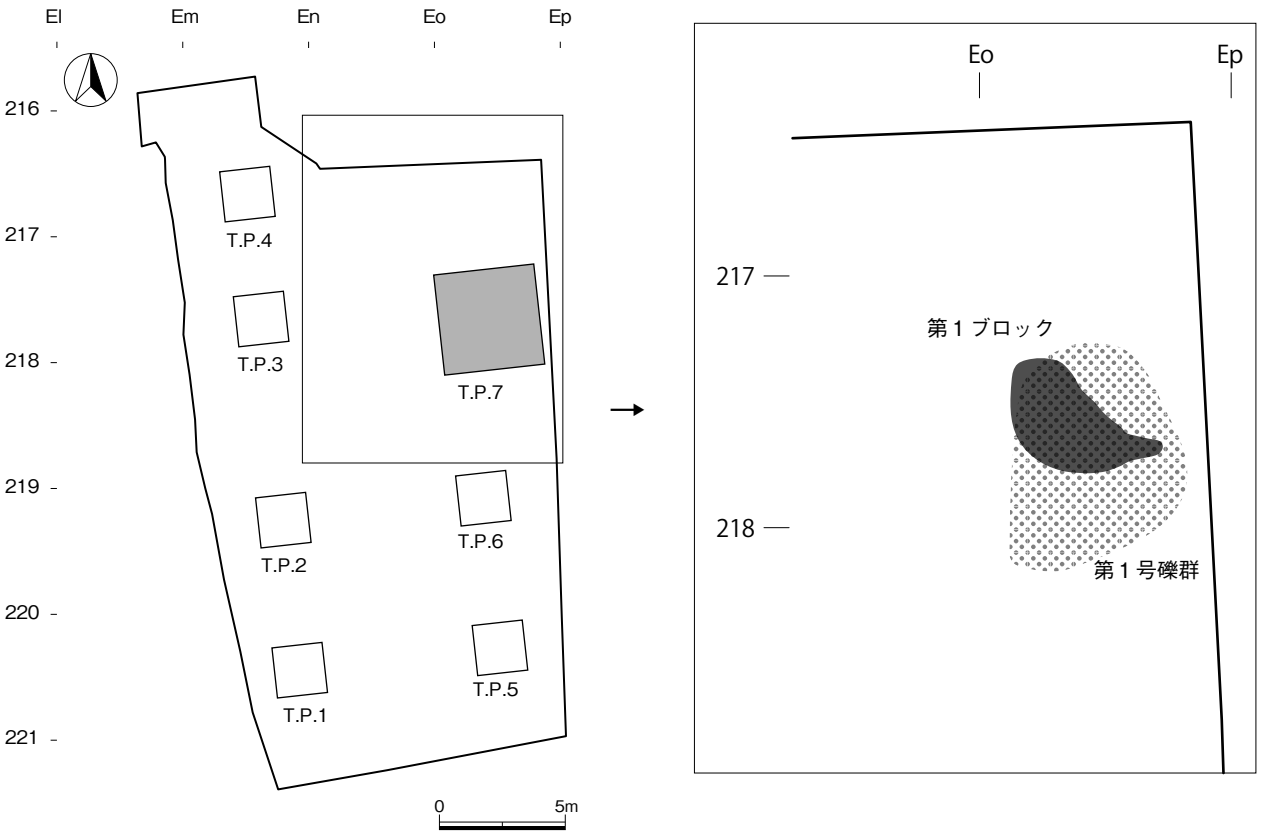
第２節　縄文時代（Ⅲ－９、10図）

今回の調査では、縄文時代に属すると思われる遺構は検出されていないが、近世以降の遺構・包含層を含め、少量の土器が検出されている。原位置を保っていると考えられる晩期に属する縄文土器片が、埋没谷覆土より出土している。この埋没谷は薬学部南館地点を谷頭とし、本地点、薬学系総合研究棟地点、龍岡町第５・７地点、医学部附属病院第２中央診療棟地点、同入院棟Ａ地点、台東区茅町二丁目遺跡でも検出されており、西側の台地から東側の不忍池へと下る一続きの谷である可能性が考えられている（Ⅰ－５図）。これまでの周辺地区の調査では、入院棟Ａ地点からは、まとまった量の縄文時代晩期中葉の土器が出土しており、当該地点の出土状況との類似がみられる（東京大学埋蔵文化財調査室　2016）。

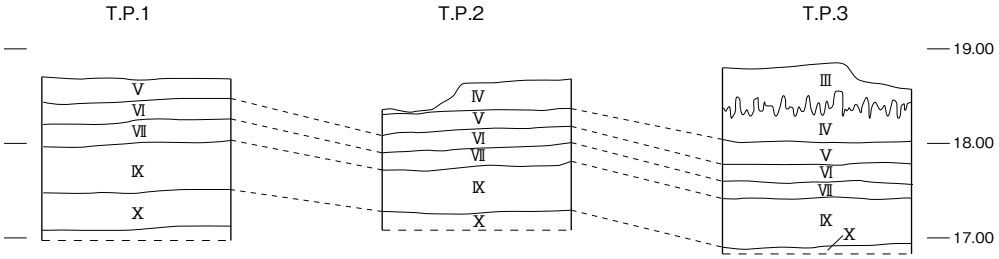
１は同一個体15片がEo217グリッドにまとまって検出された（Ⅲ－９図）。さらに東側の調査区外にも拡がっていると考えられる。南西から北東へ下る傾斜部で検出され、標高はT.P.17.9mである。検出された層位は調査区壁セクションの２層と３層の整合面付近である（Ⅰ－４図）。この２層・３層は上述、縄文時代晩期中葉の土器が出土した入院棟Ａ地点でのＧ層・Ｈ層に比定できると思われる。出土量が少なく、限定された範囲のみの検出であったため、廃棄されたものか流れ込んだものかは判断できない。

土器は姥山Ⅱ式系の深鉢片である。個体の遺存率は1/8程度で砲弾型を呈す。胎土色は内外面とも赤褐色で、焼成は良好である。外面にミガキが施され、口唇部に帯状の縄文、また胴部を巡る沈線と、横位に連続するステッキ状の沈線で区画される入組文内は、単節LRの縄文が浅く施紋される。下総地方からの搬入品の可能性が考えられる。

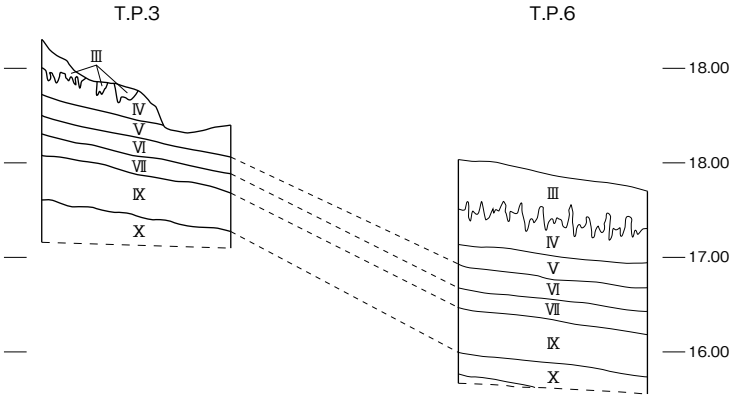
２～６の土器は調査区壁セクション２層から出土している。２、３は紐線文粗製土器深鉢口縁部である。ともに内傾した口縁部に刺突による連続した刻みが施される。晩期前葉に属すると思われる。４、５はともに直立する口縁を頸部とし、一回り大きい肩部を持つ深鉢の破片である。４は斜位の連続する鋭い刻み目を有し、５は口縁下に斜位に平行する二条の沈線が描かれている。６はほぼ直立する口縁部を持つ深鉢片である。米粒状の連続した列点が刻まれる。４～６は晩期中葉に属すると思われる。７は緩やかな波状口縁を持つ深鉢口縁部片である。棒状工具による深く広い入組沈線文が施文される。外面内面ともミガキ施され、硬質な作りとなっている。安行3d式である。



Ⅲ-1 図　旧石器時代調査区と第Ⅰ文化層全体図

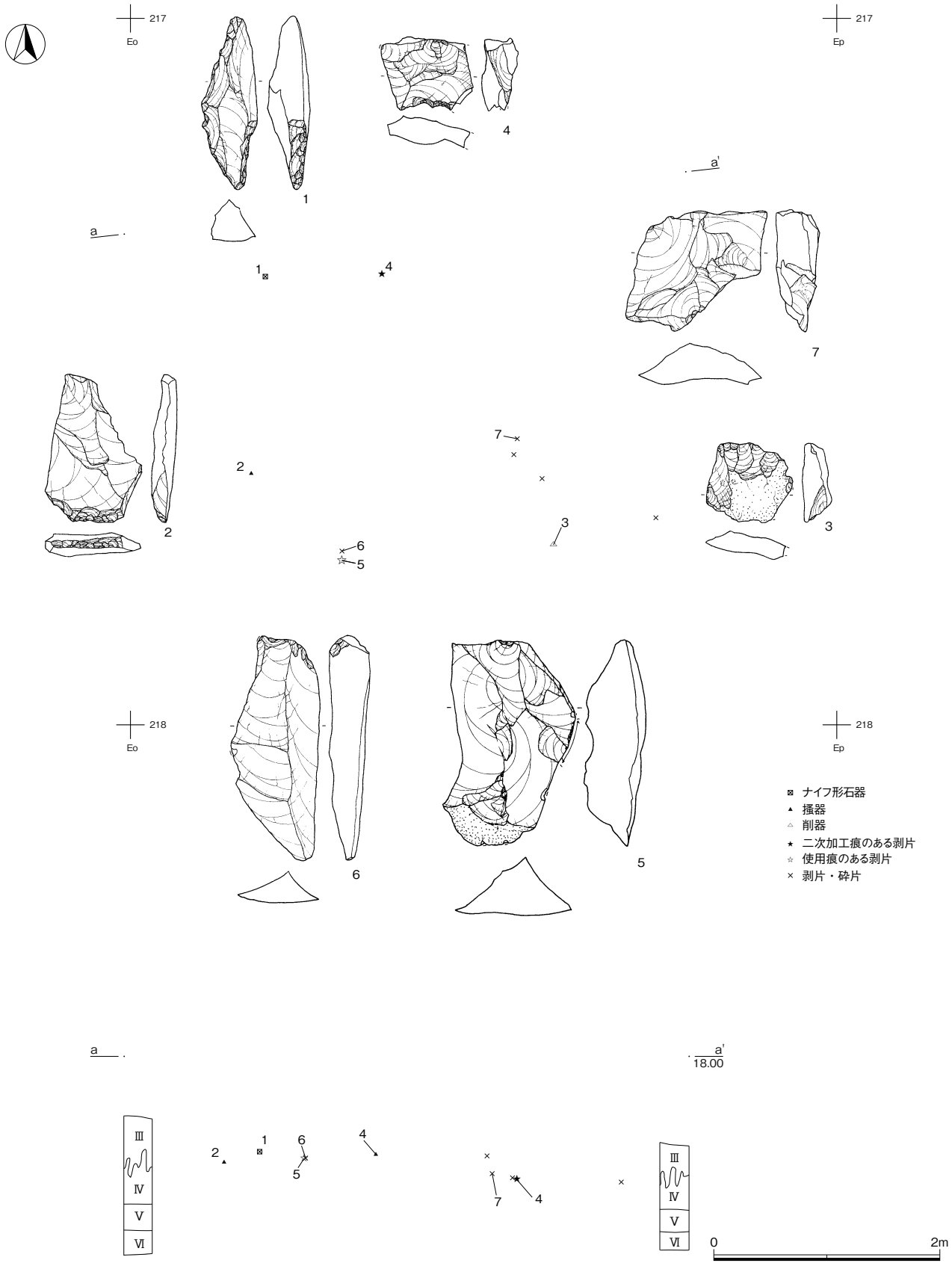


T.P.西壁柱状図

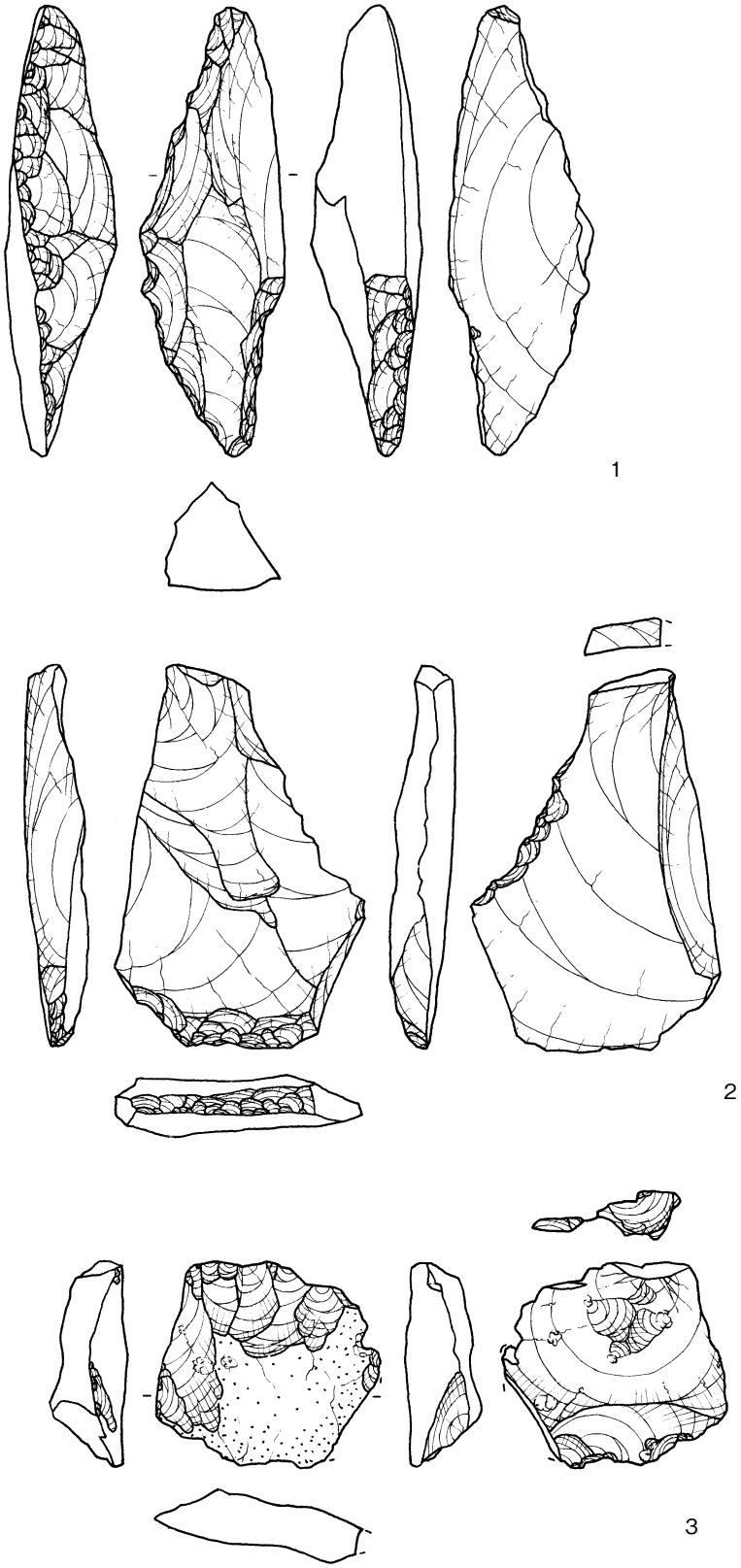


T.P.北壁柱状図

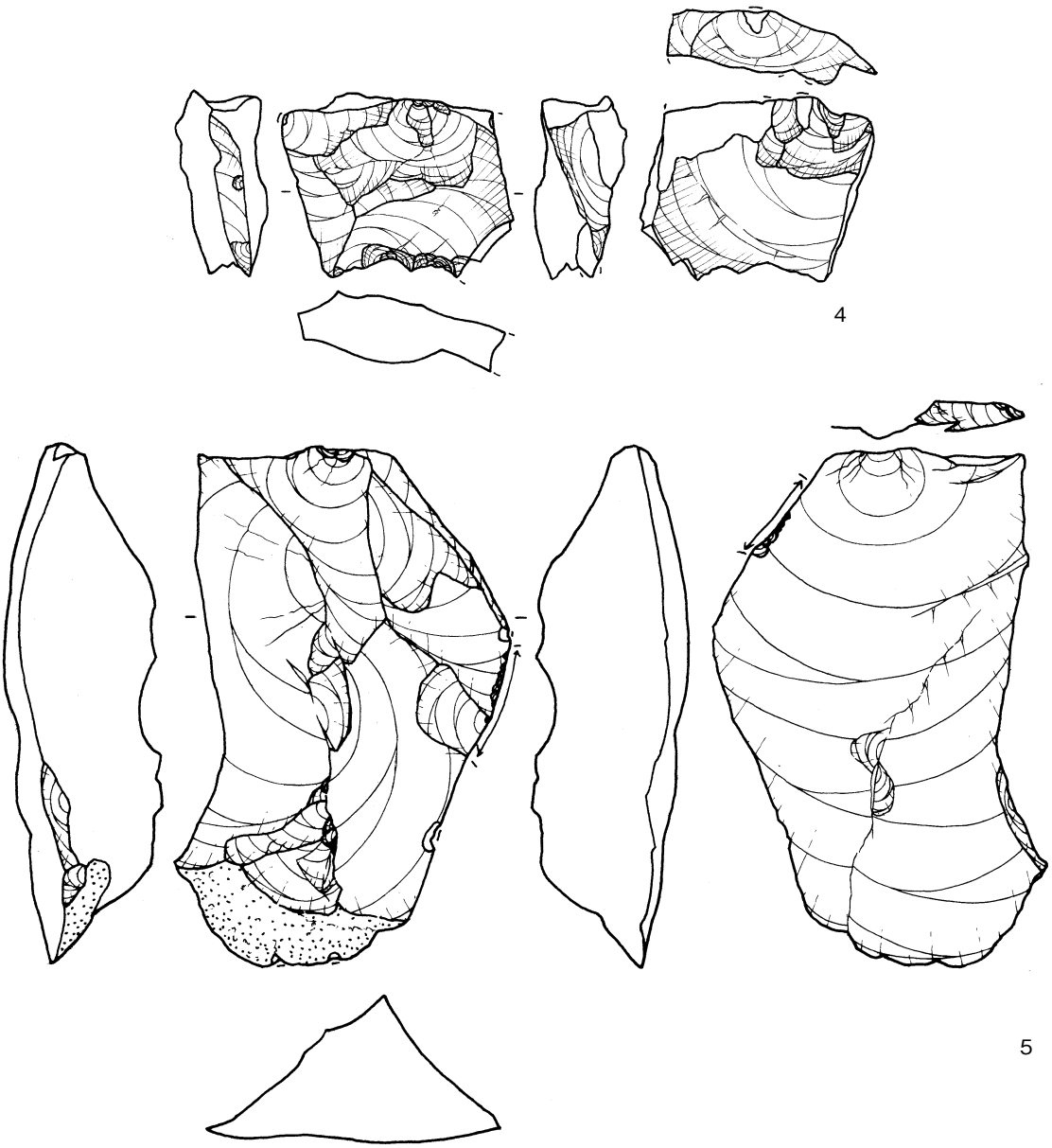
Ⅲ-2図　ローム層堆積図


217
Eo
217
Ep
a
a'
1
2
3
4
5
6
7
218
Eo
218
Ep
ナイフ形石器
掻器
削器
二次加工痕のある剥片
使用痕のある剥片
剥片・砕片
18.00
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
0
2m

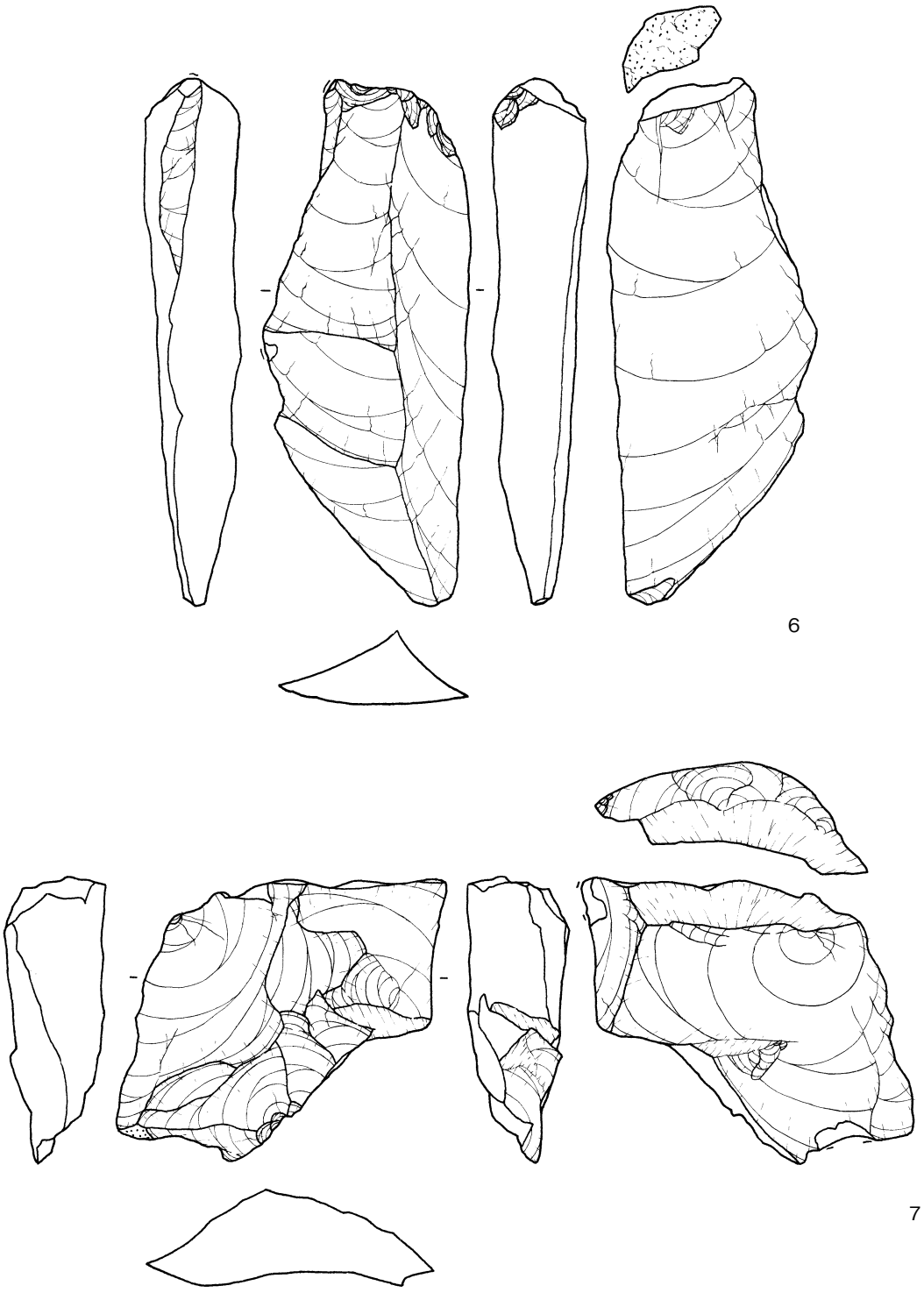
Ⅲ-３図　第１ブロック



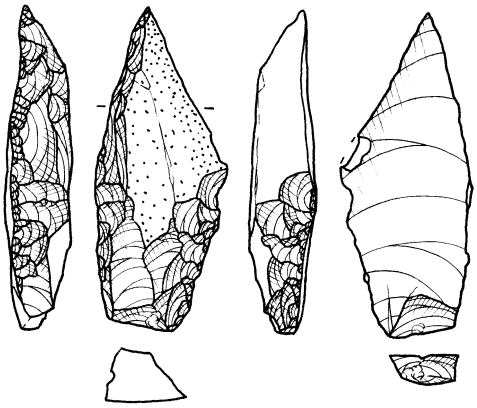
Ⅲ-4 図　第１ブロックの出土石器（１）



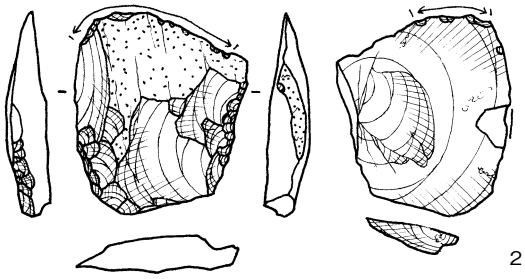
Ⅲ-5図　第1ブロックの出土石器（2）



Ⅲ-６図　第１ブロックの出土石器（３）



1



2

Ⅲ-7図　その他の出土石器

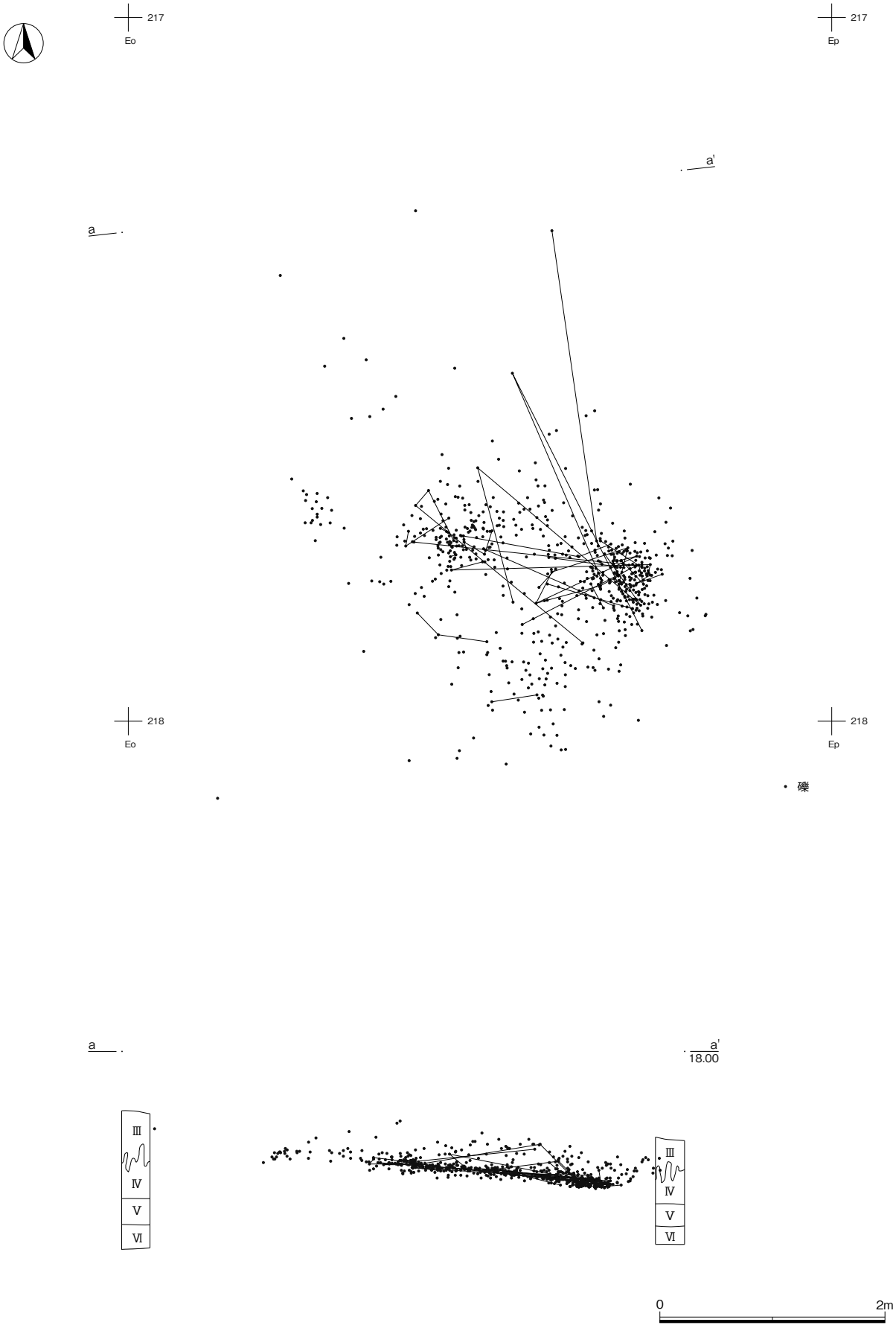
Ⅲ－1表　出土石器組成表

	ナイフ形石器	槍先形尖頭器	掻器	削器	彫器	敲石	磨石	ドリル	ピエス・エスキーユ	R・F	U・F	原石	石刃・折石刃	剥片・砕片	石核	合計
第Ⅰ文化層	1		1	1						1	1		1	4		10
その他の石器	2															2
合　計										1	1		1	4		12

Ⅲ－2表　石器観察表

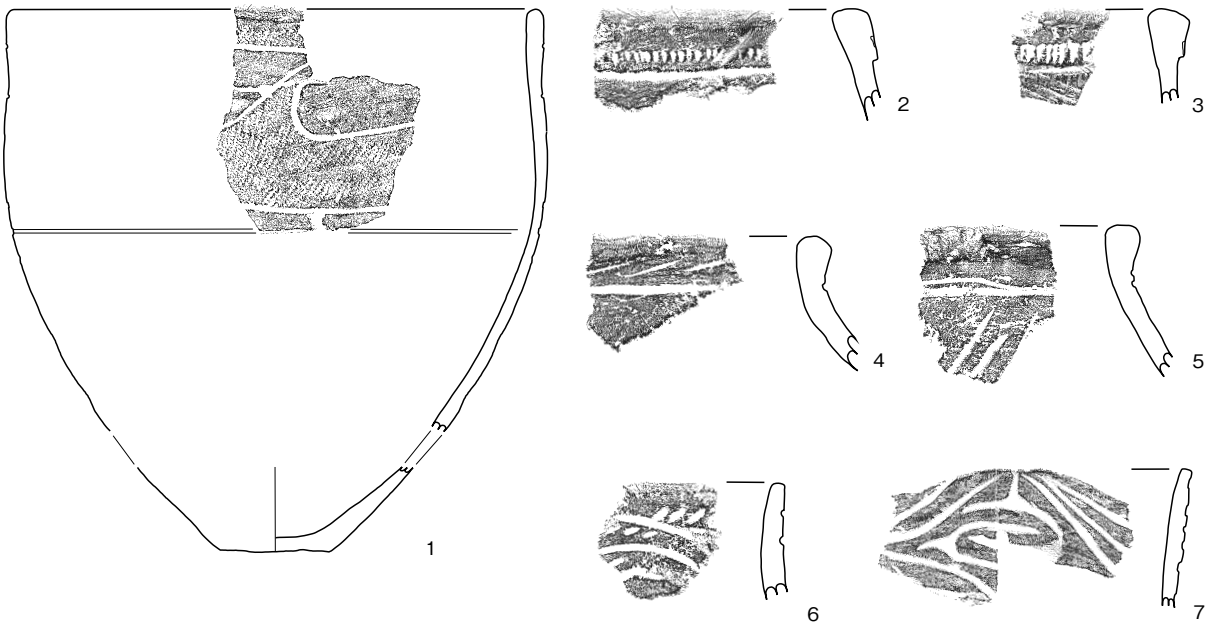
図版番号	文化層	ブロック	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	個体別No.	備考
Ⅲ－4図1	Ⅰ	1	ナイフ形石器	61.4	19.5	15.10	13.0	G安山岩	個体1	
Ⅲ－4図2	Ⅰ	1	掻器	52.0	33.8	0.89	13.1	ホルンフェルス	個体5	
Ⅲ－4図3	Ⅰ	1	削器	27.6	29.9	10.80	7.0	黒曜石	個体3	
Ⅲ－5図4	Ⅰ	1	R・F	25.6	32.8	13.10	9.0	黒曜石	個体4	
Ⅲ－5図5	Ⅰ	1	U・F	72.6	46.7	21.70	56.5	チャート	個体6	
Ⅲ－6図6	Ⅰ	1	剥片	79.2	31.0	14.10	27.1	G安山岩	個体2	石刃
Ⅲ－6図7	Ⅰ	1	剥片	43.0	49.2	15.40	24.5	チャート	個体6	
－	Ⅰ	1	剥片	15.8	14.0	0.74	0.7	チャート	個体6	
－	Ⅰ	1	剥片	34.6	38.5	16.10	13.9	チャート	個体6	
－	Ⅰ	1	剥片	29.0	21.7	0.96	3.3	チャート	個体7	
Ⅲ－7図1			ナイフ形石器	43.5	17.2	0.88	5.4	黒曜石	個体8	近世遺構覆土出土
Ⅲ－7図2			ナイフ形石器	26.5	22.1	0.57	3.0	黒曜石	個体9	第1試掘坑出土

略号凡例　G安山岩：ガラス質黒色安山岩　R・F：二次加工痕のある剥片　U・F：使用痕のある剥片



Ⅲ-8図　第１号礫群

Ⅲ-9図　縄文土器出土平面･垂直分布図



Ⅲ-10 図　縄文時代の遺物（スケール、1 は 1/4、2 ～ 7 は 1/3）

第Ⅲ章　江戸時代の遺構

本地点から出土した江戸時代の遺構は、22基である。内訳は、井戸2基、溝1基、土坑11基、ピット8基であった（Ⅲ－11図、Ⅲ－3表）。

SK1（遺構Ⅲ－12図、遺物Ⅲ－16図）

調査区南西側Em219、En219区で確認された円形の土坑である。南西側でSK8と重複しており、新旧は本遺構が新である。

遺存している規模は、東西240cm、南北220cm、確認面からの深さは最大140cmを計測するが、遺構が斜面に位置していたため確認時に上部を削り、本来の遺構は、図化した規模より一回り大きい。覆土は9層に分層されるが、いずれもしまりのある粒子の細かい土である。やや凹凸のある鍋底状を呈する坑底から、壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物は、17世紀前半の陶磁器、土器、金属製品、石製品がコンテナ箱で1箱出土している。

SP3（遺構Ⅲ－12図、遺物Ⅲ－16図）

調査区南西側Em219区で確認された円形のピットである。西側でSK2と重複しており、新旧は本遺構が旧である。遺存している規模は、径30cm、確認面からの深さは15cmを計測する。壁、坑底はやや凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。

遺物は、17世紀中葉の陶磁器が少量出土している。

SK6（遺構Ⅲ－13図、遺物Ⅲ－16、17図）

調査区西側Em217、Em218、En217、En218区で確認された長楕円形の土坑である。遺構の東側でSK7、SK15と重複しており、新旧は本遺構が新である。

遺存している規模は、東西240cm、南北640cm、確認面からの深さは最大180cmを計測する。覆土は4層に分層される。最下層はロームブロック層であるが、上位3層はしまりのある粒子の細かい土である。壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。

遺物は、17世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品がコンテナ箱で1箱出土している。

SK8（遺構Ⅲ－13図、遺物Ⅲ－18図）

調査区南西側Em219、Em220、En220区で確認された楕円形の土坑である。遺構の北東でSK1、北西でSE9、南でSK10と重複しており、新旧は全ての遺構より旧である。遺存している規模は、東西250cm、南北510cm、確認面からの深さは最大60cmを計測する。壁や坑底は、凹凸を有し、壁は坑底から緩やかに立ち上がっている。

遺物は、17世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品がコンテナ箱で1箱出土している。

SE9（遺構Ⅲ－14図、遺物Ⅲ－18図）

調査区西側Em219区で確認された円形を呈する井戸である。調査した深さでは井戸側は確認できなかった。遺構の南東側でSK8と重複しており、新旧は本遺構が新である。規模は、東西140cm、南北150cm、深さは調査を行った確認面より160cm以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。本遺構は、位置から「江戸御上屋敷絵図」（金沢市玉川図書館蔵）に描かれた奥御殿内の井戸に対比できる。

遺物は、19世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、ガラス製品がコンテナ箱で1箱出土している。

SK10（遺構Ⅲ－14図、遺物Ⅲ－19図）

調査区南西側Em220区で確認された上部円形、坑底隅丸方形を呈した土坑である。遺構の北側でSK8と重複しており、新旧は本遺構が新である。確認面の規模は、東西180cm、南北190cm、坑底の規模は東西80cm、南北は110cm、確認面からの深さは最大170cmを計測する。壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。坑底東側には東西30cm、南北60cm、深さ20cmの長方形を呈するピットが確認されている。覆土は5層に分層される。

遺物は、17世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品がコンテナ箱で1箱出土している。

SE13（遺構Ⅲ－15図、遺物Ⅲ－19図）

調査区南側En220、En221区で確認された円形を呈する井戸である。調査した深さでは井戸側は確認できなかった。遺構の北側でSK14、南側でSD22と重複しており、新旧は不明である。規模は、径160cm、深さは調査を行った確認面より100cm以上あった。安全上の理由で坑底までの調査は行っていない。井戸の規模から17世紀後半以降の鑿井と推定している。覆土は調査を

行った深さまでは、暗茶褐色土単層である。遺構の壁は、平滑に調整されている。本遺構はその位置から「御上屋敷御殿閣図」（前田育徳会所蔵）に描かれた奥御殿の井戸に比定できる。

遺物は、17 世紀前～後半の陶磁器・土器を中心にコンテナ箱で 1 箱出土しており、上記絵図面との年代的対比から、元禄 16（1703）年の火災による廃棄と推定される。

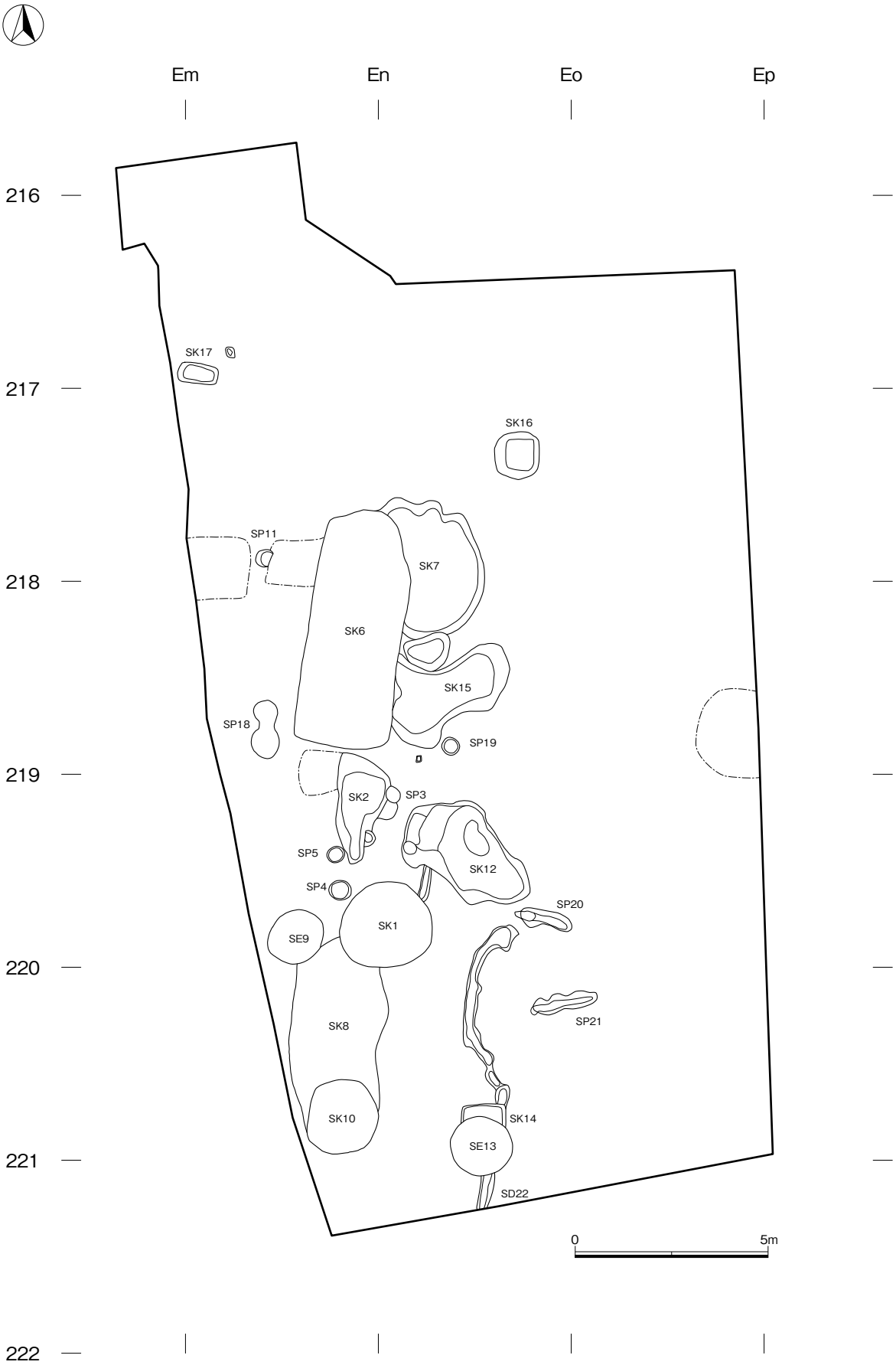
SP18（遺構Ⅲ－ 15 図）

調査区西側 Em218 区で確認された柱痕を伴ったピットである。ピットは南北に約 50cm 離れて柱痕と思われる腐食土が確認され、実際は 2 基の連続したピットの可能性が高い。遺存している規模は、北側のピットは径 60cm、確認面からの深さは 45cm、南側は東西 75cm、南北 85cm、深さ 55cm を計測する。壁は坑底から垂直に立ち上がっている。

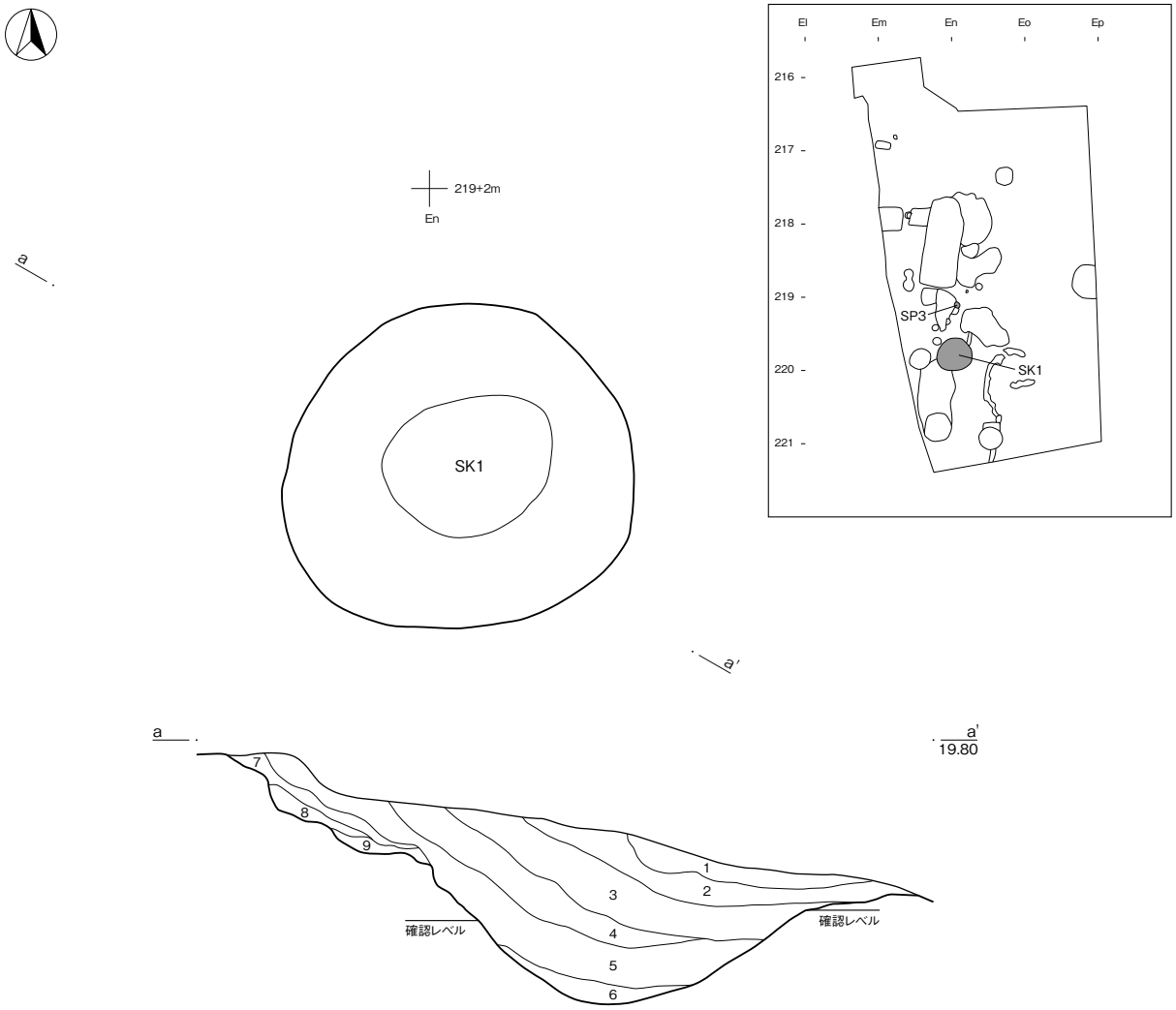
遺物は、陶磁器の小片が微量出土している。

Ⅲ－３表　薬学部資料館地点遺構一覧

種別	番号	グリッド	年代	遺構図版（Ⅲ−@）	遺物図版（Ⅲ−@）	切り合い	備考
SK	1	Em219･En219	17前	Ⅲ−12	Ⅲ−16	1>8	
SK	2	Em218･Em219･En218･En219	17後			2>3	
SP	3	En219	17中	Ⅲ−12	Ⅲ−16	2>3	
SP	4	Em219					
SP	5	Em219					
SK	6	Em217･Em218･En217･En218	17前	Ⅲ−13	Ⅲ−16、17	6>7、6>15	
SK	7	El217･El218	17?			6>7	
SK	8	Em219･Em220･En220	17前	Ⅲ−13	Ⅲ−18	1>8、9>8、10>8	
SE	9	Em219	19前	Ⅲ−14	Ⅲ−18	9>8	江戸御上屋敷絵図にあり
SK	10	Em220	17前	Ⅲ−14	Ⅲ−19	10>8	
SP	11	Em217					
SK	12	En219	17?				
SE	13	En220･En221	17後	Ⅲ−15	Ⅲ−19	14、22と重複	殿閣図にあり
SK	14	En220				13と重複	
SK	15	En218	17?			6>15	
SK	16	En217	17中				
SK	17	El216･Em216	?				
SP	18	Em218	?	Ⅲ−15			柱痕あり
SP	19	En218					
SP	20	En219					
SP	21	En220･Eo220					
SD	22	En221				13と重複	

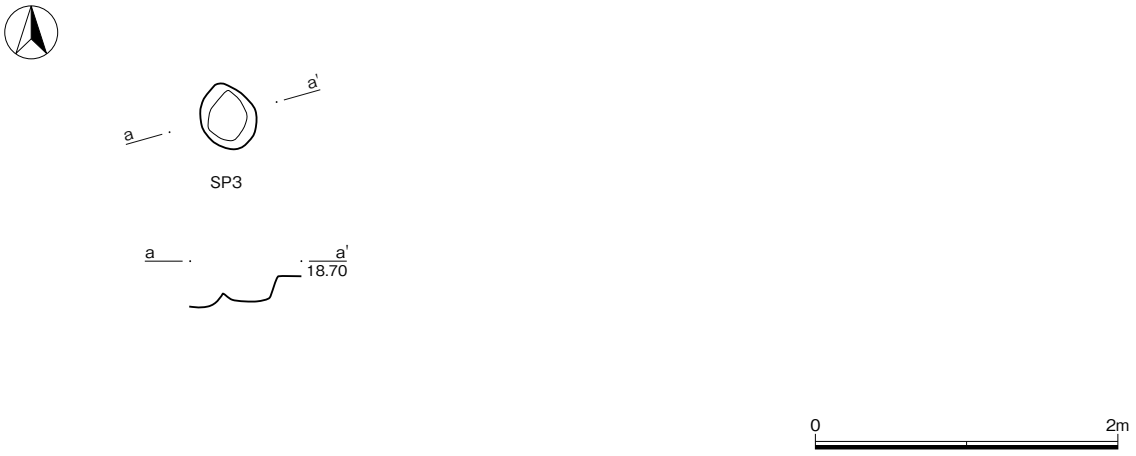


Ⅲ-11図　薬学部資料館全体図

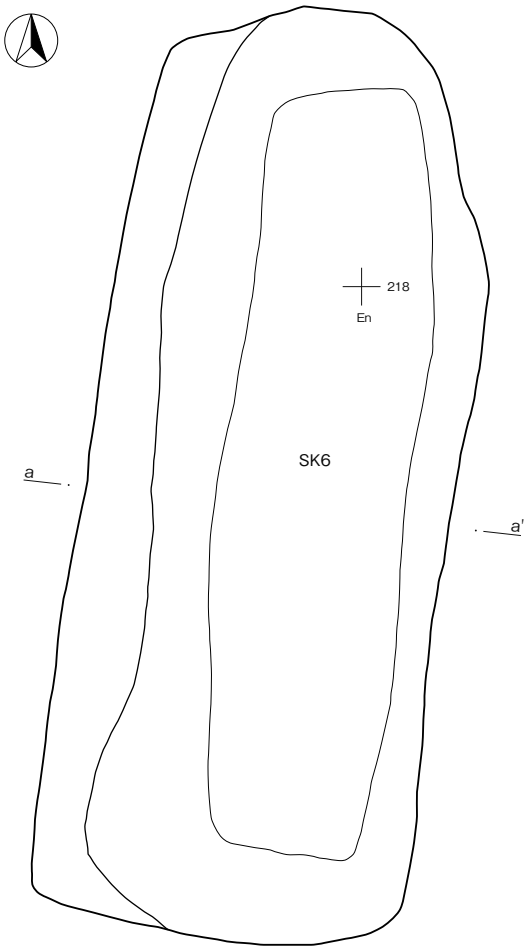


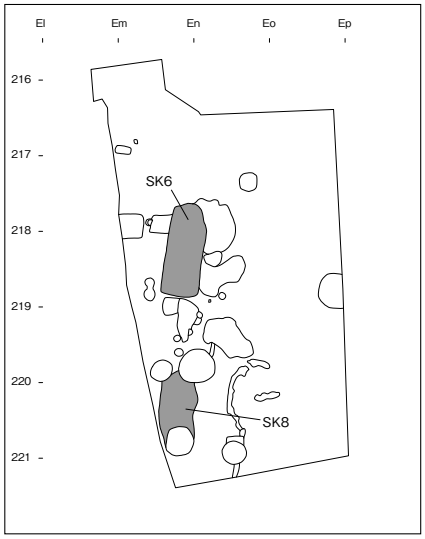
SK1

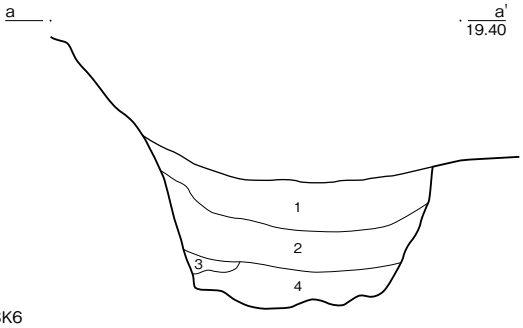
1	黒褐色土	（ローム粒・黒色土粒含）
2	暗褐色土	（褐色土粒主体、黒色土粒含）
3	暗褐色土	（黒色土ブロック・褐色土ブロック含）
4	黒褐色土	（暗褐色土ブロック主体、褐色土粒含）
5	黒褐色土	（暗褐色粘土粒・炭化物粒・褐色土粒含）
6	暗黄褐色土	（ロームブロック主体、暗褐色土粒含）
7	褐色土	（ローム粒・炭化物粒含、小円礫少含）
8	暗黄褐色土	（ローム粒・小円礫含）
9	暗褐色土	（ローム粒・炭化物粒含、焼土粒少含）



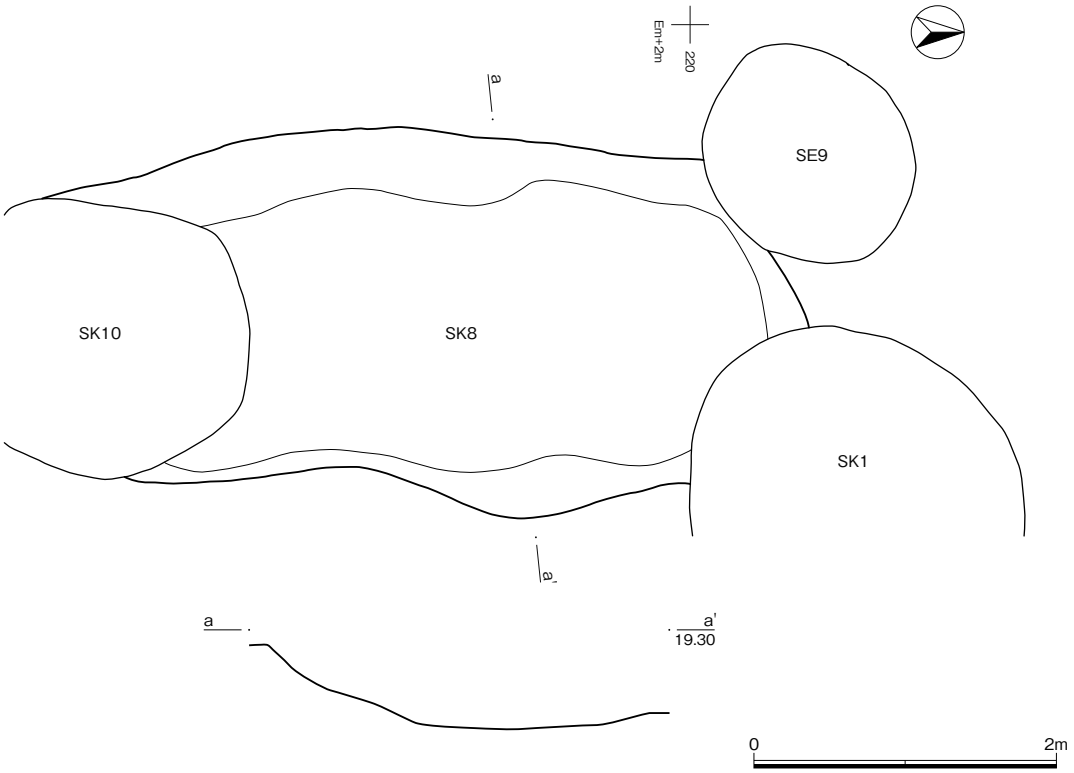
Ⅲ-12図　SK1、SP3



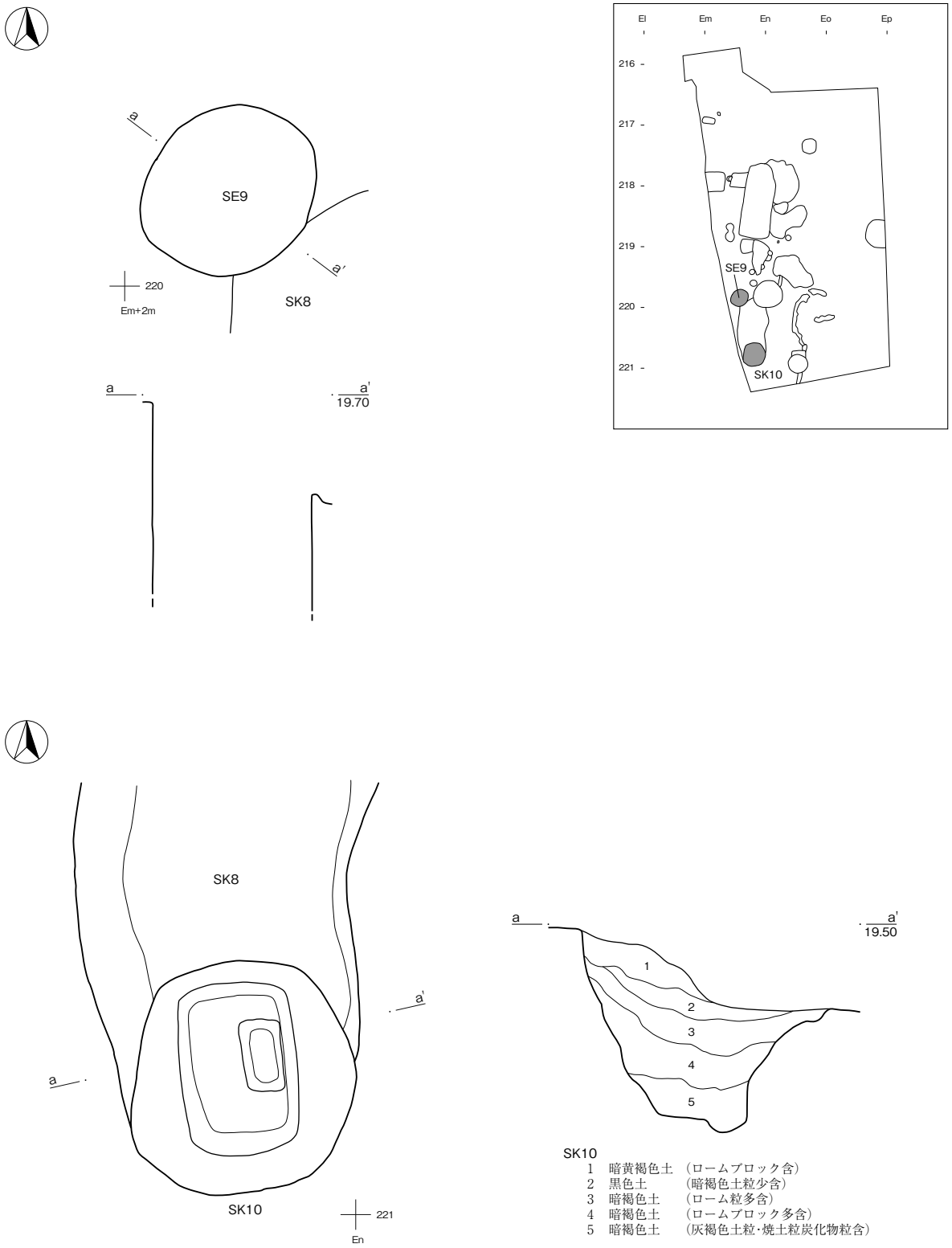




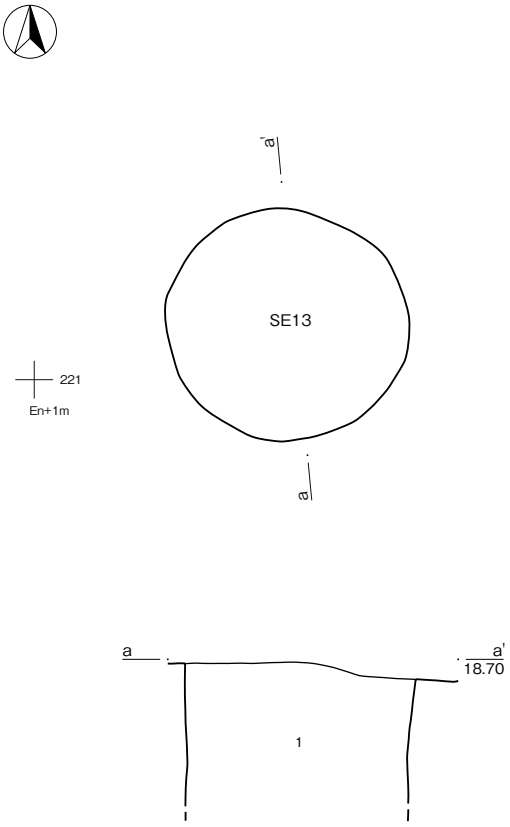
SK6
1　暗褐色土　（褐色土粒含、ローム粒・淡褐色粘土粒・小円礫少含、粘性強）
2　黒褐色土　（ローム粒微含）
3　黒褐色土　（ローム粒微含）
4　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、暗褐色土少含）

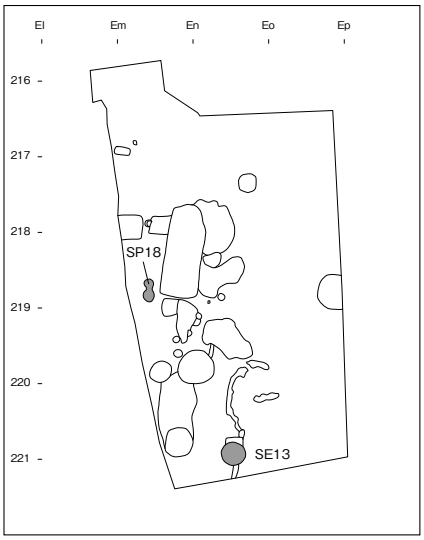


Ⅲ-13図　SK6、SK8

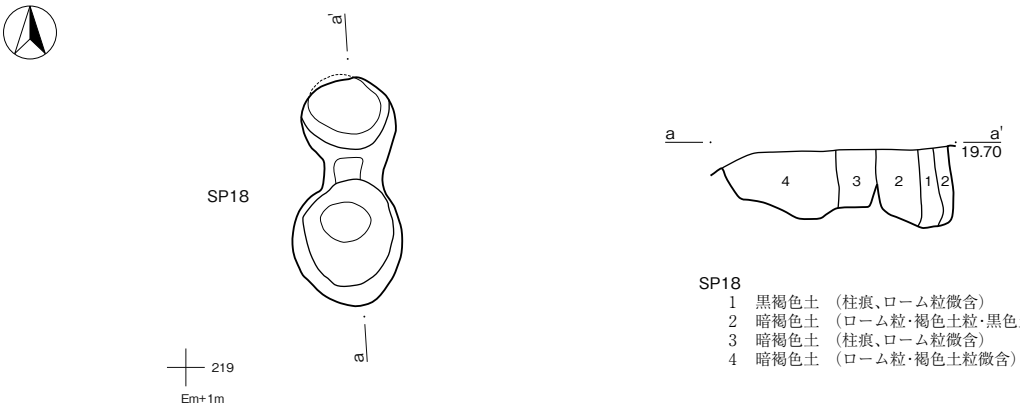


Ⅲ-14図　SE9、SK10





SE13
1　暗茶褐色土　（ロームブロック･礫含）



SP18
1　黒褐色土　（柱痕、ローム粒微含）
2　暗褐色土　（ローム粒･褐色土粒･黒色土粒含）
3　暗褐色土　（柱痕、ローム粒微含）
4　暗褐色土　（ローム粒･褐色土粒微含）

0　2m

Ⅲ-15図　SE13、SP18

第Ⅳ章　江戸時代の遺物

第１節　人工遺物

本地点からはコンテナ総数、約 11 箱の遺物（磁器・陶器・土器・瓦・金属・その他）が出土している。全体的な遺物量は少ない。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）を基に作成した最新バージョン（分類 Ver.4）に準拠している（以降、「東大分類」と略す）（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。瓦の分類は加藤氏の分類（1992　加藤）に拠っている。遺跡における分類は数量分析により文化・社会・経済・年代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数 100 個体以上）を必要とするが、本地点で推定個体数 100 個体以上の遺物量を有する遺構が検出されなかったため、個別の遺物から「東京大学構内の遺跡における年代的考察」（堀内 1997）、「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（2）」（大成 2011）を基に年代推定を行った。

遺物量は少ないが、天和 2（1682）年の火災以前の加賀藩邸下屋敷時代の遺構が検出されており、17 世紀前半段階の良好な資料である。

SK1（Ⅲ－ 16 図）

いわゆる初期伊万里の肥前系染付碗は東大編年Ⅱ期の基準資料で 17 世紀前半に比定される。

1 は肥前系染付碗。いわゆる初期伊万里の碗で JB-1-a に分類される。幅広「U」字高台で、高台畳付は数回に分けて削り、丸みを帯びている。畳付には砂が付着している。大振りで、高台高は高い。見込みと高台内中央に小さな突起が見られる。

2 は土器の皿。胎土が橙色のかわらけで DZ-2-a に分類される。外面は滑らか、内面立ち上がり際を指で押さえている。器高は低めで、底径は大きい。口縁部スス付着。4 寸。

3 は粘板岩製の碁石である。緻密で良質な黒石。那智黒石か。径 2.1cm。厚さ 0.4cm。

SP3（Ⅲ－ 16 図）

1 は肥前系磁器碗。いわゆる初期伊万里で JB-1-a に分類される。「U」字高台で、畳付は数回に分けて丸く削っている。畳付には砂が付着している。高台内の抉りは深く、中央部は肥厚して突起状に残る。高台内施釉。外面の釉は気泡の痕が多く見られ、滑らかではない。東大編年Ⅱ期に多く見られるもので、17 世紀前半に比定される。

SK6（Ⅲ－ 16、17 図）

陶器は絵唐津や長石釉ヒダ皿などが出土し、かわらけはいわゆる「江戸式」以前のかわらけである。17 世紀前半に比定される。

1 ～ 5 は瀬戸・美濃系陶器である。1、2 は灰釉丸碗で TC-1-aa に分類される。高台断面は畳付に近い部分がやや肥厚している。畳付はナデにより丸みを帯びる。高台内には指ナデの痕が残る。1 の体部はやや開き気味に立ち上がる。内外面貫入。2 の体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面にはロクロ目が見られる。高台周辺は露胎である。3 は鉄釉天目碗で TC-1-a に分類される。体部欠損。体部を丁寧に打ち欠いて円盤状にしており、底部を二次利用していたと思われる。4 は鉄釉丸碗で TC-1-ag に分類される。体部内外面灰釉流し掛け。体部はやや外反気味に立ち上がる。高台露胎。5 は灰釉坏である。TC-6 に分類される。内面には赤色遺物（漆ヵ）が薄く膜状に付着している。体部はやや開き気味に立ち上がる。高台周辺は露胎である。6 は肥前系陶器絵唐津葦文皿である。TB-2 に分類される。鉄絵。透明釉。体部が屈曲して上に伸びている。高台内には円錐状の突出した削り残しが見られる。高台露胎。高台は高台脇と高台の区別が明瞭で、高台内は高台脇よりやや深く新しい様相を示す。7 は瀬戸・美濃系長石釉ヒダ皿。TC-2 に分類される。型打成形。腰が張り口縁に向かって外反している。内外面貫入。高台内施釉。目痕は確認できなかった。8 は四耳壺。中国南部のものか。TA-15 に分類される。肩部周辺のみ残存しており、肩はやや張っている。耳部欠損、接着部分のみ 2 箇所残存。粘土紐輪積み、胎土は練り混みのようになっており均一ではない。φ 2mm 白色粒子が混入、赤黒粒子、白色粘土少量混入。胴部は外面は横方向ヘラ削り。頸部内面は回転ナデ。外面は褐釉。釉は非常に薄く釉縞が認められる。内面は頸部まで褐釉が掛けられている。

9 ～ 12 は土器の皿である。9 はやや外反しているが、口縁部で内湾する。糸切り痕は糸切りの間隔が広い。見込みには凹凸がある。DZ-2-a に分類される。外面立ち上がり際は角張っている。内面立ち上がり際を指で押さ

えている。胎土は橙色。10 は体部は内湾気味に立ち上がる。DZ-2-a に分類される。外面は滑らか、内面立ち上がり際を指で押さえている。底部裏は右回転の離れ糸切り痕。胎土は橙色。11 は口径と底径の差が小さいかわらけでDZ-2-k に分類される。胎土は橙色で小型。厚手。体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部裏糸切り痕は右回転。12 は口径と底径の差が小さいかわらけで、やや内湾しており、底裏に糸切り痕があるがはっきりしない。胎土は橙白色。DZ-2 に分類される。胎土が粗く、赤色粒子と黒色粒子を含む。厚手、小振り。東上野から北武蔵北部に分布するかわらけの可能性がある。

13 は梅鉢文菊瓦である。梅鉢紋には笵に付いた傷が見られる。同じ箇所に傷の付いた同笵の菊瓦が東京大学本郷構内の遺跡の複数の地点で確認されている。医学部附属病院入院棟 A 地点の D1 層から D4 層の間の遺構や包含層から 7 点、SK3 からも同笵の菊瓦が出土している（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。また、御殿下記念館地点 532 号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）、寛永 14（1637）年の墨書のあるかわらけと共伴している医学部研究棟地点 SK4553（東京大学埋蔵文化財調査室 2019）から同笵の梅鉢紋菊瓦が出土している。寛永 6（1629）年の御成御殿の瓦と推定されている。

14 は粘板岩製の硯である。四隅が丸く削り出されている。4 寸×2 寸。軟質だったためか、陸が大きく磨り減って溝状になっている。

SK8（Ⅲ－ 18 図）

肥前系高台無釉磁器碗や瀬戸・美濃系天目碗が出土している。かわらけはいわゆる「江戸式」以前のかわらけで、17 世紀前半に比定される。

1 は肥前系磁器碗である。高台無釉で JB-1-b に分類される。鉄釉灰釉掛け分け。内面は口縁部以外に透明釉が掛けられ、上から口縁部のみ鉄釉が掛けられている。1640 年代を中心に生産されている。高台高は高くシャープに削り出されている。2 ～ 4 は瀬戸・美濃系陶器である。2 は鉄釉天目形碗で TC-1-a に分類される。口縁部の立ち上がりは、短くない。輪高台。高台周辺は露胎である。3 は長石釉皿で TC-2-c に分類される。見込み、高台内に目跡 2 箇所ずつあり。底部内無釉。全面に貫入が見られる。4 は長石釉鍔皿で TC-2 に分類される。見込みには目跡 3 箇所あり。釉の表面に被熱によってざらつきがある。

5 は口径と底径の差が小さいかわらけで、胎土は橙色。DZ-2-k に分類される。やや内湾気味に立ち上がる。底面の糸切り痕は目が粗い。見込みには凹凸がある。外面立ち上がりは角張っており、内面立ち上がり際は指で押さえている。胎土は橙色。赤色粒子、黒色粒子、白色粒を含む。6 は DZ-2 に分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、内面立ち上がり際は工具で押えている。胎土は浅黄橙色。

7、8 は銅製品である。7 はキセルの雁首である。脂返しの湾曲は大きく、補強帯を有する首部の長いものである。火皿は器高が高い、腰の張らない碗形である。首部との接合部は細い。火皿の中に炭化物と思われる黒色の付着物あり。8 は頭部の平面形は隅丸方形。長さ 3.3cm。1 寸釘。

SE9（Ⅲ－ 18 図）

1 は瀬戸・美濃系灰釉陶器片口鉢で、TC-23-b に分類される。片口部欠損。見込みに目跡 2 箇所残存。底部露胎。口唇部は幅広になっている。

2 はガラスである。棒状で螺旋状に溝が刻まれている。白色。表面は白濁しており、部分的に銀化している。残長 3.1cm。尖端部のみ残存。鉛ガラスか。

SK10（Ⅲ－ 19 図）

高台無釉の碗は東大編年Ⅱ期の基準資料で 17 世紀前半に比定される。

1 は肥前系磁器染付碗である。高台無釉で、JB-1-b に分類される。見込みには焼成時の灰が付着している。口縁は歪んで楕円形を呈し、口径は 9.0cm ～ 10.2cm である。2 は瀬戸・美濃系陶器鉄釉天目碗で TC-1-a に分類される。口縁部の立ち上がりは、短い。内ぞり高台。高台周辺には鉄漿が掛けられている。口径 13.3cm と大振りである。見込みには、擦痕が多く見られる。

3 ～ 7 は土器の皿である。3、4 は DZ-2-a に分類される。3 は体部はやや内湾気味に立ち上がる。見込みには凹凸がある。外面立ち上がり際に部分的に腰折れ状痕や角張った箇所があり均一ではない。内面は黒色の油染みのようなものが付着している。底部裏に右回転糸切り痕がある。4 はやや反りぎみに立ち上がる。外面立ち上がり際は成形時に失敗してはみ出たものを補修したような痕が残る。底部裏に離れ糸切り痕がある。5 は口径と底径の差が小さいかわらけではあるが、器壁は薄く DZ-2-a に分類される。器壁はやや内湾しており、底部裏に右回転糸切り痕がある。胎土は橙色。赤色粒子混入。口唇部にはススが付着している。6 は口径と底径の差が小さいかわらけではあるが、器壁は薄く DZ-2-a に分類される。胎土は橙色。器壁はやや外反しており、底部裏に右回転糸切り痕がある。見込みには凹凸がある。赤色粒

子、黒色粒子が混入。7 は底部穿孔しており、DZ-2-i に分類される。赤色粒子、黒色粒子、白色粒子が混入。底部の孔は、中心を取って位置決めをしており、底部に刻線の痕が残る。

SE13（Ⅲ－ 19 図）

1 は肥前系磁器白磁鉢。高台断面が三角形で JB-5-f に分類される。内面陽刻文。体部下半は外面陽刻文。口縁部は型打ち成形により輪花になっている。器壁は薄い。17 世紀後半に比定される。

包含層（Ⅲ－ 20 図）

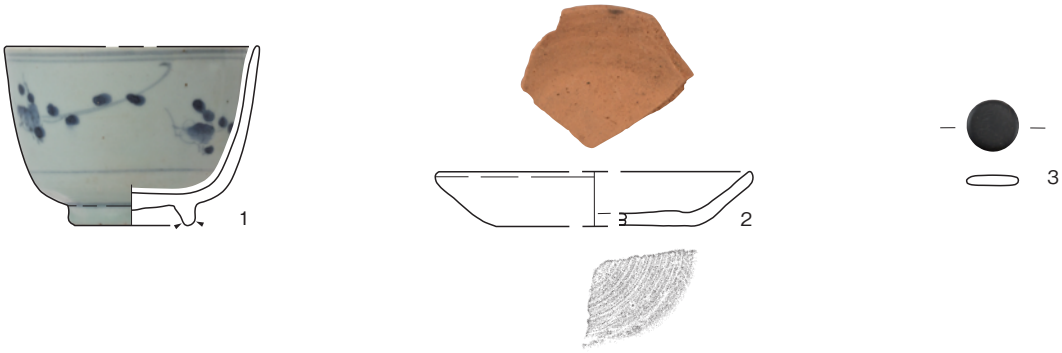
1 は肥前系磁器白磁。いわゆる初期伊万里で JB-1-a に分類される。高台断面は幅広の「U」字状。畳付は平らに整形されている。畳付には砂が付着している。高台高は高い。わずかに見込みには灰降りが見られる。2 は肥前系磁器白磁鍔皿で JB-2 に分類される。高台畳付露胎。畳付には砂が付着している。見込みには降灰が見られる。

3 は軟質施釉陶器。中国明代後期 16、17 世紀の華南地方で焼かれた三彩盤。TA-2 に分類される。外面には削りによる調整痕が見られる。白泥を用いて白化粧した後、緑釉を掛けている。胎土は、にぶい橙色。白色粒子がわずかに入る。4 ～ 6 は瀬戸・美濃系陶器である。4 は灰釉丸皿。TC-2-a に分類される。口唇部はわずかに外反する。碁笥底。高台内と見込みに目跡が 1 箇所ずつ残る。器高は低い。5 は志野織部皿で TC-2-s に分類される。長石釉、内面に鉄で菊花文が描かれている。外面は、口縁部の緑釉のみで体部は無釉である。6 は灰釉端反皿で TC-2-y に分類される。腰に丸みを帯びてから外反する。底部無釉。付け高台。見込み口縁立ち上がり際と口唇部に調整による沈線が見られる。

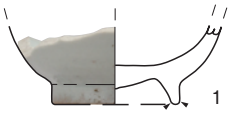
7 はてづくねの白色系かわらけ（東京大学埋蔵文化財調査室 2020）で、DZ-2-g に分類される。見込みには横方向のナデ。内面立ち上がり際にナデによる調整が明瞭に残る。胎土は、浅黄橙色で白色粒子、赤色粒子がわずかに入る。医学部附属病院地点の池出土の白色系かわらけに類似している（東京大学遺跡調査室 1990）。8 は口径と底径の差が小さいかわらけで、胎土は浅黄橙色。厚手、小振り。DZ-2 に分類される。やや内湾しており、底部裏には糸切り痕があるが明瞭ではない。見込み中央部に膨らみが見られる。焼成後に削った整形痕が見られる。蓋の可能性もある。胎土が粗く、赤色粒子と黒色粒子を含む。東上野から北武蔵北部に分布するかわらけの可能性がある。

9 は金箔平瓦。小口に金箔が貼られており、棟に使われた青海波瓦であろう。四角く加工して中を彫り込み、硯に転用しようとしている。使用されたかは不明。金箔瓦を硯に転用しようとした例は他にもある。

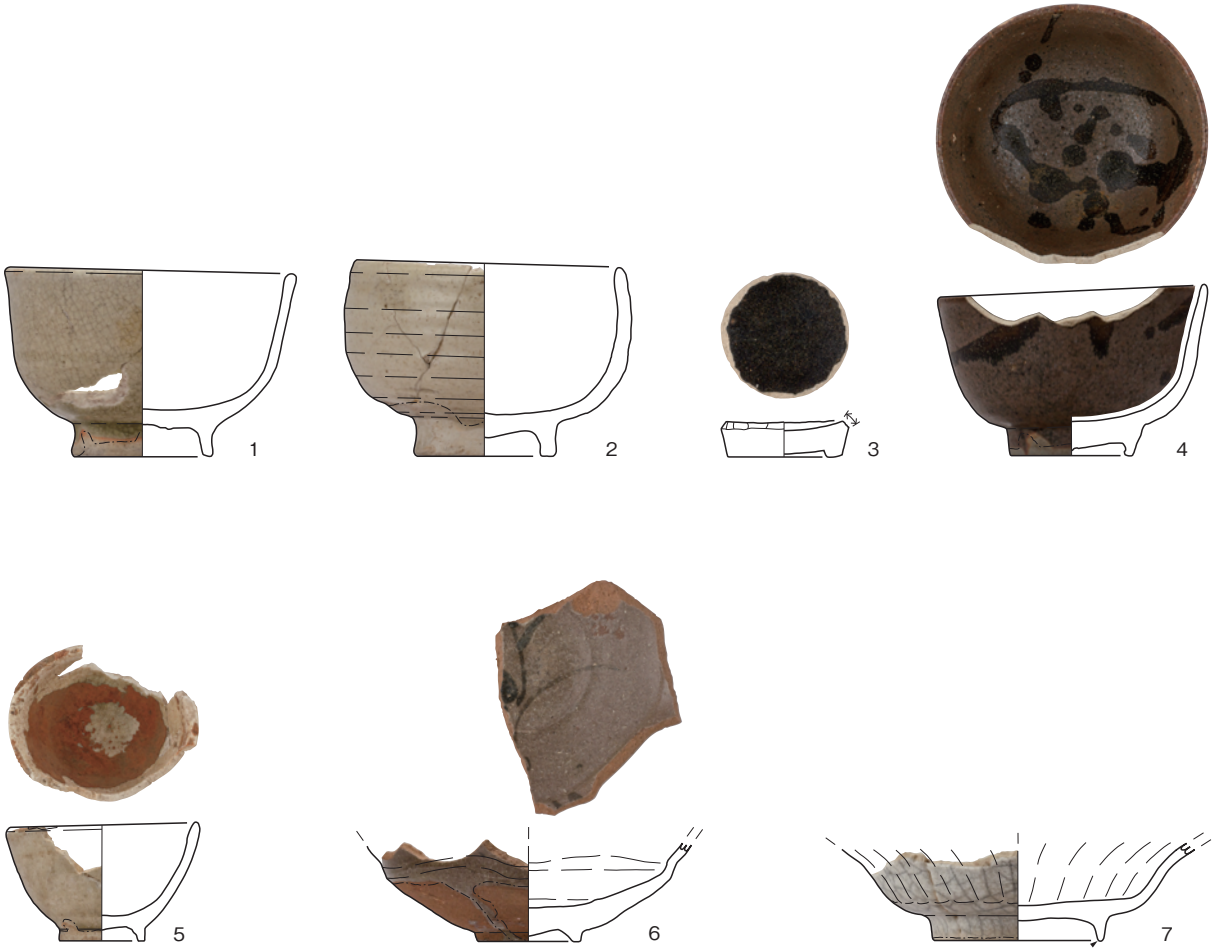
10 は粘板岩製の硯である。元々の硯が使えなくなったのであろう。海部を削り直して再利用している。11 は砥石。持ち砥。2 面使用している。実測図右下方から左上方にかけて摩耗している。



SK１

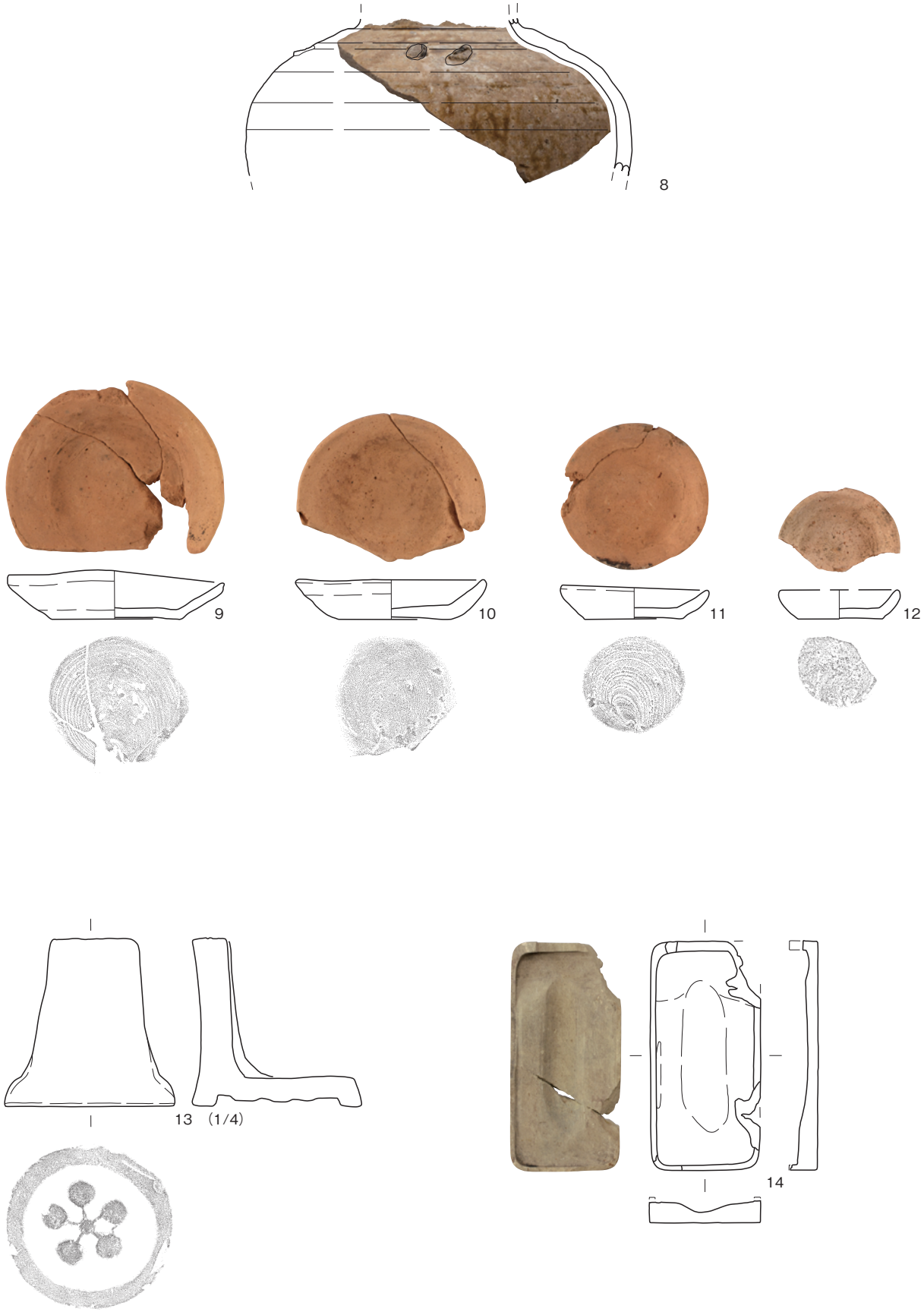


SP３

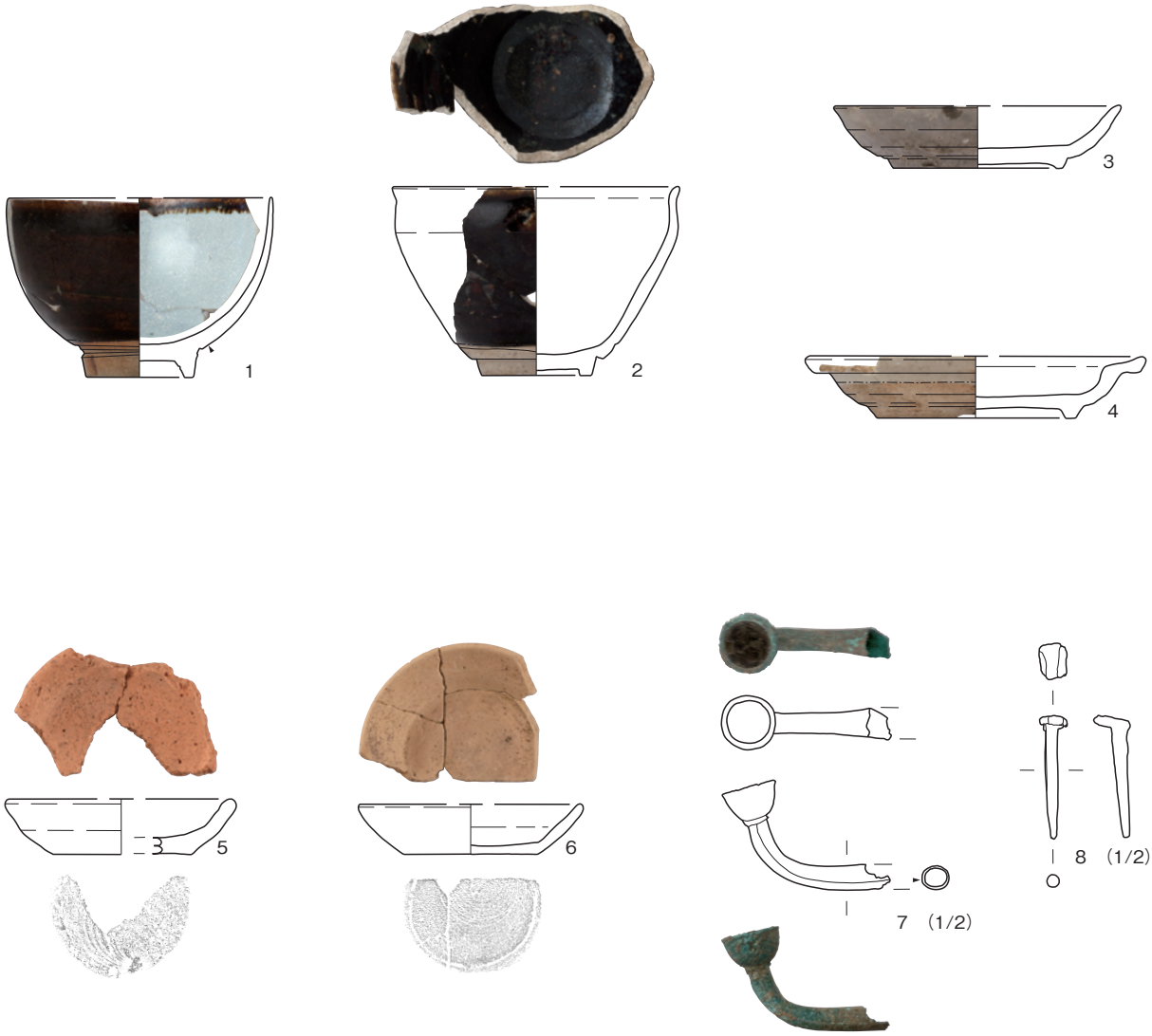


SK６（１）

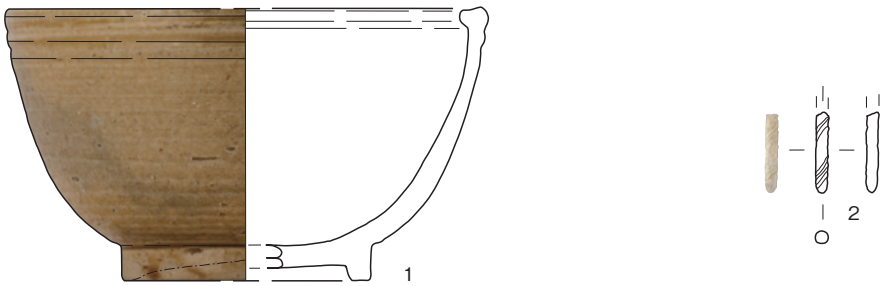
Ⅲ-16図　SK１、SP３、SK６（１）



Ⅲ-17図　SK6（2）

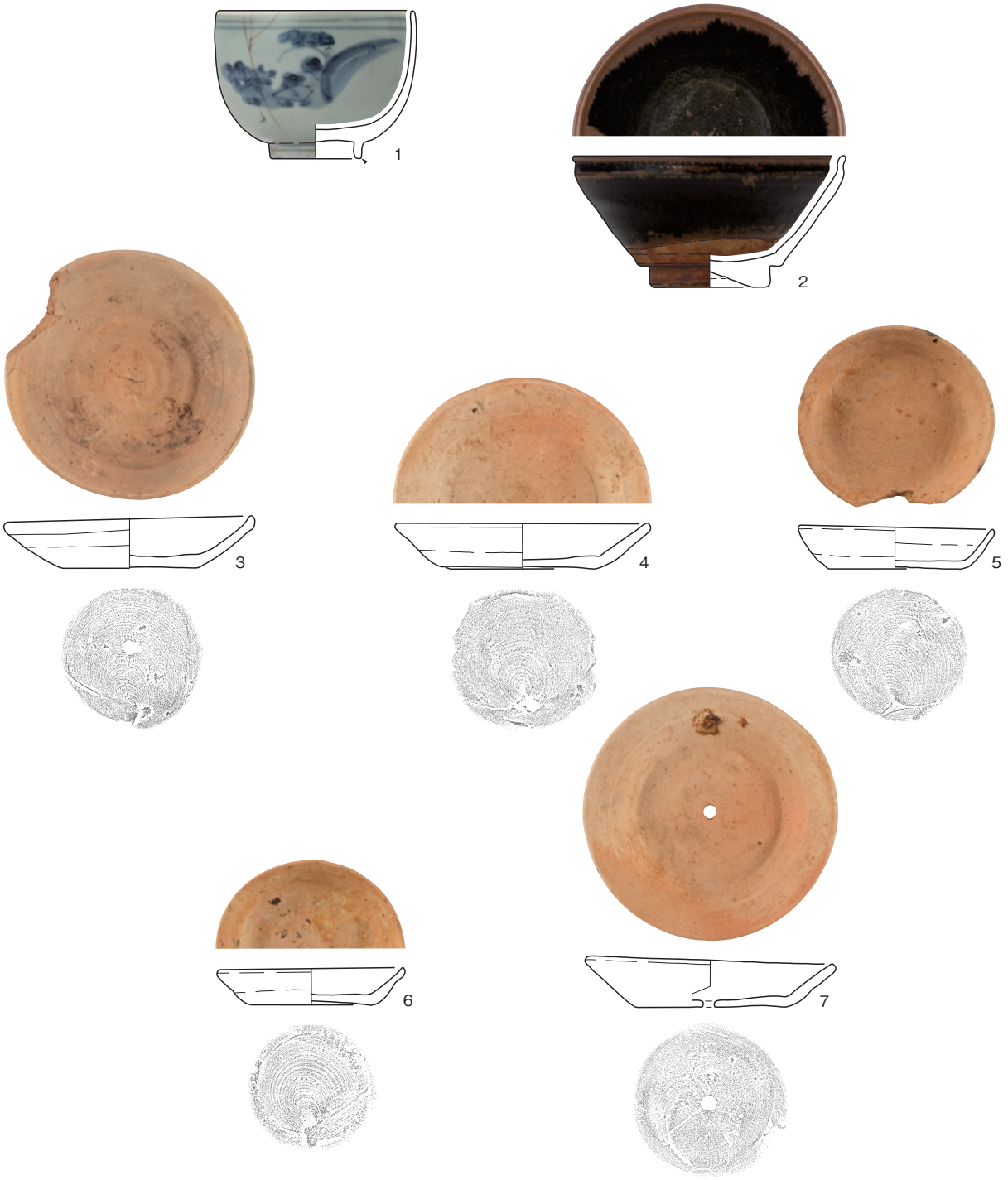


SK8



SE9

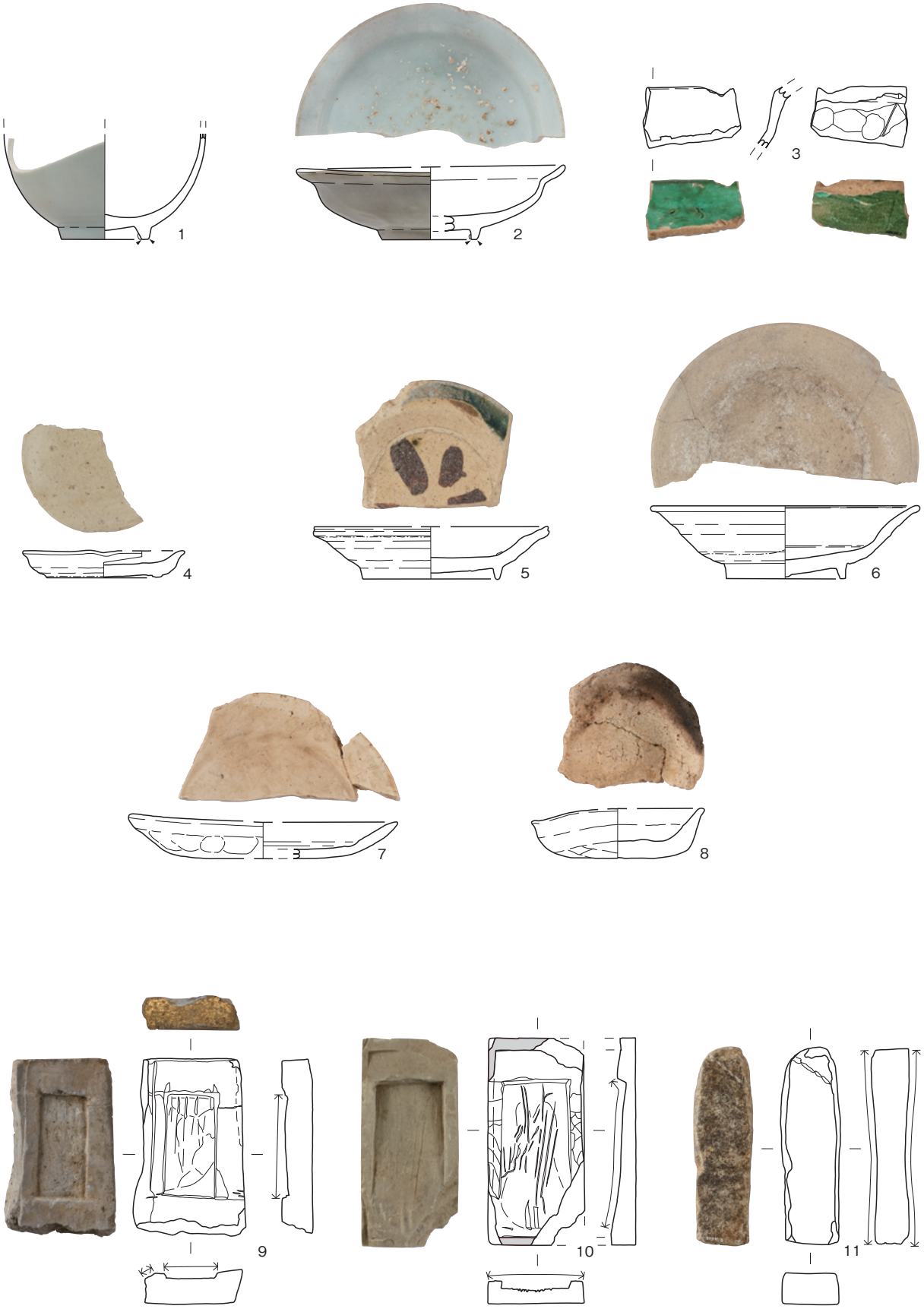
Ⅲ-18 図　SK8、SE9 出土遺物



SK10

SE13

Ⅲ-19 図　SK10、SE13



Ⅲ-20 図　遺構外

第２節　動物遺体

本調査地点で3種3点の貝類遺体のみが出土している。その分析結果はⅢ－４表を参照されたい。SE09 より出土しているハマグリとアカガイの腹縁部分には、共に剥き身作業の際のものと推測される欠損が認められる。

Ⅲ－4 表　薬学部資料館地点出土貝類遺体一覧

出土位置		種	左右	数	備考
北側0層	アカニシ	*Rapana venosa*		1	
SE09	アカガイ	*Anadara (Scapharca) broughtonii*		破片	腹縁部中央に2か所の欠損。内面に剥離。
SE09	ハマグリ	*Meretrix lusoria*	右	1	腹縁前端内面に剥離痕

Ⅲ－21 図　薬学部資料館地点出土貝類遺体

1．アカニシ，2．アカガイ（右殻），3．ハマグリ（右殻）［→: 人為的欠損］

Ⅳ　考　察

薬学部南館地点・薬学部資料館地点の成果と藩邸初期の景観

堀内　秀樹

はじめに

薬学部南館地点（以降、「南館地点」と略す）では、調査面積1,300㎡に対して確認された遺構は95遺構、薬学部資料館地点（以降、「資料館地点」と略す）では、調査面積540㎡に対して確認された遺構は22遺構であった。この量は、西に隣接する医学部教育研究棟地点（以降、「医研地点」と略す）の2,901㎡に対して2,470遺構と比べると非常に少ない。後述するように文献から確認される土地の履歴から推定すると両地点ともそれほど大きな違いはないことから、江戸時代中期以降の藩邸の地業、遺構、遺物の多くが近代以降に削平されてしまったと推定される。

この両地点は、医研地点と薬学系総合研究棟地点の中間に位置しているが、本地点を含めてこれらの地点は、天和2（1682）年以降の上屋敷期には表御殿から奥御殿まで含めた地域にあたり、藩邸、御殿空間を復元する際には重要である。このうち本報告の南館地点と資料館地点が、最も遺存状況が悪いことで、御殿全体の考古学的成果の詳細は、薬学系総合研究棟地点の報告に譲りたい。ここでは、両地点から確認された遺構、遺物の状況を隣接する医研地点との対比をしながら、藩邸初期を中心とした歴史的景観とその変遷に触れてみたい。

１．下屋敷時代前期

－元和2･3（1616･17）年～17世紀前半－

Ⅳ－１図は、本地点から確認された遺構を年代別に色分けしたものである。一覧して判るように、上屋敷時代の遺構（おおむね緑、青色に彩色）はごくわずかで、多くの遺構は下屋敷時代（赤、橙色に彩色）に該当している。このことは当該地点が、開発された時期に谷域を含んだ凹んだ土地であり、その当初より高い位置に居住空間が営まれており、その御殿建築のための盛土した生活面とそれに伴う遺構群が削平されたことによると考えている。調査では、こうした削平によって近世の遺構面が南館地点南域の一部を除いて検出されておらず、ほぼ全ての遺構がローム面で確認されている。

（１）遺構

①標高

本地点では、藩邸初期に遡る古い段階の遺構が多く確認された。出土遺物、遺構の構造から、加賀藩邸南域が拡張された明暦の大火（1657年）以前の廃棄と推定された遺構をⅣ－１図に示した（赤彩遺構）。まず、遺構の分布をみると南館地点南域に偏在するが、これは先般述べているように後世の削平によるものと考えられる。ただ、当該期と推定している南館地点南西側から検出されたSK58は移植穴で、その性格として大きな深度を有する遺構ではないことから、当該時期の生活面は確認されたレベル（21.3m）から上にはあるものの、それほど高い位置にはなかったと推定している。一方、当地点西側の医研地点で検出した藩邸最初期の生活面G面（ローム面）の標高は約22.0m、その上面F面の標高は約23.2mであり、当初の生活面は21.3mとその間であると言える。他方、谷頭が確認された南館地点北東側で確認された江戸時代最下層の標高は、19.9m付近であることから、同レベルで建築を行ったと仮定するなら最初期において少なくとも1.4m以上の盛土を行ったことになる。また、資料館地点東側では、地形が急激に落ち込んでおり、東壁にも遺構の痕跡は確認されていないことから、藩邸最初期の利用範囲は資料館地点のSK1、SK6、SK8、SK10と南北に連なる遺構群より西側であったと思われる。

②遺構の主軸

小川は本郷構内にある調査地点の本郷邸下屋敷時代の遺構主軸分析から、「下屋敷の段階では上屋敷に見られるような規制の強い空間軸は設定されていないことがうかがえる。こうした主軸の統一は、下屋敷から上屋敷へと屋敷の機能の変化に伴い行われていったこと」と推測している（小川2017）。西に隣接している医研地点の成果では、同地点北域が屋敷拝領当初には藩邸南縁辺に位置しており、藩邸境と考えているSD246･3100は南通町軸（N-1°-E）であった。本地点も医研地点から近いことで類似した土地利用が想定される。一方、本地点からは、建物の基礎遺構が確認されておらず明確に言及できないが、溝SD29の主軸は、N-1°-W、SD29の南にあるSD91の主軸はN-6°-Wで、溝をみる限り建物軸の規範があったとは言いがたい。

③井戸の配置

筆者は、医研地点の土地利用の推定を藩邸初期段階に

Ⅳ-1図　薬学部南館地点・薬学部資料館地点全体図　(S=1/300)

確認される足掛け施設のある井戸の配置で行った（堀内2020）。詳細はこれを参照されたいが、こうした形態の井戸が確認された地点は、本地点から12基、西側の医研地点から8基、東側の薬学部総合研究棟地点から1基、ベンチャープラザ地点から2基、インキュベーション施設地点から3基である。このうちベンチャープラザ地点、インキュベーション施設地点は、明暦の大火までは加賀藩邸外である。井戸の分布から藩邸当初の居住域は医研地点北域から本地点周辺を含む地域であったと推定している。また、医研地点では、8基のうち7基がF面あるいは最下面のG面、1基がE面以下、土地利用の変遷ではフェイズ2～3で確認され、藩邸最初期の遺構であると考えられる（Ⅳ－1表）。

次に配置であるが、南館地点では南北に並んでいる3列の井戸列が確認できる。西側の列から、SE41-SE42-SE67、SE37-（SE48）-SE101-SE104、SE10-SE27-SE105である。この3列の軸は、それぞれ、N-5°-W、N-0°-E、N-0°-Eで、中央列と東列は、ほぼ藩邸境方位と同じ南通町軸で、建物軸を反映している可能性がある。

（2）遺物

遺構数と共に陶磁器類が最も多く出土した時代は、17世紀前半である。そのうち南館地点SE67は、前節で触れたように足掛け施設が伴う井戸で、筆者らは以前に出土遺物の様相と年代について考えたことがある（佐藤・遠藤・堀内1997、堀内1997）。その際にいわゆる東大編年Ⅰb段階－肥前系磁器を伴わない段階－の指標として位置づけ、「1620年代を中心とする」推定年代を提示した（堀内1997）。後述するように、藩邸初期の状況が明らかになったことや他遺跡出土資料の詳細な分析成果（平田2006、長佐古2008など）から修正を行う必要が生じた。

①南館地点SE67出土陶磁器（Ⅳ－2図）

出土遺物は、瀬戸・美濃系志野釉碗（1）、柿釉灰釉流し碗（2）、志野織部蘭竹文皿（4）、志野鉄釉皿（5）、緑釉輪花皿（6）、灰釉外反皿（9）、志野皿、笠原鉢、志野織部徳利、錆釉擂鉢、丹波系陶器擂鉢（13）、土製の火鉢、かわらけ（14、15、19）、焼塩壷（27）、金箔瓦（29）などである。焼塩壷は「三なと久左衛門」の刻印が押された、底部が厚いロクロ成形の製品である。前述の提示では、SE67出土の陶磁器類を東大編年Ⅰb期の指標としたが、指標遺構としては他の時期と比較して資料数が少なく、遺物群全体の詳細な様相は提示できていなかった。

こうした状況を踏まえ、ここでは長佐古が考察した他遺跡出土資料と照射し、再検証を行いたい。Ⅳ－4図は、氏が論文中で使用した瀬戸・美濃系の皿の図である。比較を行うにあたり、これを引用したい（長佐古2008）。SE67－4（Ⅳ－2図）は蘭竹文の鍔皿で、丸の内3丁目遺跡の報告では、類似したものが52号土坑で2点図化されている（東京都埋蔵文化財センター1994）。5は見込み外周に蔓草が描かれている皿で、見込み中央と外周を区切る円圏（二重圏線）が僅かに確認される。円圏が巡り、内面外周に文様を巡らす皿（氏論中の分類ST0001b-3）は、丸の内三丁目遺跡52号土坑から丸の内一丁目遺跡12号遺構までに出土している（Ⅳ－4図）。6の総織部輪花皿は、類例が丸の内一丁遺跡10号遺構（同右24）に同様の製品が見られる。9の灰釉外反皿（ST005）は、Ⅳ－4図では腰の稜、高台の調整、釉調などが変化しているが、9の腰の稜が丸味を帯びている点、畳付が尖らずしっかりしている点などから、丸の内一丁目盛土以前の段階との類似性が看取される。ここでは図示できないが13の丹波系擂鉢は、擂目が複数単位である点、口唇部が箱形に成形されている点から、丸の内三丁目遺跡52号土坑から九段南一丁目遺跡盛土で出土してる製品に近い。九段南一丁目遺跡S108の口縁部形態は、口唇部が三角状になり、明らかに後出的である。

磁器では、肥前磁器の初現は丸の内三丁目遺跡52号土坑であるが、ここから出土している吹墨の染付皿は「混入の可能性に留意すべき」（前出、長佐古2008）としている。これは磁器焼成開始期の小溝上窯、小物成窯などの出土製品に吹墨の技術が含まれないことによると推定される（村上2015など）。確かな肥前磁器の出土例としては、複数点出土している丸の内一丁目遺跡10号遺構からになる。SE67の出土遺物を精査したところ、磁器碗小破片が1点出土していることが確認できた。

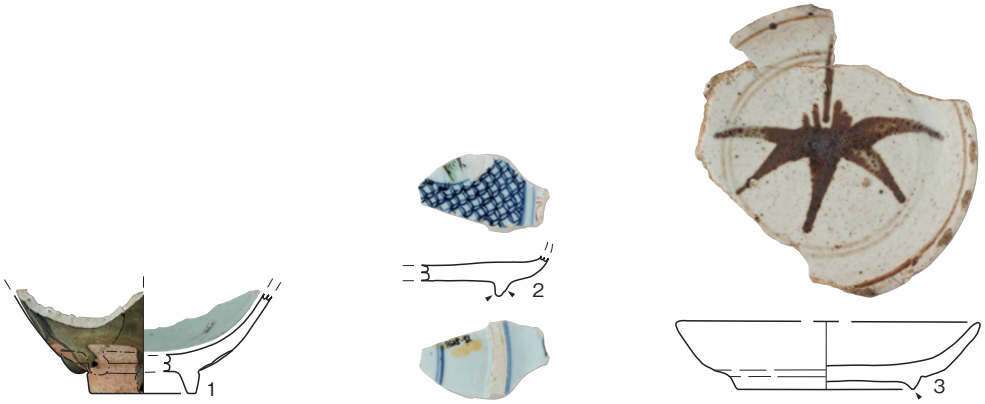
土器では、27の「三なと久左衛門」の刻印が押されたロクロ成形の焼塩壷は、丸の内一丁目遺跡12号遺構から出土している。27の瓦は、金箔が確認される。かわらけは、氏も指摘しているように「多様な系統が混在しており」、本稿の後に掲載した大貫論考を合わせて参照されたい。出土量が決して多くはない本遺跡で解明するのは難しい。

これらからSE67出土資料は長佐古氏が分析に使用した遺構群との比較では、おおむね丸の内三丁目遺跡52号土坑より後出的で、九段南一丁目遺跡S108より前段階くらいに位置づけられると判断される。

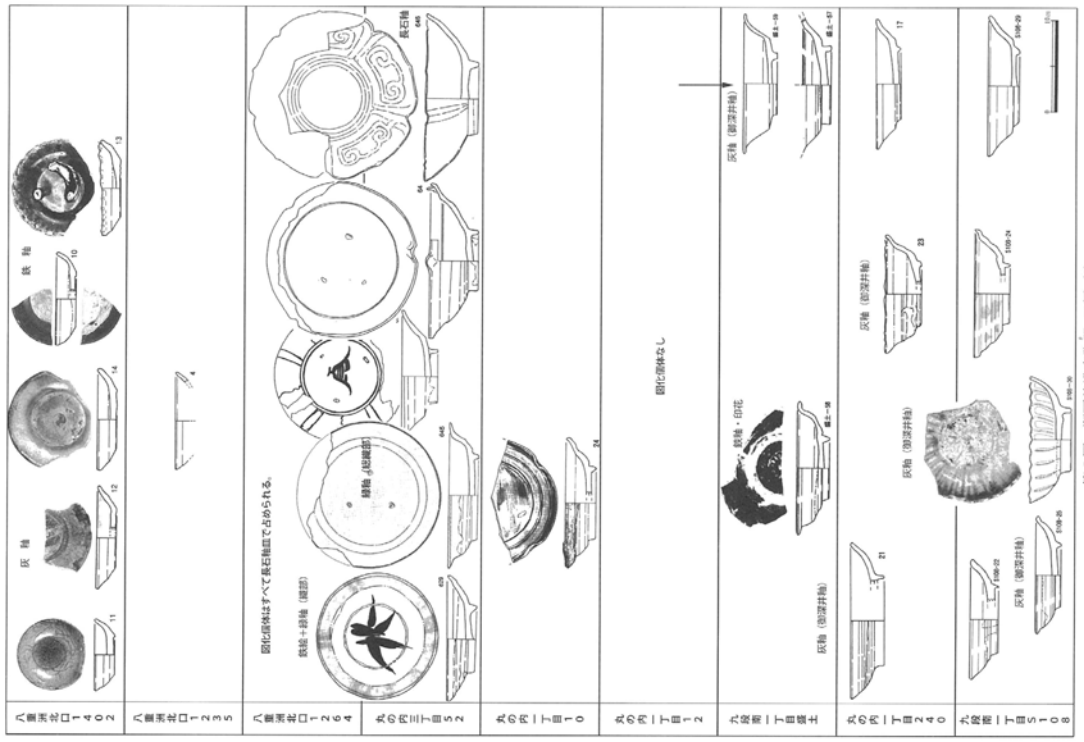
②南館地点SK58出土陶磁器（Ⅳ－3図）

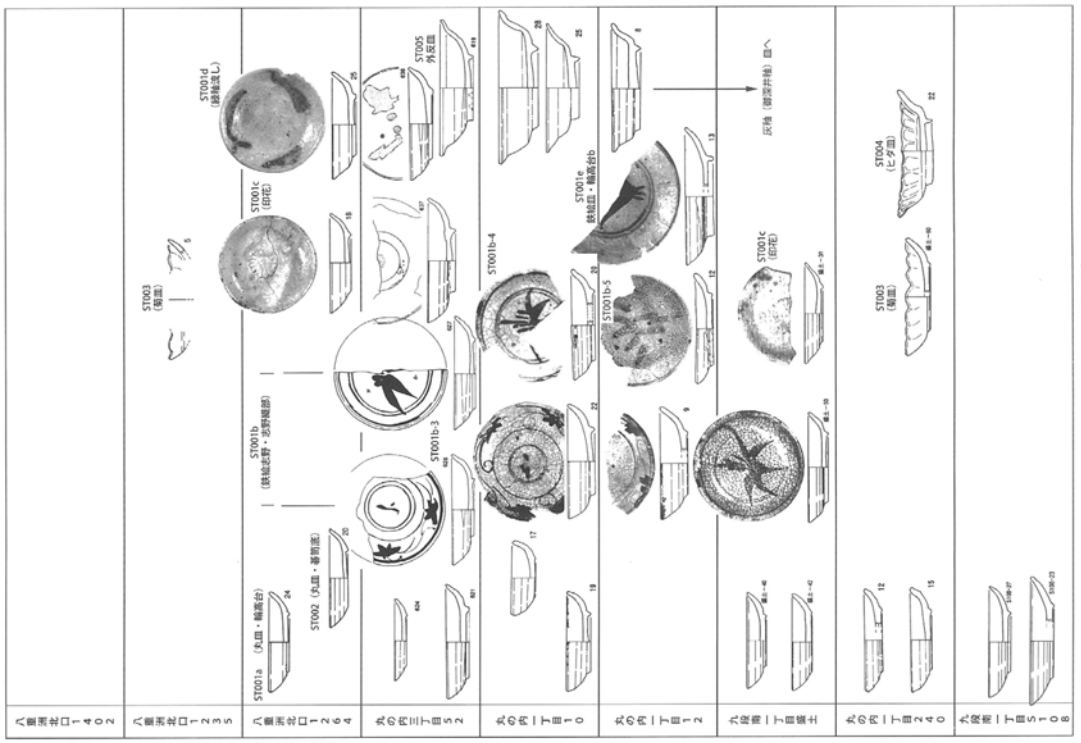
上記のように南館地点SE67は、本郷構内で肥前磁器が伴う最初期の段階であり、磁器の量的な主体は輸入磁器であることに留意する必要がある。量的に増加するの

Ⅳ-２図　SE67 出土遺物



Ⅳ-３図　SK58 出土遺物





Ⅳ-４図　長佐古論文「瀬戸美濃産陶磁器 皿類」（S=1/8）　（長佐古 2008 より抜粋、一部改変）

は、東大編年Ⅱ期として標準資料となっている御殿下記念館地点532号遺構（以下、「御殿下532」と略す）の段階であろう。Ⅱ期のメルクマールは肥前磁器が含まれる点にあるが、江戸遺跡全体を俯瞰しても肥前磁器の量が多くなるのは、有田でⅡ－２期に位置づけられている高台無釉の製品が伴う段階である（有田町1988）。高台無釉の製品は、生産地で「Ⅱ－１期においても一部の製品に見られたが、盛行するのはこの時期（Ⅱ－２期）である」（カッコ内筆者加筆）（野上建紀2000）と指摘されており、特に寛永14（1637）年の鍋島藩による窯場整理・統合後に開窯した諸窯の主力製品の一つとして生産されるようになる。

１は褐釉の高台無釉の碗で、高台が逆台形を呈する典型的な製品である。２はいわゆる輪繋ぎの地文に丸文の窓絵で描かれる典型的な色絵祥瑞である。３の瀬戸美濃系の蘭竹文皿は、長佐古氏のあげた資料（Ⅳ－４図）では、丸の内三丁目遺跡52号土坑から九段南一丁目遺跡盛土まで出土している。

一方、御殿下532では高台無釉の碗（Ⅳ－５図２）が多く含まれているほか、1630年代以降に流通すると考えられている幅広高台の景徳鎮碗や坏（同１）、明確な腰の稜を持つ瀬戸・美濃系の灰釉皿（同３）、口唇が三角に変化している丹波系焼締め擂鉢（同５）、「ミなと藤左右衛門」の刻印を持つ長胴形のロクロ成形焼塩壺（同６）、いわゆる江戸式へと変化する前段階の右回転糸切り離しのかわらけ（同７、８）など多くはSE67には確認できなかった九段南一丁目遺跡S108段階以降に出現する新しい製品で構成されている。

２．下屋敷時代後期

－17世紀後半～天和２（1682）年－

（１）遺構

出土遺物の年代から17世紀後半に比定された遺構は、南館地点南東部に位置するSU92がある。医研地点ではＤ面に相当する時期であるが、医研地点のＤ面の標高は22.4m付近であり、本地点で確認された両遺構の確認面（20.4～20.8m）とは1.6～2mの差があり、当該期に存在した遺構の多くは削平されたと考えられる。また、SU92の遺構軸は、N-86°-Wで、南町通軸と近似している。

（２）遺物

南館地点SU92は覆土に焼土が混じっており、出土遺物の多くが二次的な火熱を受けていた。ここ出土した遺物のうち、３～５は上質の肥前磁器染付皿である。これらの製品は、Ⅳ－６図で示したように医研地点および医学部附属病院入院棟Ａ地点C2層から出土しているものと同手で、天和２（1682）年の火災による廃棄と推定されるものである。SU92の３はC2層652、同４はC2層618、同５はC2層669の皿と同文様で、同一組物として保管使用していたと思われる。

３．上屋敷時代

－天和２（1682）年以降－

（１）遺構

上屋敷期は、医研地点の遺構面Ｃ面に相当する時期である。面の標高は、同地点北側で22.7m、南側で22.5m程度である。廃棄年代が18世紀と推定される遺構群のうち高い位置で確認された南館地点SU95が21.4m、19世紀と推定される資料館地点SE9が19.7mで、該期の遺構は大きく削平されている。

出土遺物の年代から17世紀末に比定された遺構はSE94であるが、これについては後述する。18世紀に比定された遺構は、南館地点SU51、SU95、SU98である。これらの地下室は方形で壁周囲にピットが巡るタイプの地下室で、遺構の主軸方位はSU51、SU98がN-6°-W、SU95がN-8°-Wである。これは中山道（現在の本郷通り）軸と同軸であり、上屋敷の御殿が中山道軸に変化するのが元禄16（1703）年の火災以降であることから、それ以降に設けられた施設であると考えられる。他にこうした主軸をもつ遺構は、SU106が存在するが遺物が出土していないために明確ではないものの、主軸方位から元禄16年以降であろう。

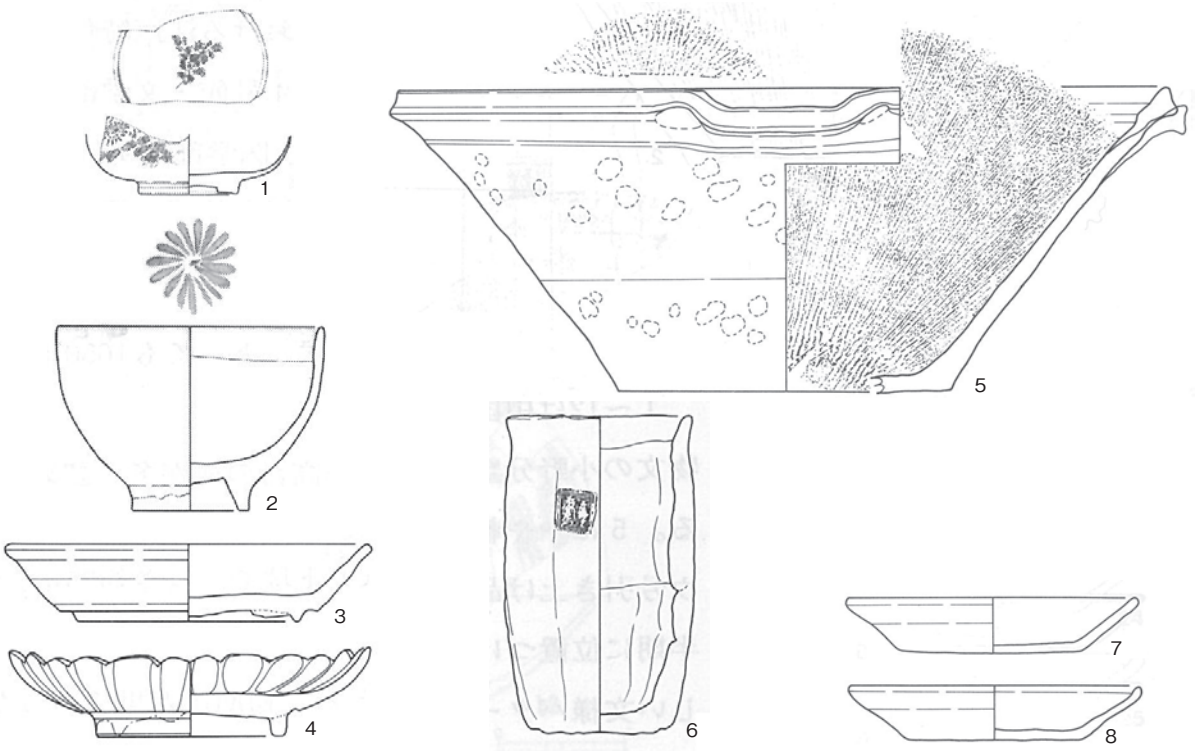
19世紀に比定される遺構は、資料館地点SE9のみである。足掛け施設は確認されず、規模も直径が130cmを超え、17世紀前半の井戸とは構造が異なっている。後述するが、これは「江戸御上屋敷御絵図」（金沢市立玉川図書館所蔵）の奥御殿部分に描かれた井戸に比定できる。

（２）遺物

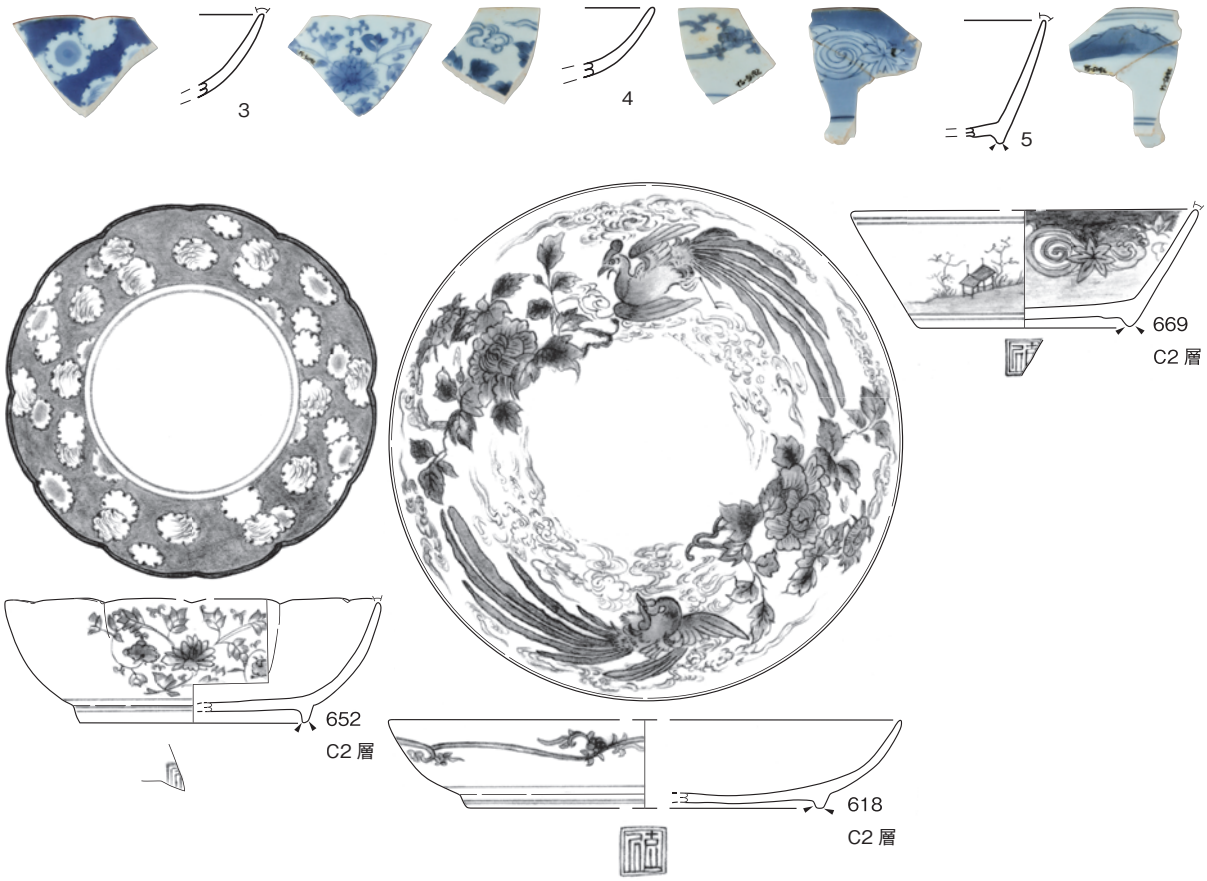
大きく削平を受けているためと当該時期には御殿の中奥から奥御殿にかかる範囲にあることで、遺物量はきわめて少ない。

（３）絵図面との対比

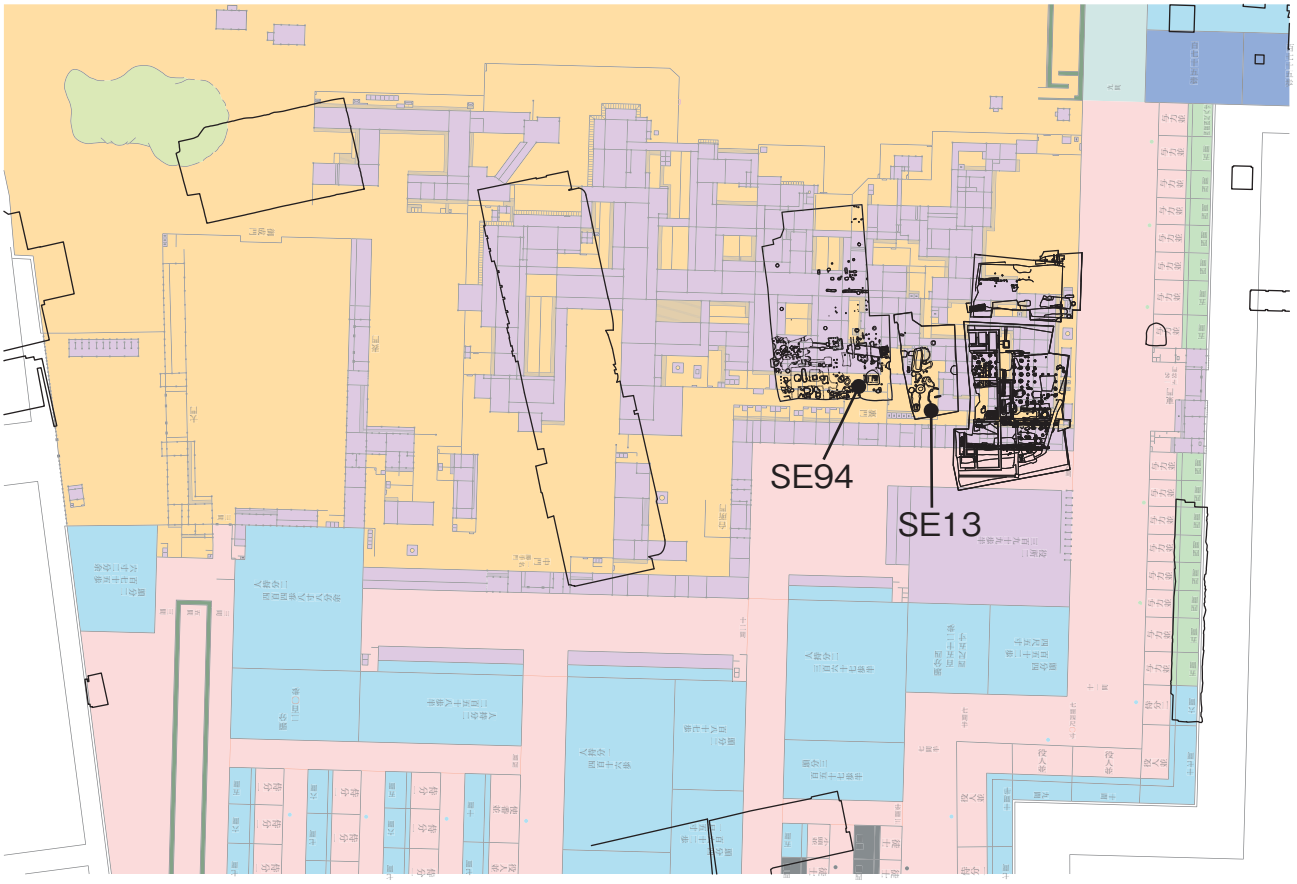
江戸時代の本郷邸は、現存する200点を超える絵図面から、土地利用や時代ごとの変遷などについての詳細な情報が看取できる。このうち藩邸の状況を描いた最古の絵図面は、元禄期の状況を描いたとされる「武州本郷第



Ⅳ-５図　御殿下記念館地点 532 号遺構出土遺物



Ⅳ-６図　SU92 と入院棟 A 地点 C2 層出土遺物



前田育徳会蔵「御上屋敷殿閣図」をトレースに加筆

Ⅳ-7図　調査地点と元禄絵図面（S=1/2000）

金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷総図」をトレースに加筆

Ⅳ-８図　調査地点と19世紀絵図面（S=1/2000）

図」（前田育徳会所蔵）と「御上屋敷殿閣図」（前田育徳会所蔵）である。本郷邸は天和 2（1682）年の火災を契機に上屋敷となるので、下屋敷時代の具体的な状況は考古資料のみで復元することになる。文献記録によると元禄 16（1703）年に屋敷が全焼する火災に見舞われるが、現存する絵図面は上記 2 枚を除いて、この火災後のものになる。ここでは「御上屋敷殿閣図」と「江戸御屋敷絵図」（金沢市玉川図書館所蔵）との対比を行った。

①「御上屋敷殿閣図」

Ⅳ－ 7 図は、「御上屋敷殿閣図」と調査区周辺とを重ね合わせたものである。これを見ると、薬学部南館地点は御殿空間内の奥部分、詰人空間の境界付近にあり、すぐ南側を御殿を仕切る長屋塀と「裏門」と書かれた長屋門が描かれている。この境界は本地点では確認されていないものの、東接する薬学系総合研究棟地点の発掘調査では長屋塀の基礎とそれに伴う溝が確認されている。裏門の北側、塀を隔てて井戸と思われる施設が描かれているが、これは南館地点 SE94 の位置にあたる。SE94 からは出土量は少ないが、17 世紀後半の遺物が出土しており、年代的にも符合する。また、裏門の東側、塀と便所の先に井戸と考えられる施設が描かれるが、これは資料館地点 SE13 の位置にあたる。SE13 からも 17 世紀後半の遺物が出土しており、年代的齟齬はない。

構造的にも両井戸に足掛け施設はなく、明らかに藩邸最初期に鑿井されたものとは異なっている。また、規模も SE94 の直径は 200cm、SE13 は 160cm とかなり大型で、これもおおむね直径 1m 以内の足掛け施設がある井戸と異なっている。ここで、他地点で確認された井戸と規模の比較をすると、法学部 4 号館地点の B5-1 号土坑と G6-1 号 ·4 号土坑、文学部 3 号館地点 Q8-10 号 ·11 号土坑は、同じ「御上屋敷殿閣図」と照合できた詰人空間にある井戸で、法学部の前 2 者は「足軽並」、後者は「従者並」と書かれた長屋に伴うものである。これらの井戸の直径は、B5-1 号土坑が 140cm、G6-1 号 ·4 号土坑が 160cm、Q8-10 号 ·11 号土坑 130cm で厳密な規格性は確認できないものの、これらと対比しても SE13 の 160cm や SE97 の 200cm は大きい。あるいは御殿仕様であった可能性もある。

②「江戸御屋敷絵図」

Ⅳ－ 8 図は、屋敷の建物配置から天保 11（1840）年～弘化 2（1845）年の状況を描いた「江戸御屋敷絵図」と調査区周辺とを重ね合わせたものである。これを見ると、南館地点の南西には「御本宅御門」と書かれた奥御殿の門が描かれ、両地点全域が御殿空間内の奥向であったことが判る。さらに南館地点は奥部分の御膳所などを含む部分、資料館地点は同じく奥部分の御膳所から長局にかかる部分であったことが看取される。この長局にかかる部分に井戸と推定される施設が描かれているが、これは資料館地点 SE9 の位置と合致している。SE9 からは 19 世紀前半の遺物が出土しており、年代的齟齬はなく、その廃絶は幕末と推定される。

一方、18 世紀中葉～後半の遺物が出土している SU51、SU98、SU95 や同じピットが壁際に巡る構造を持つ地下室 SU103 なども、奥御殿に伴う地下室と判断されるが、絵図面から対比できる施設は確認できなかった。

以上、絵図面との対比を行った。これらから少なくとも上屋敷となってからは、本地点が御殿空間内の奥部分であったと判断されるが、これら奥御殿に伴う遺構は、深度の大きい井戸や地下室の他は確認されておらず、近代の削平の大きさが窺える。

４．藩邸初期の景観と年代

これまでみてきたように、複数の生活面とそれに伴う遺構が確認された医研とは異なり、本地点から得られた情報の多くは下屋敷時代前期に集中している。ここでは当該時期の文献史料と医研の成果を踏まえながら藩邸初期の景観を中心に考えてみたい（Ⅳ－ 1 表）。

（１）藩邸の拝領と当初の開発

文献記録では、加賀藩が本郷邸を拝領したのは、元和 2 ～ 3（1616 ～ 7）年で（「東邸沿革図譜」）、その後、「寛永三年丙寅、始て四界に木墻を環らし」（「東邸沿革図譜」）と本郷邸の開発が始まるのが寛永 3（1626）年秋とみられる（石川県図書協会 1938）。また、「三壺聞書」によるとそれ以前は、「草ほうほうたる小笹原に谷峯も有て、所々に番人又は下々の者のミ有て、屋敷ノ内またらに茶園してそ居たりける」（石川県金沢城調査研究所 2017）とほぼ休閑地になっていたと判断される。

したがって本郷邸最初期は、寛永 6（1629）年に行なわれた本郷邸への御成とそれに伴う御成御殿との関わりを考えなくてはならないだろう。最初期の遺構・遺物が確認された医研地点および本地点では、前述の SE67 のように遺物の検討から丸の内三丁目遺跡 52 号土坑より後出的で、九段南一丁目遺跡 S108 より前段階であると判断できた。こうした段階の年代は、1620 年代後半～30 年代と位置づけられることから、その後に続く御殿下 532 の 1640 年代を中心とした東大編年の推定年代との齟齬はない。

また、金箔瓦が出土している点は重要である。これま

Ⅳ-1表　17世紀の土地利用の変遷

年代		事項	段階			医研地点の状況						本地点の状況	備考
			藩邸	土地利用	東大編年	面	北域	境			南域		
元和2-3	1616-17	拝領		フェイズ1	Ib	G	未開発	不明	道無	境無	同心屋敷	未開発	
寛永3	1626	四界に木塀を環らす	下屋敷	フェイズ2			藩邸	簡易?	道無	不明		SE67など	
寛永6	1629	御成											金箔瓦
				フェイズ3	Ⅱ	F							
寛永16	1639	利常隠居		フェイズ4		E		246·3100	道	235·2201		SK58など	
寛永17	1640	御成											
慶安3	1650	本郷邸全焼		フェイズ5	Ⅲa	D							
明暦3	1657	明暦の大火							道(邸内)	236·2095·3021	(詰人空間)	SU92など	綱紀移住
万治元	1658	利常死去											
天和2	1682	八百屋お七の火災		フェイズ6	Ⅲb	C2	(御殿空間)	境無			藩邸 (御殿空間)		
天和3	1683	上屋敷に唱替	上屋敷										
元禄15	1702	御成			Ⅳ								
元禄16	1703	水戸様火事		フェイズ7		C1		233·2160(邸内)			(詰人空間)		

でに出土した金箔瓦やそれと共伴した資料に二次的に被熱した瓦は確認されておらず、その廃棄は火災によるものとは異なる理由と推定できるからである。金箔瓦は、寛永6（1639）年には将軍徳川家光と大御所秀忠の御成が本郷邸で行われるが、この際には相応の殿舎が建築され、その一部に金箔瓦が使用された可能性を考えている。これを取り壊し、新たな御殿造営の契機を勘案すると、寛永16（1639）年の3代藩主前田利常の本郷邸への隠居所造営と考えるのが妥当である（Ⅳ－1表）。遺物の年代観とも勘案すると、SE67および足掛け施設を伴う井戸は、利常隠居前の御殿に伴う遺構で、遺構の分布から現在の三四郎池南側の医研地点から本地点にかけての地域が御殿域であると考えられる。あるいは御成御殿の一部であるかも知れない。

ただ、当該時期に上屋敷であった龍口邸では、藩邸西側に御成書院、数寄屋、広間などからなる御成御殿が常設してあり、この様子は現存している絵図面から知られる（増田2019）。ちなみに元和3（1617）年に行われた徳川秀忠の御成は、この龍口邸にて執り行われているが、寛永6年の御成が、なぜ本郷邸で行われたのかは不明である。氏の分析で絵図cとした寛永20（1643）年頃と推定している「辰之口御上屋敷指図」には井戸が描かれているが、井戸のほとんどは御殿中枢部とは離れた東側にある台所付近と奥向と推定される位置にある。龍口邸は大手前に位置し、これらの井戸では中水程度の水質の水しか得られなかったと推定されるものの、足掛け施設を伴う井戸が多く確認されている医研地点北域から本地点にかけては、表御殿や御成御殿中心域ではない可能性もある。合わせてこれまでの調査で当該期の出土遺物の少ないことが指摘できるが、これは人が以降と比較して少なかったことを示唆していると考えている。

（2）利常隠居後の本郷邸

利常の隠居所を本郷邸に置いたことは、本郷邸利用の大きな画期となった。まず、1640年代以降、御殿下532に見られるように遺物量が、それ以前より相応に増加した点にある。御殿下532は、遺構の規模や形態から御殿などの造成に利用する大型の土取穴である。大型の土取穴はこの他にも御殿下記念館地点618号遺構、同678号遺構、医学部附属病院入院棟A地点SK3、工学部3号館地点SK286などがあるが、いずれも覆土中に多量の焼土が含まれていない。このことは、火災による焼土などの廃棄の後に御殿造成に関わる地業を行うためで、1640年代の遺物を多く含む532号遺構は慶安3（1650）年の本郷邸全焼後の造成、618号遺構や678号遺構は明暦3（1657）年の明暦大火あるいはその翌年の利常死去に伴う御殿造成土獲得に伴うものと推定している。

おわりに

これまで何回か触れたが、本地点の遺構・遺物の遺存状態は悪く、藩邸初期、または御殿地域の考古学的な復元は、東接する薬学系総合研究棟地点の状況を踏まえて行う必要がある。ここでは、比較的多く出土した藩邸初期の景観を中心に医研地点の状況と照射しての復元と予察を行った。

今後、薬学系総合研究棟地点、山上会館地点、御殿下記念館地点などを含めた御殿の成立に関わる考古学的状況と藩邸内の機能などを踏まえた復元が課題として残っている。また、本郷キャンパスの発掘調査開始から36年が経過し、調査面積は10万㎡を超えており、長年同

じ藩邸を継続的に調査を行った成果発信を行いたいと考えている。

【引用・参考文献】

有田町　1988 『有田町史　古窯編』

石川県図書館協会　1938 「東邸沿革図譜」『景周先生小著書集』

石川県金沢城調査研究所　2017 『金沢城普請作事史料５　三壺聞書』

小川祐司　2017 「下屋敷から上屋敷へ　17 世紀の加賀藩本郷邸」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学総合研究博物館

香取祐一　2018 「本郷キャンパスの自然地形」『東京大学本郷キャンパス　140 年の歴史をたどる』東京大学キャンパス計画室編

佐藤律子・遠藤香・堀内秀樹　1997 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部新館地点 SE67 出土遺物の年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室

大成エンジニアリング　2008 『本郷台遺跡群 第１地点』

千代田区九段南一丁目遺跡調査会　2005 『九段南一丁目遺跡』

東京都埋蔵文化財センター　1994 『丸の内三丁目遺跡』

東京都埋蔵文化財センター　2009 『江戸城跡－北の丸地区の調査－』

東京大学遺跡調査室　1989 『東京大学本郷構内の遺跡　理学部７号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990b 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報』3

東京大学埋蔵文化財調査室　2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2006 「薬学部系総合棟地点（2004 年度）１次調査」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

東京大学埋蔵文化財調査室　2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

東京大学埋蔵文化財調査室　2016a 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点　報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2016b 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点　研究編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2017 『東京大学構内遺跡調査研究年報』10

東京大学埋蔵文化財調査室　2019 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点　報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2020 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点　報告編』

鳥越多工摩　2007 『近世江戸の「地下室」に関する考古学的研究』國學院大學大學院研究叢書文学研究科 19

長佐古真也　2008 「江戸における慶長・元和・寛永期の陶磁器様相－千代田区内の一括資料による陶磁器編年試案－」『研究論集』ＸＸⅣ　東京都埋蔵文化財センター

野上建紀　2000 「磁器の編年（色絵以外）１．碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

平田博之　2006 「第２節出土遺物に関する考察」『有楽町二丁目遺跡』武蔵文化財研究所

文京区教育委員会　2003 『真砂遺跡 第Ⅴ地点』

堀内秀樹　1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2020 「医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用１－天和２（1682）年まで－」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点　研究編』東京大学埋蔵文化財調査室

真砂遺跡調査会　1987 『真砂遺跡』

増田晴夫　2019 「加賀藩龍口上屋敷の絵図について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』12　東京大学埋蔵文化財調査室

村上伸之　2015 「肥前・有田の磁器の始まり」『江戸前期における日本磁器の始まりと色絵の始まり』近世陶磁研究会

薬学部南館地点における17世紀初頭のかわらけ

大貫　浩子

はじめに

薬学部南館地点（略称「YS」。以下YSと呼称）SE67の陶磁器様相についてはすでに考察を行っている。肥前系磁器の出現する直前の遺物群であるとし廃絶年代を1616年～20年代としていた（東京大学埋蔵文化財調査室1997）。前章「薬学部南館地点・薬学部資料館地点の成果と藩邸初期の景観」では、破片資料の中に肥前系磁器片を確認し、廃絶年代を1630年代頃とした。そこではかわらけに対する考察があまり行われていなかったため、SE67遺構を中心として17世紀初頭のかわらけについて考察してみたい。

小林謙一氏は江戸在地系土器成立期の土師器皿について分析を行っている（小林1997）。ここでは、16世紀後葉の南関東の土師器皿について、小地域ごとの小規模土器生産が江戸の周辺地域に展開しており、それらが流入してきたと指摘し、17世紀初頭においてもその流れが認められるとしている。本地点出土のかわらけも江戸在地系のかわらけが定型化される以前のかわらけ（東大編年DZ-2-a、DZ-2-k）と江戸の周辺地域から流入してきたかわらけによって構成されていると考えている。

永越伸吾氏は江戸とその周辺部の中世から近世初頭のかわらけについて述べ、変遷の様子を考察している（永越　2006）。葛西や江戸地域の特徴として17世紀第1四半期には坏状のものと、皿状のものが認められるが第2四半期になると皿状のものに統一されるとしている。

かわらけの分類

YS地点出土のかわらけについて次のような基準で分類した。（Ⅳ－9図）

ロクロ成形（①～⑧）↔　非ロクロ成形（⑨⑩）
↓
胎土（上段（①～⑥）と下段左（⑦⑧））
↓
器形・成形技法

①ロクロ成形、胎土は橙色で、赤色粒子、黒色粒子、わずかに白色粒子を含む。薄手。器壁はやや内湾して立ち上がる。見込みには中央に窪みがみられるものや、ロクロ水引痕が渦巻き状にみられるものがある。外面立ち上がり際に調整が入り、丸みを帯びて立ち上がるものが多い。底部裏糸切り痕は右回転がほとんどであるが左回転のものもある。

該当遺物　SE67-14、16、18～20、SE70-2～4
東大分類　DZ-2-a

②ロクロ成形、胎土は橙色で、赤色粒子、黒色粒子、わずかに白色粒子を含む。薄手。器壁はやや外反して立ち上がる。見込み立ち上がり際には1周ナデ調整がみられるものがある。底部立ち上がり際は調整がみられずやや突出しているものもある。底部裏に右回転糸切り痕がある。

該当遺物　SE67-15、17、SE70-5、7、SK77-8～10、SD91-2、3、SE101-7、SE105-11
東大分類　DZ-2-a

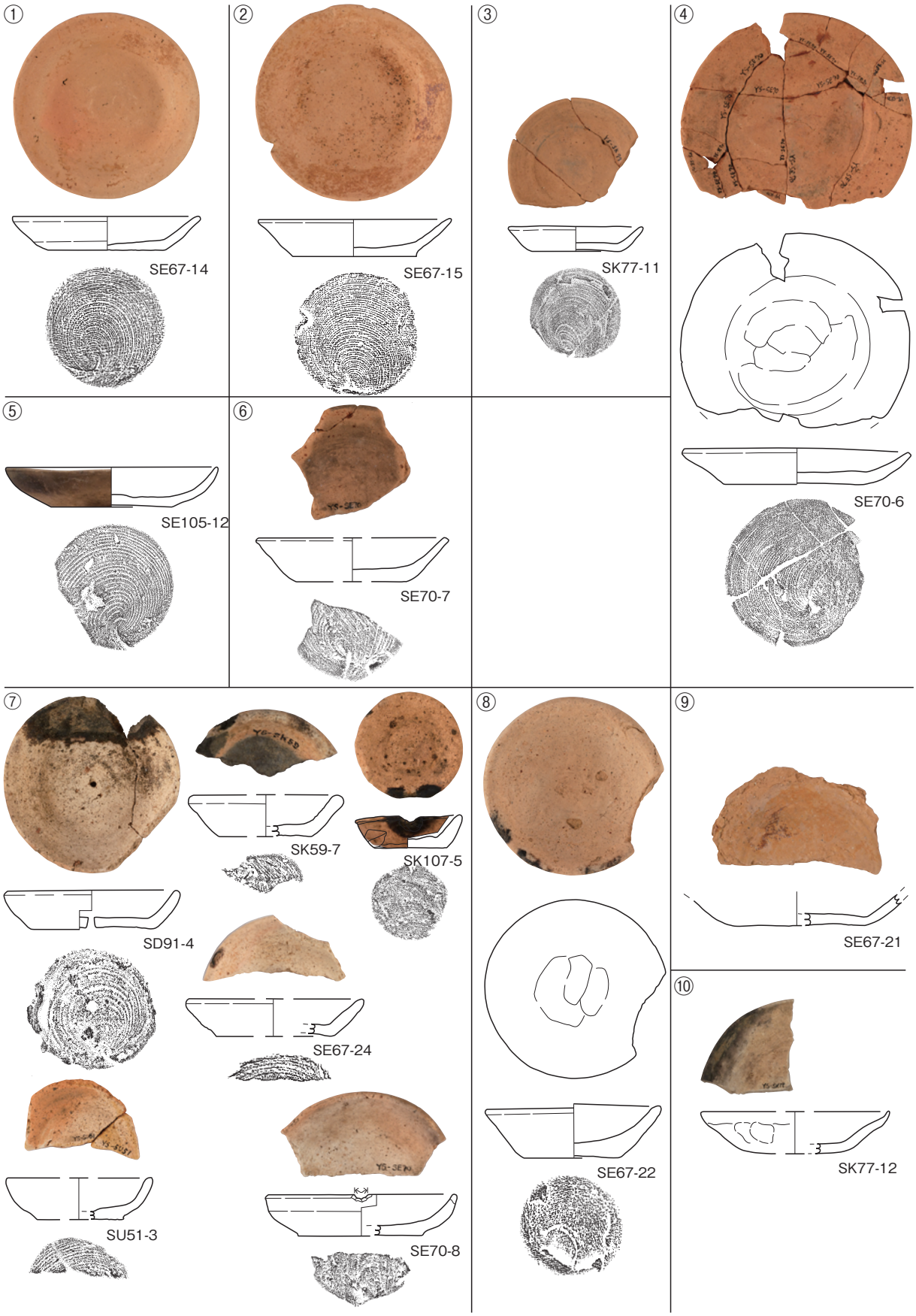
③ロクロ成形、胎土は橙色で、赤色粒子、黒色粒子、わずかに白色粒子を含む。口径と底径の差が小さい。器壁はやや内湾しているものとやや外反している2タイプがある。薄手であり、中世的な要素を残す口径と底径の差が小さい厚手のかわらけから変化し、すでに近世的要素がうかがえる。口径が7cm前後のものと9cmのものがあり、法量は比較的小さい。底部裏糸切り痕は右回転がほとんどであるが左回転のものもある。

該当遺物　SK77-11、SE105-13、SK107-4
東大分類　DZ-2-a

④ロクロ成形、胎土は橙色で、赤色粒子、黒色粒子、わずかに白色粒子を含む。器壁はやや外反しており、底部裏に右回転糸切り痕がある。見込みには回転方向の指ナデが3本みられ凹凸が残る。器高は低めで、底径は大きい。かなりゆがみがみられる。1点のみの出土で類型化されてはいない。

該当遺物　SE70-6
東大分類　DZ-2

⑤ロクロ成形、胎土はにぶい黄橙色で、赤色粒子、黒



Ⅳ-9 図　薬学部新館地点出土かわらけ（S=1/3）

色粒子、白色粒子を含む。薄手。器壁はやや内湾しており、口唇部にかけて薄くなっている。内面は滑らかに口唇部まで立ち上がる。内面全面に2次調整が見られる。見込み中央にはわずかに高まりがみられる。底部裏糸切り痕は左回転。

いわゆる江戸式のかわらけと共伴してくる器形であり東大分類DZ-2-aの最終段階に出現してくるのかも知れない。

該当遺物　SE105-12

東大分類　DZ-2

⑥ロクロ成形、胎土は橙色。口径と底径の差が小さい厚手のかわらけ。これらは、中世的な要素を残すものと考えられている。小法量で、器高がやや高いものが多い。底裏糸切り痕は右回転。

該当遺物　SE70-7

東大分類　DZ-2-k

⑦ロクロ成形、胎土は浅黄橙色、橙色で粗くボソボソである。赤色粒子、黒色粒子、黒色輝石を含む。白色粒子が含まれるものもある。器壁は厚手。体部が丸みを帯びて立ち上がるものには、見込み立ち上がり際にナデ調整がみられる（SU51-3、SE67-24、SE70-8）。体部が外反気味に立ち上がるものには、見込み立ち上がり際に凹みが見られる（SD91-4、SK107-5）。口径と底径の差が小さい。糸切りの方向が観察できる資料は1点のみで、左回転である。粗く、糸切り痕がはっきりしないものがある。

利根川流域東上野から北武蔵北部地域あたりの可能性を考えている。埼玉県北東部の騎西城跡ではかわらけをⅠ～Ⅴ期に分類している。17世紀前半はⅢ期に相当する。皿形には体部が直線的に立ち上がるもの、丸みを帯びて立ち上がるもの、外反気味に立ち上がるものがある。器高2.5cm前後、口径10cm前後のものが多くある。胎土に含まれる粒子も近い。この地域では17世紀の底部裏糸切り痕は左回転が主体となっている（加須市教育委員会2019）。

胎土が近いものを集めたが、それぞれに特徴があり、これらが同一地域のものとは特定できない。また、同一地域の中でも様々な器形が作られており今後の課題となっている。

該当遺物　SU51-3、SK59-7、SE67-24、SE70-8、SD91-4、SK107-5

東大分類　DZ-2

⑧ロクロ成形、胎土はにぶい黄橙色で、やや粒っぽい。赤色粒子と黒色粒子を多く含む。厚手の小振り皿。口径と底径の差が小さい。器高が高い。内面見込みには回転方向の指ナデ調整が1本、縦方向の指ナデ調整が2本みられる。見込みから口縁にかけては緩やかな曲線を描く。底部の外縁は内側に折り込むように始末されている。

17世紀初頭の周辺地域では葛西城や下総方面に見込みにナデ調整が施されるかわらけが散見される。しかし、葛西城Ⅴ類のナデ調整は、内面見込み中央の高まりをならす様に工具によってナデ調整が施されているものや、見込み中央の目をナデ消しているように観察された。SE67-22は見込み全体を回転方向と縦方向の指ナデで調整しており、異なるものであることがわかった。

該当遺物　SE67-22

東大分類　DZ-2

⑨非ロクロ成形（手づくね）、胎土は橙色で白色粒子を含む。東大分類DZ-2-aに含まれる白色粒子より大きい。見込みには縦方向の、見込み立ち上がり際には回転方向のナデ調整がみられる。体部外面には横方向のナデがみられ、指頭圧痕は顕著ではない。本遺跡では、出土数は少ない。

該当遺物　SE70-6

東大分類　DZ-2-g

⑩非ロクロ成形（手づくね）、胎土は黄白色。体部外面の指頭圧痕が顕著である。医学部附属病院地点池出土の白色系かわらけに類似している。この白色系かわらけは寛永期の将軍の御成の際に使用されたものではないかとされている（東京大学遺跡調査室1990b）。蛍光X線分析の元素分析により国元からの搬入品である可能性が高いとされている（長佐古2020）。

該当遺物　SK77-12

東大分類　DZ-2-g

東大分類DZ-2-a（①②③）と江戸近郊からの搬入品と考えている⑦⑧のススの付着割合を比較すると東大分類DZ-2-aは約3割であるのに対し⑦⑧は欠損している1個体以外の6個体にススの付着が見られた。つまり東大分類DZ-2-aは灯明具以外にもいろいろな用途で使われている可能性があるが、江戸近郊からの搬入品と考えている⑦⑧は厚手で胎土が粗くほとんどが灯明具として使用されていることがわかる。

東大分類DZ-2-aに分類されている①と②において他の共伴遺物などから前後関係を見いだすことはできな

かった。

③⑦⑧は口径と底径の差が小さいため今まで東大分類 DZ-2-k に含まれていたが、③はすでに薄手になっており東大分類 DZ-2-a に、⑦⑧は在地系ではないと考えられるので、東大分類 DZ-2-k から分離するべきと考え東大分類 DZ-2 とした。

まとめ

17 世紀第 1 四半期にみられる坏状のものと、皿状のものの組み合わせから次の段階である皿が主体の段階に移る。ほとんどがロクロ成形の薄手のかわらけになり、わずかに中世的な厚手のかわらけや手づくねのかわらけ、そして中世的要素を残したままの近郊の厚手かわらけが見られる様相がよくわかる。

次の段階の指標遺構とされている御殿下記念館地点 532 号遺構（東京大学埋蔵文化財調査室 1990a）ではいわゆる「江戸式」と呼ばれる定型化したかわらけ（東大分類 DZ-2-b）が多く出土している。

東大分類 DZ-2-a に分類されているかわらけが細分され、系統別に再編することができるのか、また、近郊から流入してきていると考えられるかわらけがどこの地域から流入してきているのか、今後の資料の増加や研究を待ちたい。

貴重なご意見をくださった梶原勝氏、村上卓氏。資料を見せてくださった永越信吾氏。その他ご指導くださった皆様に御礼申し上げます。

【参考文献】

秋本太郎 2012「上野の 16 世紀から 17 世紀前半のかわらけ『江戸在地系カワラケの成立』江戸遺跡研究会 25 回大会

永越信吾　2006「 江戸とその周辺部の中・近世移行期のかわらけ」『立正史学第 99 号』立正大学史学会

大成可乃　2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』

加須市教育委員会 2019「騎西城武家屋敷跡　第 42 次・48 次調査　中近世編」加須市埋蔵文化財調査報告書　第 2 集

小林謙一 1997「江戸在地系土器成立期の土師皿の作成技術」『関西近世考古学研究』関西近世考古学研究会

佐藤律子・遠藤香・堀内秀樹　1997「東京大学本郷構内の遺跡　薬学部資料館地点 SE67 出土遺物の年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』東京大学埋蔵文化財調査室

長佐古真也 2020「東京学本郷構内遺跡手捏ねかわらけの元素分析による生産地推定」『医学部教育研究棟地点研究編』東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室 1990a『山上会館・御殿下記念館地点　第 2 分冊』

東京大学遺跡調査室　1990b『医学部附属病院地点』

【参考文献】

安芸毬子・小林照子・堀内秀樹　2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報 8』東京大学埋蔵文化財調査室』

有田町　1988 『有田町史　古窯編』

石川県図書館協会　1938 「東邸沿革図譜」『景周先生小著集』

石川県金沢城調査研究所　2017 『金沢城普請作事史料 5　三壺聞書』

江戸文化資料刊行会　1970　万治年間江戸測量図

小川祐司　2017 「下屋敷から上屋敷へ　17 世紀の加賀藩本郷邸」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学総合研究博物館

大成可乃　2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）」『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』

加藤晃･金子智　1990 「御殿下記念館･山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念館地点　第 3 分冊』東京大学埋蔵文化財調査室

香取祐一　2018 「本郷キャンパスの自然地形」『東京大学本郷キャンパス　140 年の歴史をたどる』東京大学キャンパス計画室編

金行信輔　2007 『寛永江戸全図』之潮

続群書類従完成会　1964 『新訂　寛政重修諸家譜』

佐藤律子・遠藤香・堀内秀樹　1997 「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部新館地点 SE67 出土遺物の年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室

鈴木正章　1989 「遺跡の層序と地質学的調査・分析」『理学部 7 号館地点』東京大学遺跡調査室

諏訪間　順・野口　淳・島立　桂　2010 「第二章　旧石器文化の編年と地域性　四　関東地方南部」『講座　日本の考古学』 1 旧石器時代上（稲田孝司・佐藤宏之編）青木書店

大成エンジニアリング　2008 『本郷台遺跡群 第 1 地点』

地図資料編纂会　1988 『江戸 - 東京市街地図集成』柏書房

東京大学遺跡調査室　1989 『理学部 7 号館地点』

東京大学遺跡調査室　1990a 『法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』

東京大学遺跡調査室　1990b 『医学部附属病院地点』

東京大学事務局庶務部庶務課　1982 『懐徳館の由来』

東京大学総合研究博物館　2000 『加賀殿再訪』

東京大学総合研究博物館　2011 『弥生誌－向岡記碑をめぐって－』

東京大学総合研究博物館・東京大学埋蔵文化財調査室　2017 『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』

東京大学埋蔵文化財調査室　1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』

東京大学埋蔵文化財調査室　1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報 2』

東京大学埋蔵文化財調査室　2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報 3』

東京大学埋蔵文化財調査室　2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報 4』

東京大学埋蔵文化財調査室　2005a 『医学部附属病院外来診療棟地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2005b 『工学部 1 号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2006a 『工学部 14 号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2006b 『東京大学構内遺跡調査研究年報 5』

東京大学埋蔵文化財調査室　2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報 6』

東京大学埋蔵文化財調査室　2009 『浅野地区Ⅰ』

東京大学埋蔵文化財調査室　2011a 『教育学部教育研究棟地点・IML 地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2011b 『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』

東京大学埋蔵文化財調査室　2012a 『東京大学構内遺跡調査研究年報 8』

東京大学埋蔵文化財調査室　2012b 『総合研究博物館新館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2016 『医学部附属病院入院棟 A 地点』報告編、研究編

東京大学埋蔵文化財調査室　2017 『東京大学構内遺跡調査研究年報 10』

東京大学埋蔵文化財調査室　2019a 『東京大学構内遺跡調査研究年報 11』

東京大学埋蔵文化財調査室　2019b 『医学部教育研究棟地点』報告編

東京大学埋蔵文化財調査室　2019c 『東京大学構内遺跡調査研究年報 12』

東京大学埋蔵文化財調査室　2020 『医学部教育研究棟地点』研究編

東京都埋蔵文化財センター　1994 『丸の内三丁目遺跡』

東京都埋蔵文化財センター　2009 『江戸城跡－北の丸地区の調査－』

東京都教育委員会　1985 『都心部の遺跡』

鳥越多工摩　2007 『近世江戸の「地下室」に関する考古学的研究』國學院大學大學院研究叢書文学研究科 19

長佐古真也　2008 「江戸における慶長・元和・寛永期の陶磁器様相－千代田区内の一括資料による陶磁器編年試案－」『研究論集』ＸＸⅣ　東京都埋蔵文化財センター

成瀬晃司 2016「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷－入院棟 A 地点 1 区の調査成果を中心に－」「東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点　研究編』 東京大学埋蔵文化財調査室

野上建紀　2000 「磁器の編年（色絵以外）1．碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

平田博之　2006 「第 2 節出土遺物に関する考察」『有楽町二丁目遺跡』武蔵文化財研究所

文京区教育委員会　2003 『真砂遺跡 第Ⅴ地点』

堀内秀樹　1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室

本郷區役所　1937 『本郷區史』

真砂遺跡調査会　1987 『真砂遺跡』

増田晴夫　2019 「加賀藩龍口上屋敷の絵図について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』12　東京大学埋蔵文化財調査室

村上伸之　2015 「肥前・有田の磁器の始まり」『江戸前期における日本磁器の始まりと色絵の始まり』近世陶磁研究会

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき　やくがくぶみなみかんちてん・やくがくぶしりょうかんちてん
書名	東京大学本郷構内の遺跡　薬学部南館地点・薬学部資料館地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	16
編著者名	堀内秀樹（編著）、香取祐一（編著）小林照子（編）、大貫浩子、阿部常樹、小池聡
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904　東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内　03-5452-5103
発行年月日	令和3年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
とうきょうだいがく　ほんごう　こうない　いせき 東京大学本郷構内の遺跡 ほんごうだい　いせきぐん （本郷台遺跡群） やくがくぶみなみかんちてん 薬学部南館地点・ やくがくぶ　しりょうかん　ちてん 薬学部資料館地点	とうきょうとぶんきょうくほんごう7ちょうめ3ばん1ごう 東京都文京区 本郷7丁目3番1号	13105	47	北緯35度42分36秒	東経139度45分48秒	南館地点：1992年10月21日～12月18日 資料館地点：1995年7月24日～9月1日	南館地点：1,300㎡ 資料館地点：540㎡	薬学部南館、資料館新営に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷構内の遺跡（本郷台遺跡群）薬学部南館地点・薬学部資料館地点	包蔵地、集落、大名屋敷	旧石器、縄文、近世	・南館地点 近世：井戸14、地下室6、土坑30、ピット40、溝4 ・資料館地点 旧石器：石器ブロック1、礫群1 近世：井戸2、土坑11、ピット8、溝1	旧石器：ナイフ形石器、削器、掻器 縄文：土器 近世：磁器、陶器、土器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品、木製品、骨角製品、動物遺体	

要約	旧石器時代は、根津谷から西へ延びる小支谷谷頭付近の石器ブロック、礫群が確認。 近世は、加賀藩邸の調査。下屋敷時代の藩邸最初期（17世紀前半）の遺構・遺物が確認。

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 16

東京大学本郷構内の遺跡

薬学部南館地点
薬学部資料館地点

2021 年 3 月 31 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場４－６－１
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　　能登印刷株式会社